

(4) 藤屋敷遺跡

目 次

I 遺跡の位置と環境	125
II 調査の方法と経過	129
III 発見された遺構と遺物	131
1. 竪穴住居跡と出土遺物	131
2. 掘立柱建物跡と出土遺物	194
3. 焼土遺構と出土遺物	195
4. ピットと出土遺物	198
5. その他の遺構と出土遺物	201
6. 表土および地点不明の遺物	202
IV 遺構と遺物に関する問題点	208
1. 出土土器の観察と分類	208
2. 出土土器の組み合わせとその年代	215
3. 出土土器に関する問題点	220
4. 遺構の年代	221
5. 遺構の問題点	222
V ま と め	226

調査要項

遺跡所在地：宮城県古川市清滝字藤屋敷

遺跡記号：C C（宮城県遺跡地名表登載番号：27066）

調査期間：昭和48年7月23日～10月6日

調査面積：約6,000m²

発掘面積：約3,700m²

調査員：文化財保護課

技術主査 佐々木茂横、技師 藤沼邦彦、小井川和夫、加藤道男

嘱託 阿部 恵、斎藤吉弘

調査協力員：高橋多吉（石越町立石越中学校教諭）

木村敏郎（石巻市立住吉中学校教諭）

芳賀良光（宮城県佐沼高等学校教諭）

遊佐五郎（色麻村立色麻小学校講師）

千葉宗久（河北町立飯野川第二小学校教諭）

桜井伸孝（宮城県涌谷高等学校教諭）

菅原正則（ “ ” ）

調査補助員：笹原百合子（東北大学学生）

門間俊彦（東北学院大学学生）

清水 毅（ “ ” ）

田中礼子（ “ ” ）

青山 均（早稲田大学学生）

磯本明彦（ “ ” ）

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	126	第34図	第18住居跡出土遺物〔II〕	173
第2図	調査区の位置	130	第35図	第19・20住居跡	174
第3図	基本層位	131	第36図	第19住居跡出土遺物	175
第4図	第1・5住居跡	133	第37図	第20住居跡出土遺物	176
第5図	第2住居跡	134	第38図	第23住居跡	177
第6図	第2住居跡出土遺物	135	第39図	第23住居跡出土遺物	178
第7図	第3・4住居跡	137	第40図	第24住居跡	180
第8図	第3住居跡出土遺物	138	第41図	第24住居跡出土遺物〔I〕	181
第9図	第7住居跡	139	第42図	第24住居跡出土遺物〔II〕	182
第10図	第8住居跡	141	第43図	第25住居跡	184
第11図	第8住居跡出土遺物	142	第44図	第25住居跡出土遺物	185
第12図	第9住居跡	143	第45図	第26住居跡	186
第13図	第9住居跡出土遺物	144	第46図	第27住居跡	187
第14図	第10住居跡	147	第47図	第27住居跡出土遺物	188
第15図	第10住居跡出土遺物〔I〕	148	第48図	第28住居跡	190
第16図	第10住居跡出土遺物〔II〕	149	第49図	第28住居跡出土遺物	191
第17図	第10住居跡出土遺物〔III〕	150	第50図	第29住居跡	192
第18図	第11住居跡	151	第51図	第29住居跡出土遺物	192
第19図	第11住居跡出土遺物	152	第52図	第30住居跡	193
第20図	第12住居跡	154	第53図	第30住居跡出土遺物	194
第21図	第12住居跡出土遺物〔I〕	155	第54図	掘立柱建物跡	195
第22図	第12住居跡出土遺物〔II〕	156	第55図	焼土造構	196
第23図	第13住居跡	159	第56図	焼土造構竪穴部出土遺物	197
第24図	第13住居跡出土遺物	161	第57図	ピット83, 93	198
第25図	第14住居跡	162	第58図	ピット出土遺物〔I〕	199
第26図	第14住居跡出土遺物	163	第59図	ピット出土遺物〔II〕	200
第27図	第15住居跡	164	第60図	溝ピット出土遺物	201
第28図	第15住居跡出土遺物	165	第61図	表土および地点不明の遺物〔I〕	202
第29図	第16住居跡	166	第62図	表土および地点不明の遺物〔II〕	203
第30図	第16住居跡出土遺物	167	第63図	表土および地点不明の遺物〔III〕	204
第31図	第17・18住居跡	169	第64図	表土および地点不明の遺物〔IV〕	205
第32図	第17住居跡出土遺物	170	第65図	表土および地点不明の遺物〔V〕	206
第33図	第18住居跡出土遺物〔I〕	172	第66図	遺構配置図	227・228

表目次

第1表	土師器坏・高台付坏の色調	208	第8表	赤燒土器の色調	215
第2表	土師器器の色調	208	第9表	赤燒土器坏の法量	216
第3表	土師器坏の分類	210	第10表	土器觀察表①～③	216～218
第4表	土師器坏の法量	211	第11表	図示土器集計表	219
第5表	土師器器の分類	212	第12表	土器の組合せ	220
第6表	須恵器の色調	213	第13表	坏の法量	221
第7表	須恵器坏の法量	214	第14表	住居跡集計表	229

写 真 図 版 目 次

図版 1 第1・2住居跡	231	図版 12 第23住居跡	242
図版 2 第3・4住居跡	232	図版 13 第24住居跡	243
図版 3 第5・7住居跡	233	図版 14 第25住居跡	244
図版 4 第8住居跡	234	図版 15 第27・28住居跡	245
図版 5 第9住居跡	235	図版 16 第29・30住居跡	246
図版 6 第10住居跡	236	図版 17 掘立柱建物跡 ピット	247
図版 7 第11住居跡	237	図版 18 出土遺物 土師器	248
図版 8 第12住居跡	238	図版 19 出土遺物 土師器	249
図版 9 第13・14住居跡	239	図版 20 出土遺物 須恵器	250
図版 10 第15・16住居跡	240	図版 21 出土遺物 須恵器・赤燒土器	251
図版 11 第18・19住居跡	241		

I 遺跡の位置と環境

藤屋敷遺跡は、宮城県古川市清滝字藤屋敷に所在し、国鉄陸羽東線古川駅より北に約9kmの位置にある。

奥羽山脈から派生する陸前丘陵は、宮城県西部を南北にのび、県北西部で磐井丘陵、築館丘陵、玉造丘陵、加美丘陵などに分かれている。これらの丘陵を開析して東流する、迫川、江合川（北上川水系）や鳴瀬川（鳴瀬川水系）などの河川は、河谷沿いに段丘を形成しており、特に江合川、鳴瀬川流域においてよくみられる、さらにこれらの河川は丘陵の東側に仙台平野の一部である迫川低地、大崎低地を形成している。古川市の地形をみると、扇状地性低地である大崎低地が大半を占め、中央部を横断して江合川が東流している北部には、凝灰炭質砂岩を基岩とする築館丘陵がのびてきており、その南端部は多くの谷が入り込んでいたので樹枝状に分かれている。

藤屋敷遺跡は、枝分かれした丘陵の1つである 藤屋敷地区を東西にのびる丘陵の南斜面に立地している。遺跡の範囲は、遺物の散布からみて、東西が長く約1.8km、南北は約500mと考えられ、標高は35～40mである。遺跡内は緩斜面であり、調査地点付近はわずかに南に張り出した舌状の地形で、自動車道の路線はその西半を南北に通っている。

周辺の遺跡

藤屋敷遺跡の周辺- 古川市北部から高清水町南部、田尻町西部にかけては遺跡の数がかなり多い地域であり、特に丘陵南辺で密度が濃い。

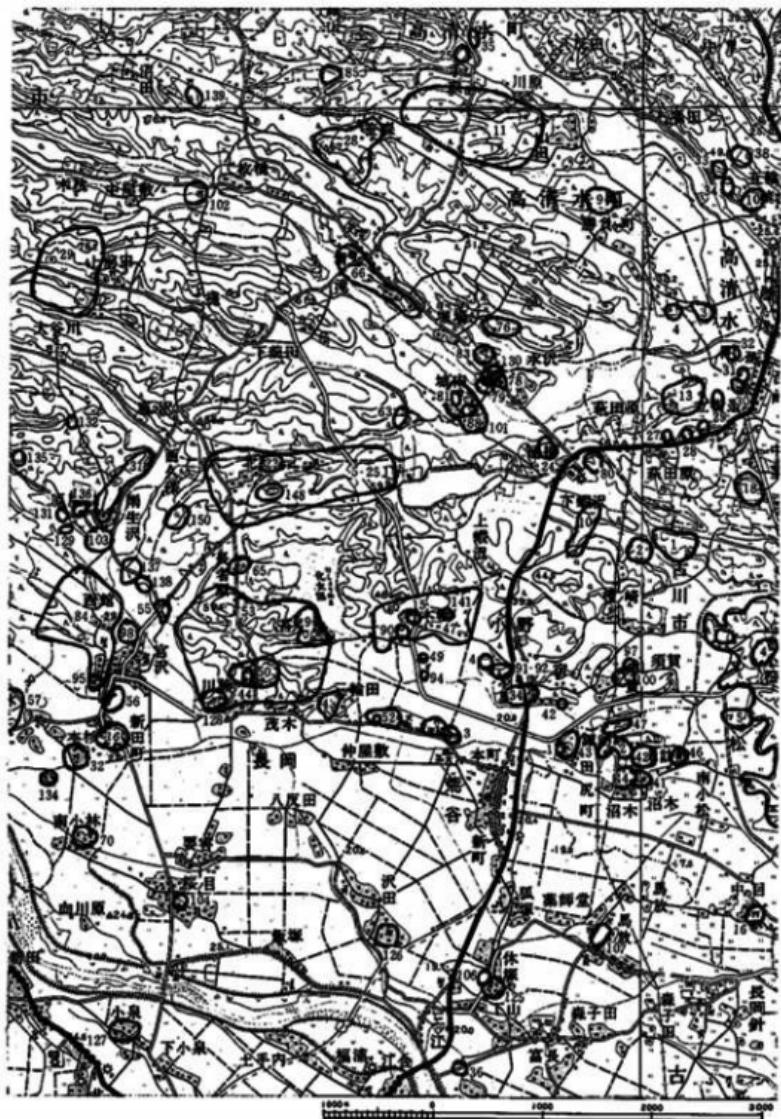
旧石器時代の遺跡には、長清遺跡があり、後期旧石器時代の石刃が出土している。

縄文時代の遺跡は、数が多く、大窪遺跡（早・前期）、笛森遺跡（前期）、萩田・北小松遺跡（晩期）などが知られている。

弥生時代の遺跡は、数が少なく、苔、谷、下蝦沢、新田前遺跡など数ヶ所が知られているにすぎない。

古墳時代の遺跡としては、日光山古墳群、小野横穴古墳群など県内有数の古墳群が知られており、羽黒遺跡などの集落跡もある。

奈良、平安時代になると、遺跡数は大幅に増加する。国史跡大吉山瓦窯跡は重弁蓮華文鬼板重弁蓮華文軒丸瓦など陸奥国府多賀城創建期の瓦を焼いた窯跡であり、国史跡宮沢遺跡は、昭和50・51年に東北自動車道路線敷内の発掘調査が行なわれて築地、土壙、溝による外部線が確認され、その規模が東西1,200m、南北800mにも及ぶ城柵、官街遺跡であろうとされている。さらに一慣地遺跡、三輪田遺跡、一ノ坪遺跡など古瓦の出土する遺跡も多く、北原遺跡、長清遺



第1図 周辺の道路

遺跡地名表 ① 古川市(市町村番号27)

遺跡番号	遺跡名	立地	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	立地	種別	時代
001	大庭遺跡	台地	包含地	縄文(前・中)	001	鴨ノ巣遺跡	台地	包含地	奈良・平安
002	花鳥遺跡	丘陵斜面	-	縄文(後)	002	外衣窯跡	丘陵斜面	窯跡	平安
003	新江川遺跡	河川敷	-	-	003	新寺館跡	-	城跡	近世
004	いり草園遺跡	丘陵	-	-	004	西能遺跡	台地	包含地	縄文・弥生・古墳・奈良
005	長者原遺跡	台地	-	-	005	城内窯跡	-	窯跡	奈良・平安
006	百ノ谷地遺跡	丘陵	-	弥生	006	城内窯跡	-	窯跡	奈良・平安
010	下船糸遺跡	丘陵斜面	-	弥生(後)	006	小野根穴古墳群 (朽木根支群)	丘陵	横穴古墳	-
014	稻荷寺古墳	分離丘陵	古墳	古墳(後)	007	小野根穴古墳群 (羽黒支群)	丘陵	-	-
015	小野根穴古墳群 (錦糸支群)	丘陵斜面	横穴古墳	-	008	小野根穴古墳群 (羽黒支群)	丘陵	-	-
016	新田町遺跡	台地	集落跡	弥生(後)古墳(前)	009	小野根穴古墳群 (白山支群)	-	-	-
023	北原遺跡	丘陵	包含地	奈良	010	小野根穴古墳群 (小高支群)	丘陵	-	-
024	下呉田遺跡	丘陵斜面	-	-	011	小野根穴古墳群 (池崎支群)	丘陵	-	-
025	長者原遺跡	台地	-	縄文	012	内林古墳群	台地	古墳	-
026	但森遺跡	丘陵	-	縄文(前)	013	小野根穴古墳群 (但崎支群)	丘陵	-	-
029	上前田遺跡	-	-	縄文(前)・平安	014	須賀遺跡	丘陵	-	-
031	野崎遺跡	丘陵斜面	-	弥生	015	内林古墳群	台地	古墳	-
032	一本杉遺跡	台地	-	-	016	小野根遺跡	丘陵	城館	近世
034	羽黒遺跡	丘陵	-	古墳	017	宮代城跡	台地	-	中世・近世
036	酒呑遺跡	自然探訪	-	-	018	須賀遺跡	丘陵	包含地	縄文(後)・古代
042	一貫寺遺跡	丘陵斜面	-	奈良	019	鴨ノ巣遺跡	台地	城館	近世
043	三輪田遺跡	丘陵	-	奈良・平安	020	明神館跡	丘陵	-	中世
044	川熊遺跡	丘陵斜面	-	奈良	021	雨生沢城跡	丘陵	-	-
047	蛇戸小高窯跡	-	窯跡	奈良・平安	022	石母田館跡	自然探訪	-	近世
049	岩崎古墳	丘陵	円墳	古墳	023	赤堀館跡	沖積平野	-	中世
050	長傳遺跡	丘陵	円墳・包含地	奈良	024	馬波館跡	-	-	-
051	細荷山遺跡	分離丘陵	-	奈良・平安	025	御館跡	自然探訪	-	近世
052	柳原山遺跡	-	包含地・横穴古墳	-	026	沢田城跡	-	-	中世
053	御史官跡遺跡	丘陵	城跡	-	027	小泉遺跡	-	包含地	-
055	虎塚遺跡	台地	包含地	-	028	川熊館跡	丘陵	城跡	中世
056	下田遺跡	-	-	-	029	西能A遺跡	若狭平野	包含地	縄文・弥生
057	新谷地遺跡	-	-	-	030	市ヶ坂遺跡	丘陵	城跡	中世
063	十八引沢遺跡	丘陵斜面	-	縄文(後) 奈良・平安	031	若林A遺跡	谷底平野	包含地	縄文・弥生
065	一本杉遺跡	台地	-	縄文・平安	032	大谷川逆沢遺跡	丘陵斜面	-	-
066	藤原遺跡	-	集落跡	平安	034	灰毫遺跡	自然探訪	-	縄文・奈良・平安
070	南小林遺跡	自然探訪	包含地	奈良・平安	035	間久田遺跡	丘陵	-	吉代
075	畠谷地古墳群	丘陵斜面	古墳	古墳	037	上谷遺跡	台地	-	弥生
076	北山圓古墳群	-	-	-	038	宇南遺跡	-	-	奈良・平安
077	生瀬街遺跡	-	包含地	縄文	039	清水御遺跡	-	墓	-
078	柳女塚跡	-	-	-	041	地代遺跡	丘陵	包含地	奈良・平安
079	越崎遺跡	-	-	古代	046	長原遺跡	-	-	旧石器・縄文
080	一坪遺跡	-	-	奈良・平安	150	丘陵斜面	-	-	奈良・平安

遺跡地名表 ② 高清水町(市町村番号44)

遺跡番号	遺跡名	立地	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	立地	種別	時代
003	藤ヶ崎遺跡	台地	包含地	縄文・古墳 奈良・平安	029	内野A遺跡	台地	包含地	縄文・平安
004	上原・崎遺跡 (新城館)	~	五輪塔	平安	030	松ノ木沢田遺跡C	~	~	平安
007	萩田遺跡	~	包含地	縄文(晚)・弥生	031	内野B遺跡	~	~	奈良末・平安
009	明宮遺跡	~	~	奈良	032	通川遺跡	~	~	平安
010	五輪遺跡	~	~	縄文・古墳	033	五輪B遺跡	~	~	奈良・平安
011	西手取遺跡(手取、堤下遺跡)	~	発蓋跡	縄文(早・前) 平安	034	五輪C遺跡	~	~	~
013	台町西遺跡	~	包含地	奈良	035	下田遺跡	冲積平野	~	~
018	中ノ茶遺跡	~	果苔跡	縄文・奈良 平安・中世	036	猪籠館跡	丘陵	城館	中世
022	宮ノ脇遺跡	丘陵	包含地 城	奈良・平安 中世末・近世	037	原野館跡	~	~	江戸
025	帝ノ沢遺跡	丘陵	包含地	縄文・奈良・平安	038	袖山遺跡	台地	包含地	奈良・平安
026	石沢遺跡	~	~	奈良・平安					
027	松ノ木沢田A 遺跡	台地	~	縄文・平安					
028	松ノ木沢田B 遺跡	~	~	縄文					

田尻町(市町村番号38)

遺跡番号	遺跡名	立地	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	立地	種別	時代
001	天神西横穴 古墳群	分離丘陵	横穴古墳	古墳(後)	041	招木館跡	丘陵	城館	中世
002	日向前横穴 古墳群	丘陵	~	~	042	大岡館跡	~	包含地 ・城館	奈良・平安・中世
003	小松寺跡	台地	寺院跡		043	天神山遺跡	分離丘陵	包含地	平安
004	小松橋跡	~	城郭?	古代	044	青水横穴古墳群	丘陵	横穴古墳	古墳
005	北小松岩田 西遺跡	丘陵	包含地	縄文(晚)	045	宮山遺跡	台地	包含地	奈良・平安
					047	愛宕山遺跡	丘陵	~	~
					050	新田橋跡	~	城郭	~

跡などの集落跡も知られている。

中、近世になると、遺跡は館跡がほとんどであり、明神館跡、市ヶ坂館跡などがある。

II 調査の方法と経過

調査の方法

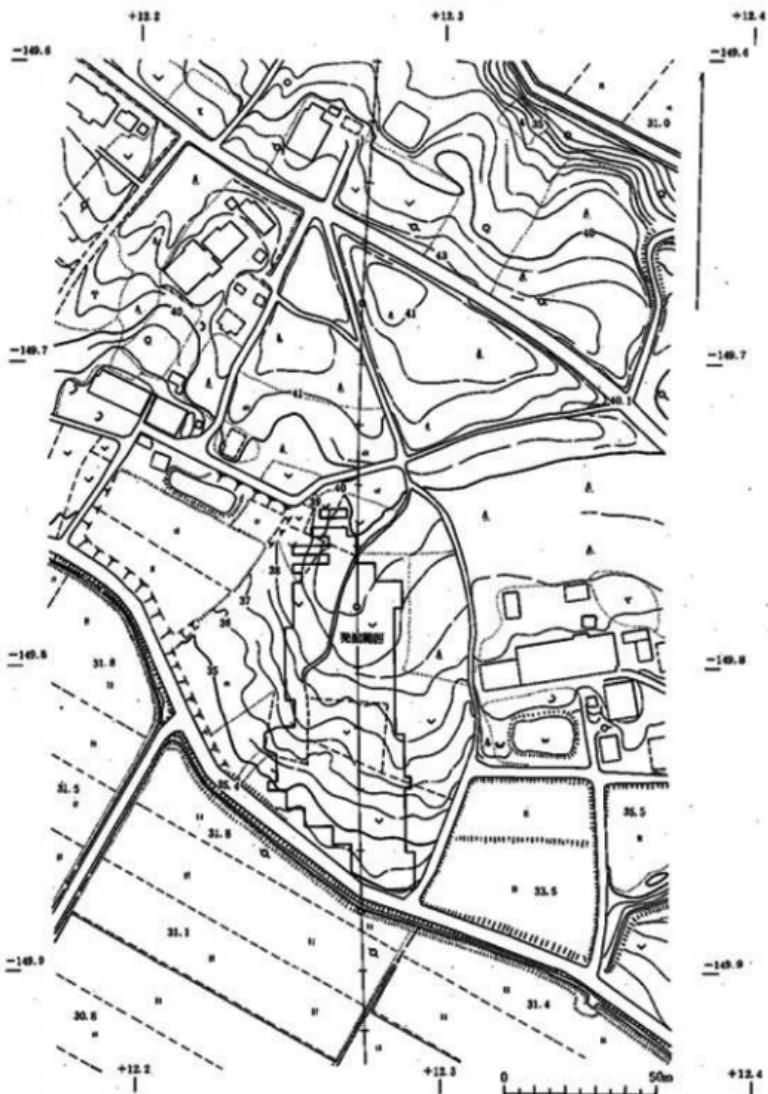
調査区の設定は、東北自動車道の中心杭を利用した。自動車道の路線は、南に張り出した方状の地形の西半を南北に縦断しており、地形の方向に沿っていたので、中心杭 S T A 362 + 40 と S T A 362 + 60 を結ぶ線、およびこれに直交する線を基準としてグリッドを設定した。グリッドは 3m 単位であり、南北を数字で、東西をアルファベットで表示し、それらの組み合わせでグリッド名を付した。

調査は、まず東西に 5~7 グリッドをつなげたトレーニングを 3m おきに設定し、遺構の存在とその分布を確認した。さらに遺構の分布する範囲を拡張し、遺構の精査を行なっている。発掘は、基本的には分層的発掘により遺構の確認、精査を行ない、さらに構築方法の検討を行なっている。しかし個々具体的には調査時から現在までの間に調査の技術と遺構に対する認識とが大いに向上しており、現時点でみれば不備な点がめだつ。

遺構の実測図は遺り方測量によって平面図を作製し、レベルを記入している。また必要に応じて断面図を作製した。実測図の縮尺はすべて $\frac{1}{50}$ である。なお層の注記の際に、土色帳および土壤サンプルは使用していない。

調査の経過

発掘調査は昭和 48 年 7 月 23 日に開始した。調査の対象範囲は東北自動車道の路線敷内の畠地約 6,000 m² である。まずトレーニング掘りにより、南側から表土排除を始めた。大部分は表土下が地山面であるが、中央部には表土と地山の間に堆積層がみられた。この堆積層からは、現代の遺物が出土している。遺構確認作業の結果、北西部を除き、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、ピット、溝などの遺構が確認され、遺構の分布する約 3,700 m² について拡張し、遺構の精査を行なった。9 月中旬からは遺構の精査が残り少なくなったので、遺り方を設定し、実測図の作成を並行させた。その後写真撮影を行ない、10 月 6 日に調査は終了した。なお 7 月後半から 8 月にかけて、学校の夏季休業期間には、教職員の調査協力を得ることができた。また調査途中の 9 月 1 目には、市民、研究者を対象に現地説明会を行なっている。



第2図 調査区の位置

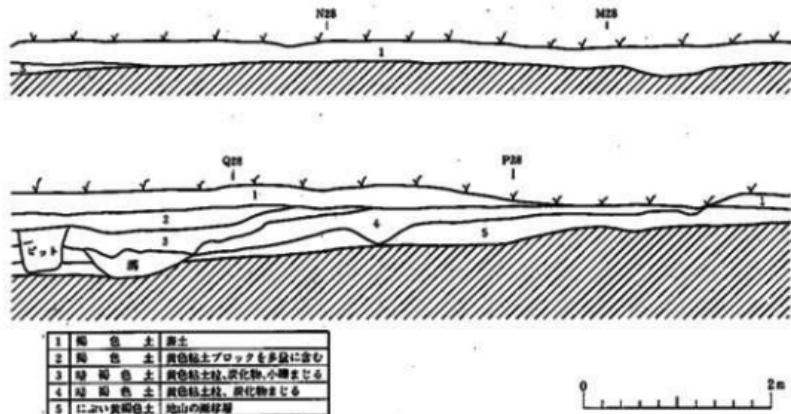
III 発見された遺構と遺物

調査範囲内の基本層序は表土（第1層）のみである。ただし中央部西側には、表土と地山の間に4枚の層（第2～第5層）東側には1枚の層がみられる。西半の第2層は橙色土あるいは暗褐色土、第3層は暗褐色土あるいは黒色土、第4層は褐色土あるいは暗褐色土、第5層は暗褐色土、東半の第2層は褐色土である。西半第5層は地山（黄色粘土）の漸移層であるが、他の層は、調査の経過で記したように、近年になって堆積したものと考えられる。

発見遺構としては、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、焼土遺構、ピット、溝、井戸、池などがある。遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器、土製品（支脚、鞆品）石製品（石器、剥片、砥石）鐵製品（鎌、刀子、紡錘車、釘）などが出土している。

1. 竪穴住居跡と出土遺物

竪穴住居は26軒発見された。分布状況をみると、中央部から北半にかけて21軒がまんべんなく分布し、南半は掘立柱建物跡が検出された部分とその西側には発見されず、南端に6軒存在する。すべて地山面で確認されている。なお発掘時には住居跡番号を第1から第34まで付したが、精査の過程で、第6、21、22、31～34住居跡は欠番となった。



第3図 基本層位

第1住居跡

〈位置〉 F・G-13・14区にある。

〈重複〉 第5住居跡と重複する位置にある。新旧関係は確認できなかった。

〈平面形〉 南半はすでに失なわれている。平面形は残存する北半の輪郭からみて方形と思われる。北辺長は4.2mである。

〈堆積土〉 残りは良くなく1層のみみられ、ごく軟かい黒色土である。

〈壁〉 北壁及び、東、西壁の北半が残存している。壁高は最も高い北壁中央部が16cmほどで、立ち上がりはゆるやかである。地山の土そのままを壁としており軟かい。壁面は細かな攢乱がみられ凹凸が多い。

〈床面〉 地山の土をそのまま床面としている。凹凸がなく軟かい。表面は黒色土によるよごれが多い。南に向ってわずかに傾斜している。

〈柱穴〉 住居の輪郭が確認された範囲内には、4個のピットがある($P_1 \sim P_4$)。いずれも柱痕跡は確認されておらず、配置に規則性もなく、主柱穴は不明である。

〈周溝〉 西壁沿いにみられる。幅19~24cm、深さ2~5cmで、断面形は「U」字形である。

ピット番号	1	2	3	4
深さ(cm)	7	28	8	13

出土遺物- 土師器、須恵器の破片が出土している。いずれも堆積土からの出土遺物であり、住居に伴うものはない。図示できるものもない。

第5住居跡

〈位置〉 F・G-12区にある。

〈重複〉 第1住居跡と重複する位置にあるが、第1住居跡で記述したように、新旧関係は不明である。

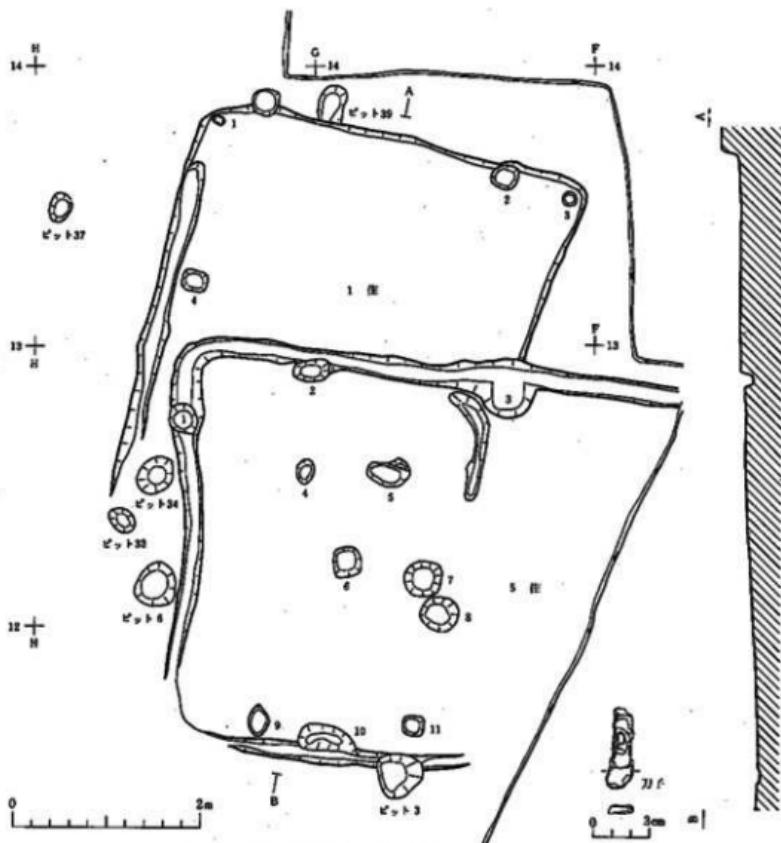
〈平面形〉 住居廃絶後の削平、攢乱が著しく、北東部では壁及び床面が確認されたが、他はすでに壁、床面がなく、周溝のみが検出された。そのため全体形は不明であるが、西辺長は4mで、北辺の周溝は4.7mまで確認されているところから、平面形は長方形と推定される。

〈堆積土〉 北東部にのみ残存する。1層だけで、ごく軟かい黒色土である。

〈床面〉 残存部では地山の土そのままを床としている。軟かく凹凸が多い。

〈壁〉 北壁東半が残存している。壁高は最も高い東端で約8cmで立ち上がりは垂直に近い。全体に地山の土をそのまま壁としている。壁面は軟質で攢乱もみられるがほぼ平坦である。

〈周溝〉 北、西、南辺が確認された。北、南辺の周溝は直線的であるが、西辺は内側にへこんでいる。幅は18~24cm、深さは最も深い北側中央部で10cm、断面形は「U」字形である。



第4図 第1、5住居跡

(柱穴)周溝の確認された範囲内から11個のピットが検出されている。いずれもすでに床面が削平された部分の地山面で確認されており、住居に伴うかどうか不明である。また、配置などから主柱穴と推定できるものもない。

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
深さ(cm)	27			10	18	53	10	9	6	12	20

(出土遺物)土師器(甕)、鉄製品(刀子)が出土している。いずれも堆積土から出土しており、住居に伴う遺物はない。

(鉄製刀子) 身の破片である。銹化が激しい。

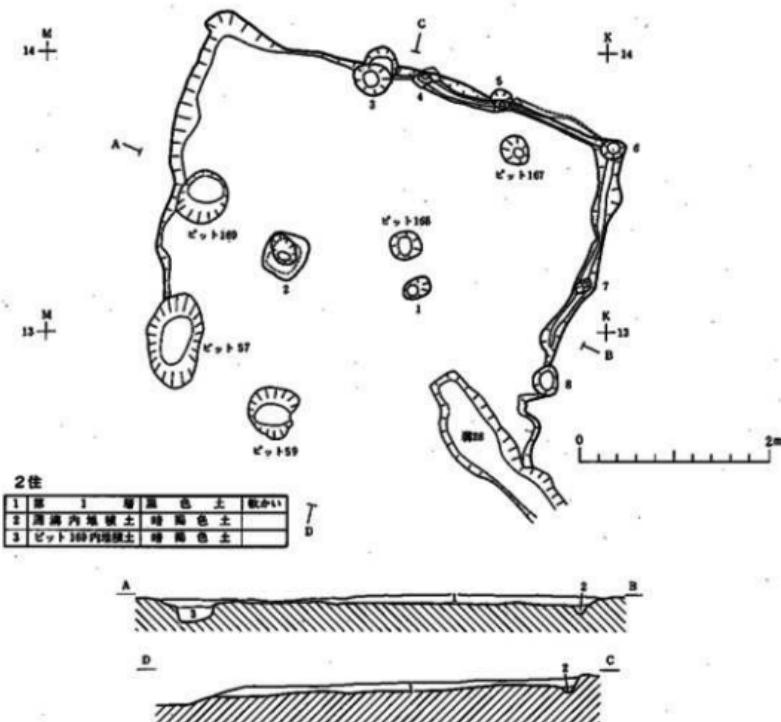
第2住居跡

〈位置〉 K L-12・13 区にある。

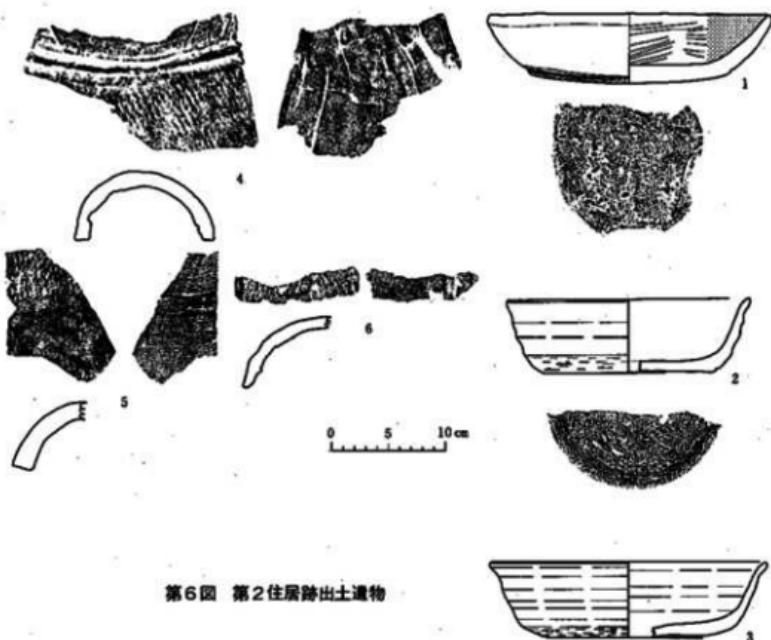
〈平面形〉 南半はすでに後世の削平のため失なわれ、また溝 28、ピット 57・59・167・168・169 にきかれている。平面形は残存する北半の輪郭からみて方形と思われる。北辺長は 4.7m である。

〈堆積土〉 住居跡が確認された面から床面までは浅く、堆積土は 1 層のみ認められた。黒色土である。

〈壁〉 北壁と東・西壁の北半が検出された。壁高は最も高い北東隅で 15 cm である。立ち上がりは、西壁と東壁はゆるやかであるが、北壁では西半が垂直に近く、東半は外側にえぐり込んで



第5図 第2住居跡



第6図 第2住居跡出土遺物

いる。全体に地山の土をそのまま壁としている。壁面は凹凸が多い。

〈床面〉床面は、ほぼ壁の残存範囲内で確認された。地山の土をそのまま床としている。上面は細かな凹凸が多く、中央部がやや硬いが他は全体に軟かい。南に向かってわずかに傾斜している。

〈柱穴〉住居内には 13 個のピットがある。ピット 4 は、柱痕跡が確認されており、主柱穴の可能性が強いが、他に組み合うものがない。8・9・10・11・12・13 は壁に接しており、ほぼ等間隔に位置するので壁柱穴の可能性も考えられる。

〈周溝〉北壁東半から、東壁北半にかけての壁沿いにみられる。幅 11~23 cm、深さ 8~10 cm で断面は「U」字形である。北壁沿いの部分では、住居の壁と周溝外側の壁との境に段がつく。段は床面とほぼ同じ高さである。また東半は外側にえぐり込まれている。

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8
深さ(cm)	20	20	28	22	35	40	15	10

（出土遺物）土師器（壺、甕）、須恵器（壺、甕瓦）が出土している。住居に伴うと考えられる遺物には、床面出土のものがある。

住居に伴う遺物

土師器壺(1)- 底部形態は丸底である。体部下端に沈線が巡る。器面調整は、外面の沈線から上部にヘラミガキ、下部にヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。

須恵器壺(2)- 口径に較べ、底径がかなり大きい壺である。体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが加えられており、切り離し技法は不明である。

堆積土出土遺物

須恵器壺(3)- 体部下半が張り、口縁部がわずかに外反する。体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが加えられ、切り離し方法は不明である。器形は体部下半がふくらむ。

瓦- 丸瓦である。凸面は縄叩き目のち一部にヘラケズリを施している。凹面には布目が残っている。4は凹面に隆帯をめぐらすことによって、玉縁部を区切っている。玉縁部の凸面はナデが施されている。

第3住居跡

（置）G・H-10・11区にある。

（重複）第4住居跡と重複し、これに切られている。

（平面形）南半はすでに床面下まで削平を受けている。平面形は残存する北半からみて方形と思われる。北辺長は4.1mである。

（堆積土）1層のみ確認された。黒色土である。

（壁）北壁及び、東、西壁の北半が残存する。壁高は最も高い北東コーナーで9cmとわずかであり、立ち上がりはゆるやかである。壁面は地山の土そのままであり、細かな攢乱、凹凸が多い。

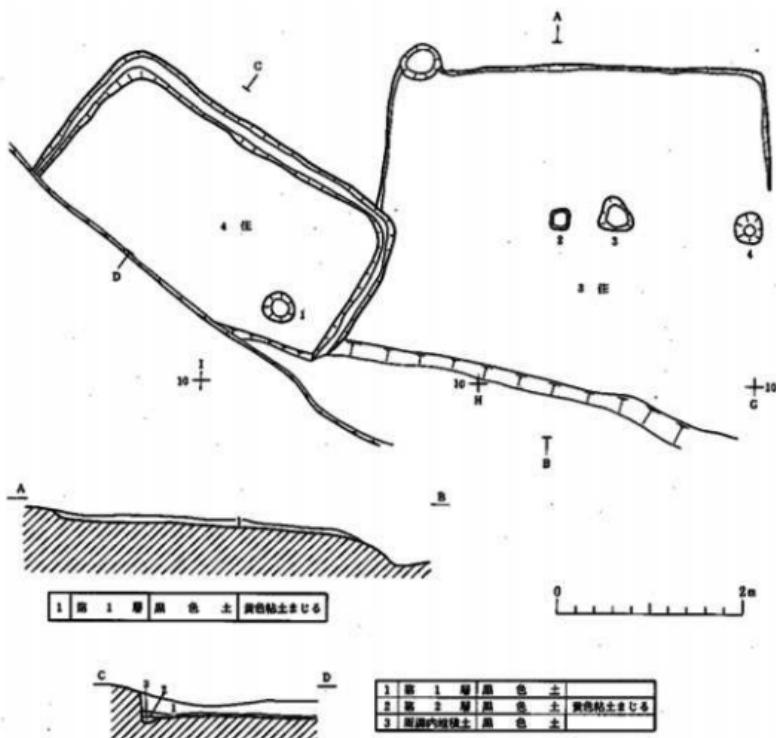
（床面）全体に地山の土をそのまま床としている。ゆるやかな凹凸がみられ、さほど硬くない。南に向って傾斜しており、北壁下端にくらべて南端は約15cm低い。

（柱穴）住居内にピットは4個みられる。いずれも柱痕跡は確認されておらず、配置に規則性もない。主柱穴と推定できるものはない。

ピット番号	1	2	3	4
深さ(cm)	14	10	13	11

（出土遺物）土師器（甕）、須恵器（壺、甕）が出土している。住居に伴うと考えられる遺物としては、床面・ピット（Pit4）出土のものがある。

住居に伴う遺物



第7図 第3、4住居跡

須恵器杯(1)- 口径に較べて器高がかなり高いものである。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリが加えられ、切り離し技法は不明である。

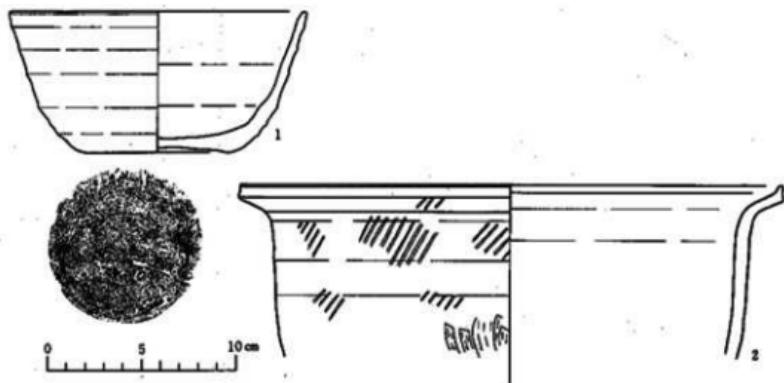
須恵器甌(2)- 最大径が口縁部に位置するものである。頸部がわずかにくびれて口縁部は外傾し、口端部が上方に突き出す。体部の最大径は上端にある。

第4住居跡

〈位置〉 H・I-10 区にある。

〈重複〉 第3住居跡と重複し、これを切っている。

〈平面形〉 南半はすでに削平されている。平面形は残存する北半からみて方形と推定される。



第8図 第3住居跡出土遺物

北辺長は3.6mである。

〈堆積土〉2層に分けられる。第1層は黒色土であり、全体に分布する。第2層は黄色粘土を含む黒色土であり、床面上にうすく堆積している。

〈壁〉北壁と東、西壁の北半が現存する。壁高は14~35cmで立ち上がりは垂直に近い。壁面は3住と重複している北東コーナーから東壁にかけての上端が第3住の堆積土であり、その下部と他の部分は地山の土そのままである。攪乱は少なく平坦で硬い。

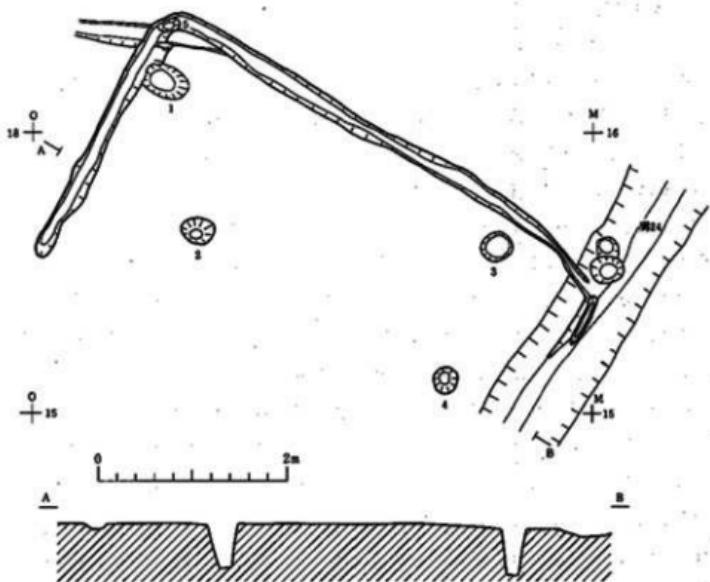
〈床面〉地山の土をそのまま床面としているが、わずかに黒色土のよごれがみられる。ごく平坦で硬い。

〈住居〉住居跡の確認された範囲内には、1個のピットがある。柱痕跡はなく、他に組み合うピットもないるので主柱穴がどうか不明である。

〈周溝〉壁直下にみられ、途切れることなく続く。幅は12~26cm、深さ5~11cmで、断面は底面が丸味をもち「U」字形に近い。壁は外側が垂直に近い立ち上がりを示すが、内側はゆるやかである。

ピット番号	1
深さ(cm)	12

〈出土遺物〉土師器(壺・甕)、須恵器(壺・甕)が出土しているが、小破片で図示できず、また堆積土出土のもののみで、住居に伴う遺物はない。



第9図 第7住居跡

第7住居跡

〈位置〉 M・N-15・16区にある。

〈平面形〉著しく削平されているため、壁、床面まですでに失なわれており、周溝の1部が検出されたにすぎない。残存する周溝の形態からみると、平面形は方形と思われ、北辺長は4.7mである。

〈周溝〉北辺と、西辺の北半、東辺の北端が検出されている。幅は8~24cm、深さは最も深い北西コーナーで約8cmである。断面は「U」字形で壁面、底面は細かな凸凹がみられ、北西コーナーにはピットが1個ある。

〈柱穴〉周溝の確認された範囲内で、ピットは5個確認されている。いずれも住居跡に伴うものかどうかわからず、柱痕跡は確認されていないが、ピット2、4は対を成して位置し、深いので主柱穴と思われる。

ピット番号	1	2	3	4	5
深さ(cm)	11	47	26	49	9

〈出土遺物〉土師器(甕)の小破片がごく少量出土している。

第8住居跡

〈位置〉 H・I・J-22・23区にある。

〈重複〉 ピット160-165に切られている。またピット170は床面下で検出された。

〈平面形〉 西壁の南半と南壁の西半はすでに削平されて失なわれているが、周溝および床面の残存範囲で住居の輪郭が確認された。長軸 4.2m× 短軸 3.4mで、平面形は長万形である。住居内面積は約 14.0 m²である。

〈堆積土〉 確認面から床までが浅く、南側は削平されているため、残りはよくない。残存する堆積土は2層に分かれる。第1層は赤褐色土で、住居跡全体に分布し、北端を除いて床面に達している。第2層は炭化物と焼土の層であり、北壁沿いの床面上に堆積している。

〈壁〉 南西部は削平されている。残存部での壁高は最も高い北壁で約 11 cmであり、立ち上がりは垂直に近い。壁面は地山の土であり、硬いが、細かな凹凸が多い。

〈床面〉 西側中央部はピット170の埋め土上面を、他は地山の土を床面としている。上面はほぼ平坦でありごく硬い。南側に向かって傾斜しており、北端と南端では約 10 cmの差がある。ピット170と重複している部分は周囲よりやや高く、特に硬くしまっている。また床面には、炭化物と焼土ブロックがいくつかみられる。

〈柱穴〉 住居内には2個のピットがみられる。柱痕跡は確認されておらず、配置に規則性もみられないでの、主柱穴がどうか不明である。

〈周溝〉 東辺中央部、北辺東端、および西辺から南辺にかけての壁直下にみられる。部分的に途切れています。幅は12-30 cm、深さ2-9 cmで、断面形は底面が丸く「U」字形である。

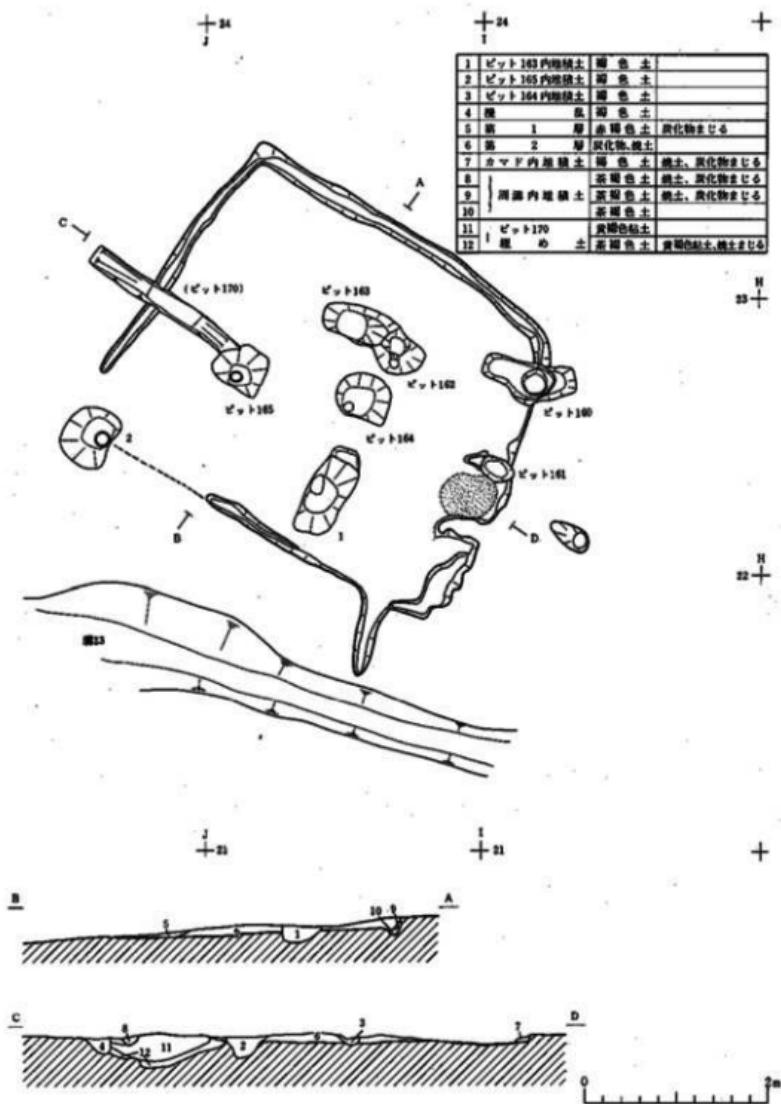
〈カマド〉 南壁中央部やや東よりに付設されている。軸方向はS-66°-Eである。カマド付近は掘しが激しく、部分的には床面にまで及んでいるが、燃焼部の一部と煙り出しピットが現存する。燃焼部は住居内に構築されており、幅100 cm、奥行60 cm、高さ10 cmで天井部がすでに失なわれ、左右側壁が残存する。住居の壁近くにはピット161によって壊されている。燃焼部の底面は周囲の床面よりやや低く皿状である。底面の大部分と壁の一部は熱を受けて赤変し硬い。煙道は現存しないが、本体奥壁から外側 80 cmのところに煙り出しのピットがみられる。

構築方法 左右両側壁は、地山の土を掘り残し、削り出して作られている。

〈その他の施設〉 ①床面の東壁中央近くは、周囲の床面よりやや高くごく硬い。出入口の可能性が考えられる。またこの部分はピット170と重複している。ピット170は径 170 cmほど円形である。堆積土は黄色粘土が大部分であり、人為的に埋められたものと思われる。

②住居跡の南東部から外側にのびる溝がある。住居内堆積土での切り合は認められない。幅は約 15 cm、深さは約 5 cmで、外方へ 80 cmまで確認された。底面は外方に向かって傾斜している。

ピット番号	1	2
幅 (cm)	50	52



第10図 第8住居跡

(出土遺物) 土師器(壺、甕)、須恵器(壺、甕)、が出土している。住居に伴うと考えられる遺物としては、カマド内、ピット内出土の土器がある。

住居に伴う遺物

土師器壺(1) 製作に口クロを使用している。体部は丸みをもって外傾し、口縁部がわずかに外反する。外面底部は磨滅のため切り離し方法再調整の有無は不明である。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

土師器甕(2) 口縁部から体部上半にかけて現存する。口クロを使用している。頸部から口縁部にかけて外反し、口縁部上半は上方に折れ曲がる。

第9住居跡

〈位置〉 L・M-24・25区にある。

〈重複〉 住居南半で2本の溝(溝5,30)と、北東隅でピット(ピット155)と重複しこれらに切られている。

〈平面形〉 西壁と南壁は検出されていないが、床面の範囲によって輪郭が推定される。それによると、平面形は長軸4.3m×短軸3.5mの東西に長い長方形である。また住居内面積は約15.2m²である。

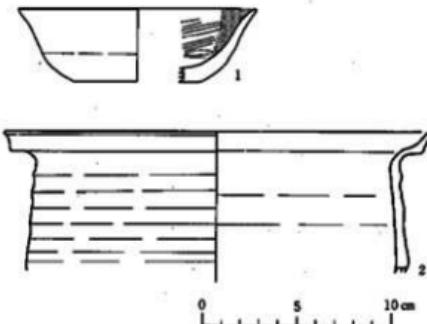
〈堆積土〉 溝、ピットなどにより攪乱されている部分が多い。残存部では2層に分かれ。第1層は暗褐色土であり、全体に分布し、床面に接する部分が多い。残存部では褐色土であり、床面のところどころにうすく堆積している。

〈壁〉 北壁と東壁が残存している。残存部での壁高は最も高い北東部で15cmである。立ち上がりはゆるやかであり、下端は丸味をもつ。壁面は全体に地山の土そのままであり、凹凸が多く硬い。

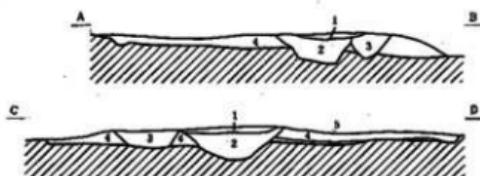
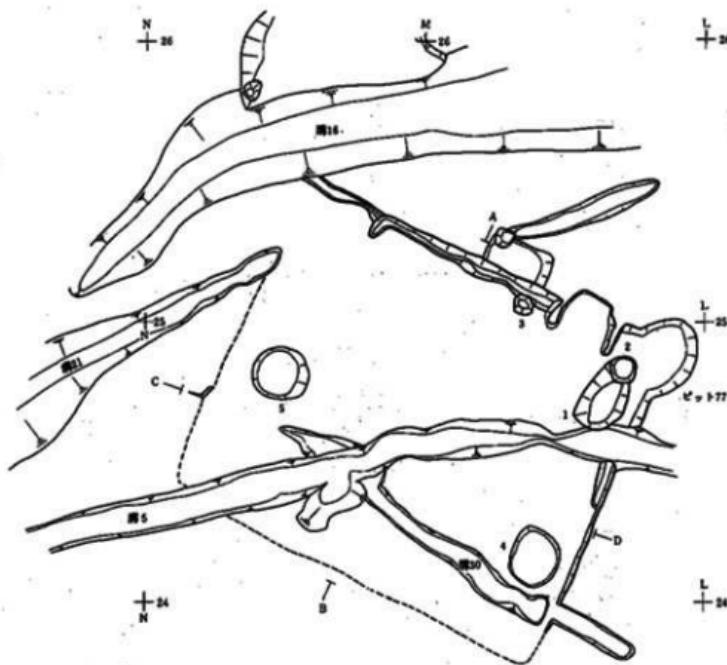
〈床面〉 全体に地山の土そのままを床面としており、硬く、細かな凹凸がある。北東隅から南西隅に向かって、傾斜し、高低差は約10cmである。

〈柱穴〉 住居内には、5個のピットがある。いずれも柱痕跡が確認されておらず、配置に規則性もない。主柱穴がどうか不明である。

〈周溝〉 北壁のカマド左側にみられる。幅は5~20cm、深さは3~5mで、断面形は、半円形である。底面は凹凸が多い。



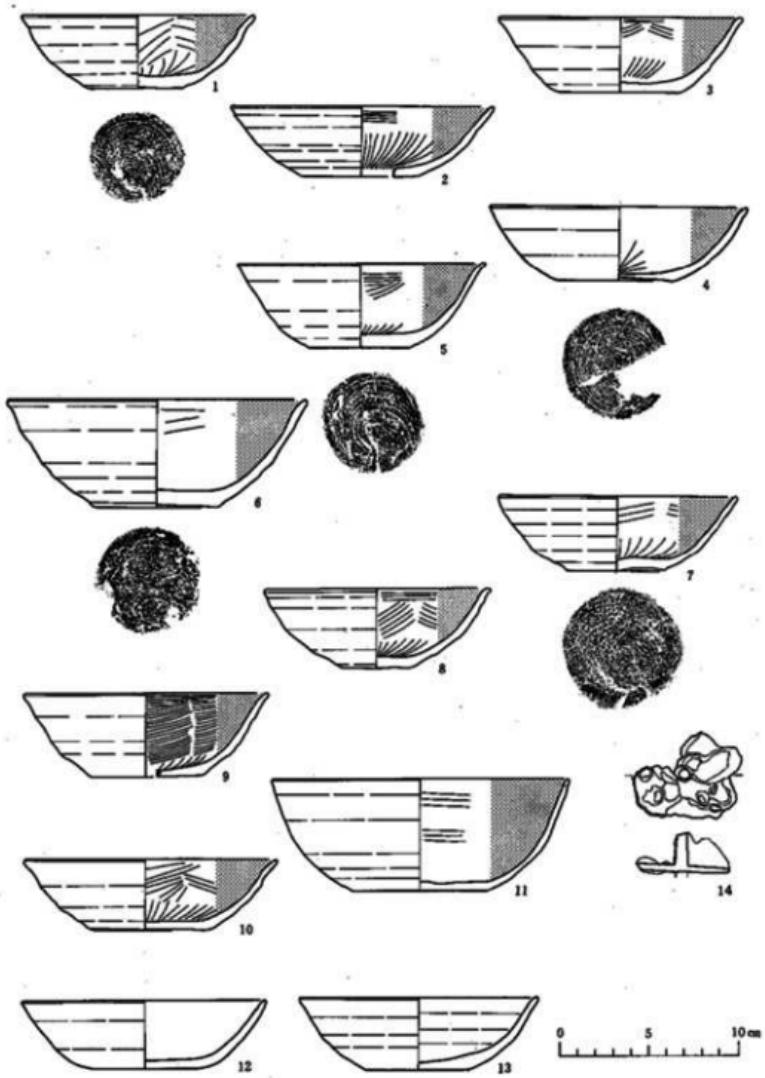
第11回 第8住居跡出土遺物



1	素 土	
2	底5内埋土	黒褐色土
3	底30内埋土	黒褐色土
4	底 1 層	時褐色土 炭化物、黄色粘土粒を含む
5	底 2 層	時褐色土

0 2m

第12図 第9住居跡



第13図 第9住居跡出土遺物

（カマド）北壁東よりに付設されている。方向はN-29°-Eである。煙道部は検出されていない。燃焼部は、住居内外にまたがって構築されており、幅77cm×奥行54cm×高さ15cmである。天井部はすでになく、左右側壁が残存する。内部の堆積土には焼土、炭化物が混じっているが、底面、側面、奥壁とも熱を受けた痕跡は顕著でない。

構築方法- 側壁の前半分は地山を掘り残し、奥半分は、住居外に地山をえぐり込んで削り出している。また、カマドの左右には、1個づつピットがある（ピット2、3）。これらはカマドをはさんで対を成しており、カマドに関連した柱穴の可能性がある。

（貯蔵穴状ピット）カマドの右側から、貯蔵穴状ピットが検出された。堆積土に焼土のブロック、炭化物、黄色粘土ブロックが混じり、出土遺物も多い。

ピット番号	1	2	3	4	5
深さ(cm)	23	23	12	10	12

（出土遺物）土師器（壺、甕）、須恵器（壺、甕）紡錘車が出土している。住居に伴うと考えられる遺物としては、カマド内、貯蔵穴状ピット内、ピット内出土遺物がある。

住居に伴う遺物

土師器壺（1-4） 製作に口クロを使用している。体部はわずかに丸味をもち、口縁部は直線的に外傾する。底部には回転糸切り痕を残し再調整は行なわれていない。内面はヘラミガキが加えられ、黒色処理されている。

12は口縁部から体部にかけて磨滅が激しく、土師器、赤焼土器のいずれか不明である。底部には回転糸切り痕を残し再調整は行なわれていない。

堆積土出土遺物

土師器壺（5-11） 製作に口クロを使用し、全体に丸味をもって立ち上がるものと口縁部がわずかに外反するものがある。底部に回転糸切り痕を残して再調整はなく、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。

須恵器壺（13） 底部に回転糸切り痕を残し、再調整は行なわれていない。

鉄製紡錘車（14） 円盤は径5.2cm、厚さ0.4cmである。軸は断面が径0.7cmの円形で、長さ2.4cmほど現存している。

第10住居跡

（位置）J・K-34・35区にある。

（重複）溝1に切られている。また、柿の木の根によって堆積土、壁、床面の一部が壊されている。

（平面形）長軸4.5m×短軸4.3mの正方形である。住居内面積は約19.7m²である。

〈堆積土〉住居内の堆積土は、3層に分かれる。第1層は暗褐色土であり、東、西壁沿いを除き、ほぼ全体に分布する。第2層は、黒褐色土であり、住居中央部に分布し、床面に達する。第3層は、褐色土であり、地山の黄色粘土が多量に混じる。壁沿いの床面上に堆積している。

〈壁〉壁高は10~36cmで垂直に近い立ち上がりを示す。全体に地山の土を壁としており、壁面は凹凸がなく平坦である。

〈床面〉地山の土をそのまま床としているが、ところどころ暗褐色土でよごれている。細かな凹凸がみられ、ごく硬い。

〈柱穴〉住居内に11個のピットがみられる。このうち、ピット5、6、8、9は、形態が整っていることと、ほぼ方形に位置することから、主柱穴と思われる。ただし南西隅のピット9は、1号カマドの手前ごく近くにあり1号カマド内に堆積している焼土がピット9の上に及んでいることからみて、2号カマドに伴う柱穴と考えられる。1号カマドに伴った南西隅の柱穴は不明である。

〈カマド〉2個所にある。

1号カマド：南壁西半に付設されている。方向はS-8°-Eである。燃焼部のみで、煙道は検出されなかった。燃焼部は、壁に接して住居内にある。幅94cm、奥行46cm、高さ12cmで天井部は、すぐではなく、左右側壁が残存する。内部には、天井あるいは側壁の崩落したものらしい堆積土がみられる。底面の高さは、周囲の床面とほとんど変わらない。燃焼部の床面中央部と、両側壁内面は、熱を受けて赤変し硬い。奥壁に焼け面はみられない。

構築方法- 側壁は、黄色粘土を貼りつけて構築している。

また、カマドの両脇には、ピットがあり（ピット3、10）カマドに関連した柱穴の可能性がある。

2号カマド：東壁の中央部やや南よりに付設されている。方向はN-86°-Eである。煙道は検出されていない。燃焼部は壁に接して住居外にあり、天井部はすぐではない。幅50cm、奥行50cm、高さ16cmで底面は、中央部がやや低い皿形を呈し、左右の側壁および、奥壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。燃焼部の底面は後端近くと左側壁が熱を受けて赤変し硬い。

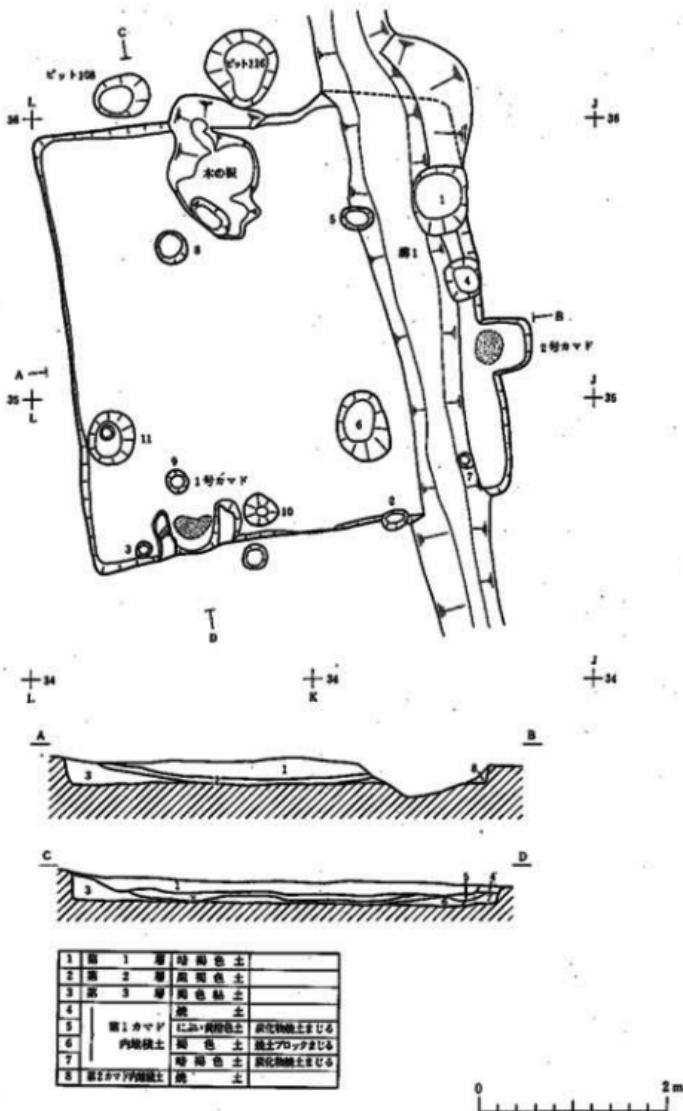
構築方法- 壁をえぐり込んで作られている。

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
深さ(cm)	17	27	3	15	52	25	15	22	23	15	19

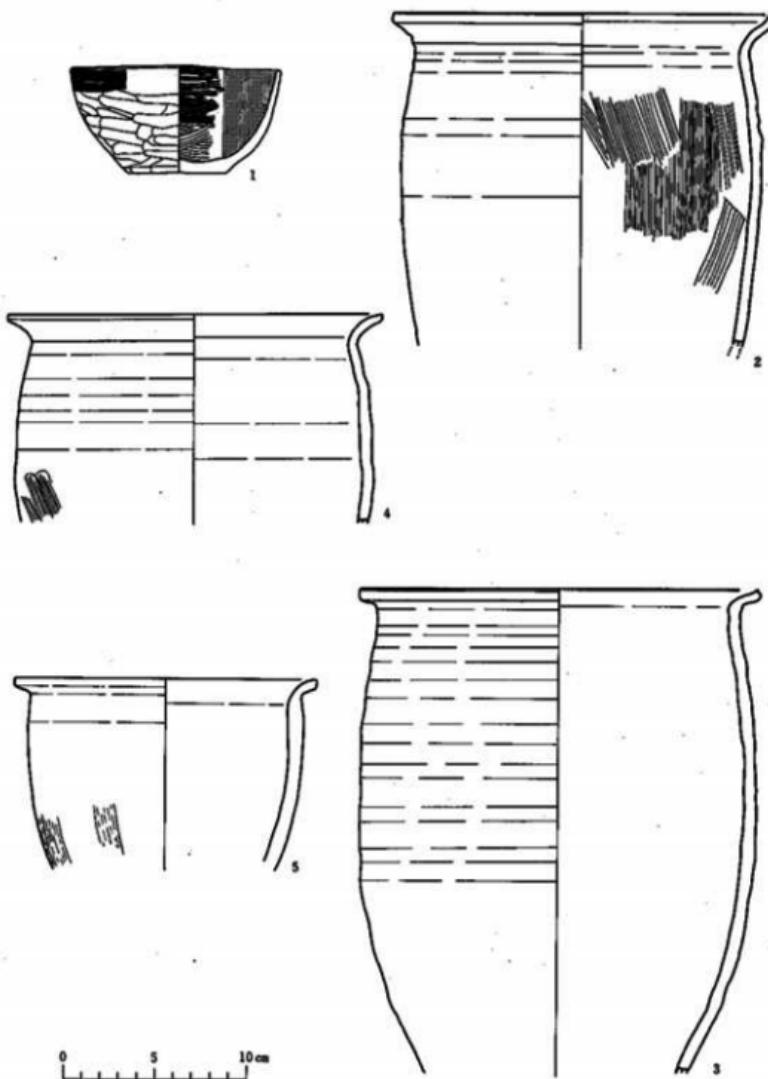
〈出土遺物〉土師器（壺、甕）、須恵器（壺甕）、赤燒土器（甕）が出土している。住居に伴うと考えられる遺物には、第1、2カマド内およびピット内出土の遺物がある。

住居に伴う遺物

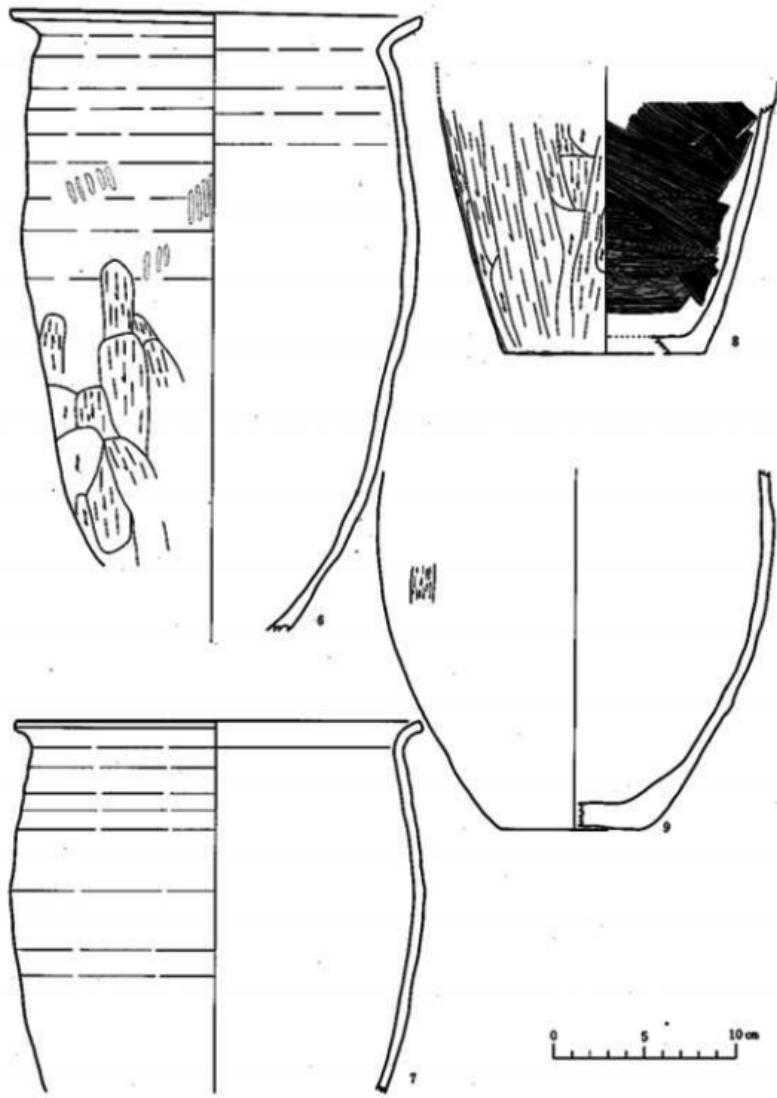
土師器甕（2~9）製作に口クロを使用しており、口径が器高より小さいものと大きいものがある。いずれも最大径は口縁部にあり、体部最大径の位置は体部中央あるいは上半であ



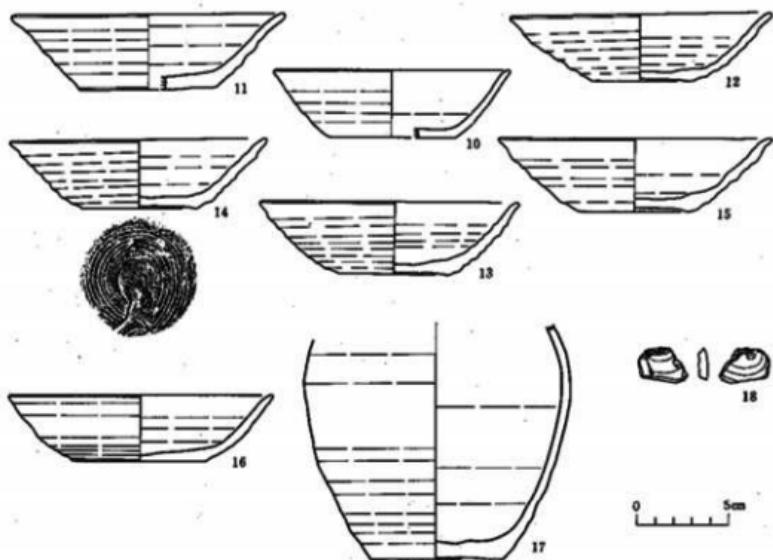
第14回 第10住居跡



第15図 第10住居跡出土遺物〔I〕



第16図 第10住居跡出土遺物 (II)



第17図 第10住居跡出土遺物〔III〕

る。口縁部は外傾あるいは外反する。口縁部端部が上方に突き出すものと、丸くおさまるものとがある。底部の器形は不明である。外面にはすべてロクロ調整がみられ、体部下半にヘラケズリが加えられる。ロクロ調整前に叩き目の施されるものもある。内面はロクロ調整のもの、ロクロ調整のちヘラナデが加えられるもの、調整不明のものがある。

8、9は体部下半以下のものであり、ロクロ使用の有無が不明である。器形は口径より器高が高い長胴形と推定される。

須恵器壺(10・11) 体部から直線的に外傾する。底部切り離しが回転糸切り技法であり、再調整はみられない。

赤焼土器甕(17) 口縁部を欠いている。体部は内外面ともロクロ調整が施されており、底部に回転糸切り痕を残し、再調整はみられない。

他に剥片が1点出土している(18)。

堆積土出土遺物

土師器壺(1) 平底のものである。体部から口縁部まで丸味をもって外傾する。器面調整は外面口縁部が横ナデ、体部がヘラミガキ、底部は不明である。内面は口縁部から体部上半に横

ナデ、体部下半から底部にヘラミガキが施され、黒色処理されている。

須恵器坏(12~16) 体部からわずかな丸味をもって外傾し、そのまま口縁部にいたるものと、口縁部が外反気味になるものとがある。

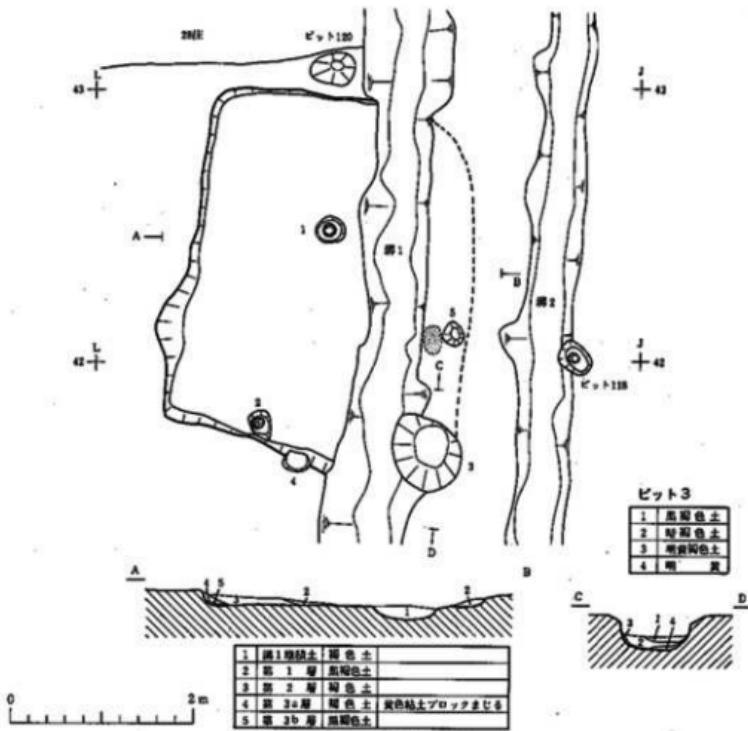
第11住居跡

〈位置〉 J・K-41・42区にある。

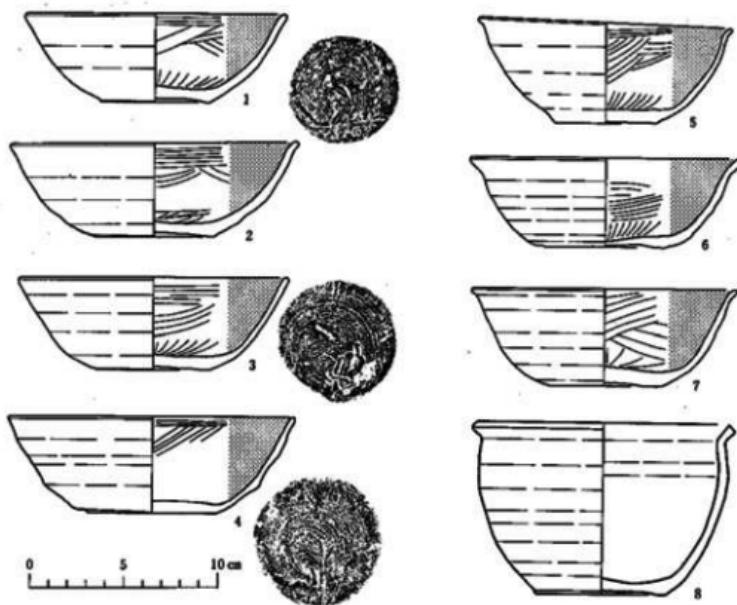
〈重複〉 東半は、溝1に切られている。

〈平面形〉 全体形は不明であるが、残存する西半からみると、平面形は方形と思われる。西辺長は、4.2 cmである。

〈堆積土〉 残存する堆積土は3層に分かれる。第1層は黒色土であり、中央部の狭い範囲に分布し床面に達する。第2層は褐色土であり、壁沿いの床面上に堆積している。第3層は、黒褐



第16図 第11住居跡



第19図 第11住居跡出土遺物

色土であり、床面上のところどころに堆積している。西壁と北、南壁の西半が検出されている。残存する壁高は 10~22 cm で、立上りはほぼ垂直であるが下端は丸味をもつ部分が多い。壁面は全体に地上の土であり、やや軟く、凹凸が多い。

（床面）残存部では地山の土をそのまま床面とし、多少黒色土でよごれている。中央部では細かな凹凸がみられ、ごく硬いが、周囲の壁近くは、平坦でやや軟かい。

（柱穴）住居内には 5 個のピットがみられる。これらのうちピットは柱痕跡が確認されているが、他に組み合うものがない。

（貯蔵穴状ピット）焼け面の右側に位置するピット 3 である。堆積土から焼土、木炭とともに土師器が多量に出土している。

（その他の施設）溝の東側には焼け面がみられる。すでに上面は削平されており、熱の及んだ部分のみが残存している。カマド燃焼部の痕跡と考えられる。

ピット番号	2	3	4	5
深さ(cm)	30	14	40	13

（出土遺物）土師器（壺、甕）、須恵器（壺、甕）、赤焼土器（甕）が出土している。住居に伴うと考えられる遺物にはピット内、貯蔵穴状ピット内出土遺物がある。

住居に伴う遺物

土師器壺（1~3） 製作に口クロを使用している。体部から丸味をもって外傾し、口縁部がわずかに外反するものもある。底部には回転糸切り痕を残し、再調整はみられない。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

赤焼土器甕（8） 口径が器高より大きい。最大径は口縁部にあり、体部最大径は上半に位置する。頸部がわずかにくびれ、口縁部は外傾する。底部の切り離しは、回転糸切り技法で再調整はない。

堆積土出土遺物

土師器壺（4~7） 上記土師器壺と同様の特徴をもつ。

第 12 住居跡

〈位置〉 J K-37、38 区にある。

〈重複〉南北に走る 2 本の溝（溝 1、2）によって住居跡の北東隅から南西隅にかけての部分と、東南隅とが切られている。

〈平面形〉長軸 4.3m × 短軸 3.9m の正方形である。また住居面積は約 17.1 m² である。

〈堆積土〉3 層に分かれる。第 1 層は黒褐色土であり、北、西壁近くにはみられず、中央から東南部にかけて分布し床面に達する。第 2 層は暗黄褐色土であり、北西部から中央部にかけて分布し床面に達する。第 3 層は茶褐色であり、西、北壁沿いの床面上に堆積している。

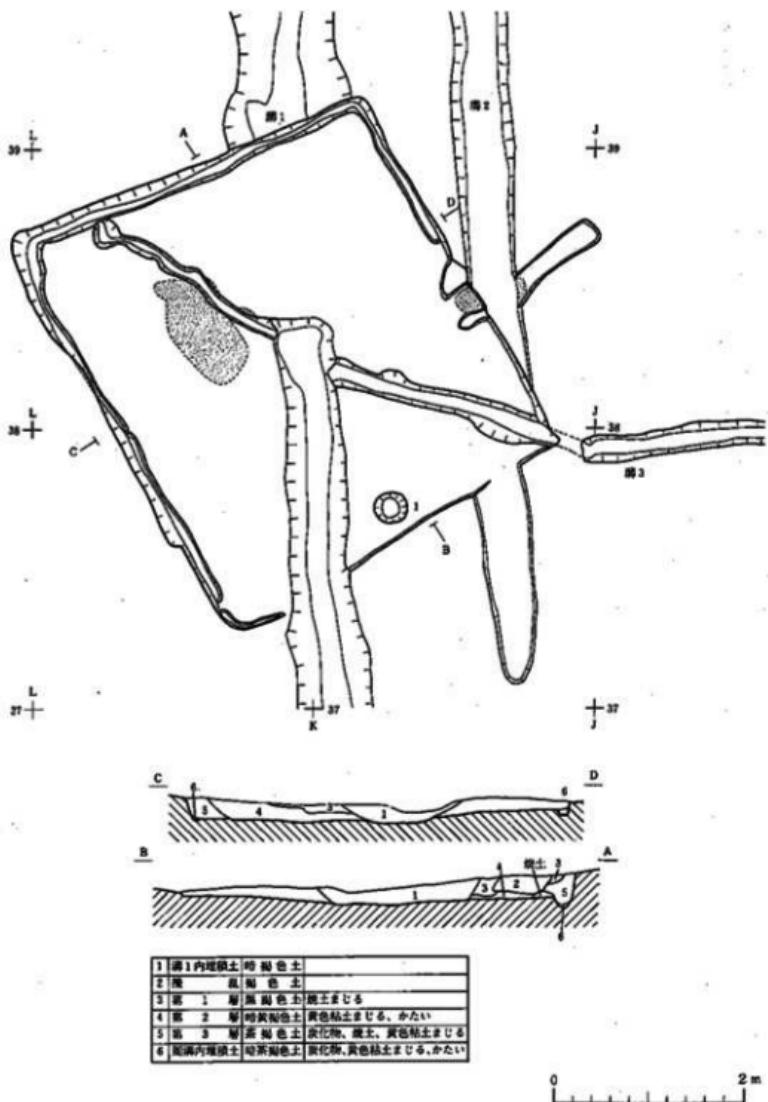
〈壁〉北壁、東壁、南壁は溝によって一部壊されている。残存部の壁高は 2~31 cm で北西コーナーが最も高い。立ち上りはほぼ垂直である。壁面は、全体に地山の土そのままであり、硬くほぼ平坦である。

〈床面〉中央部から南壁西半にかけて溝によって壊されている。地山の土をそのまま床面としている。上面は、細かな凹凸が多く、全体に硬い。

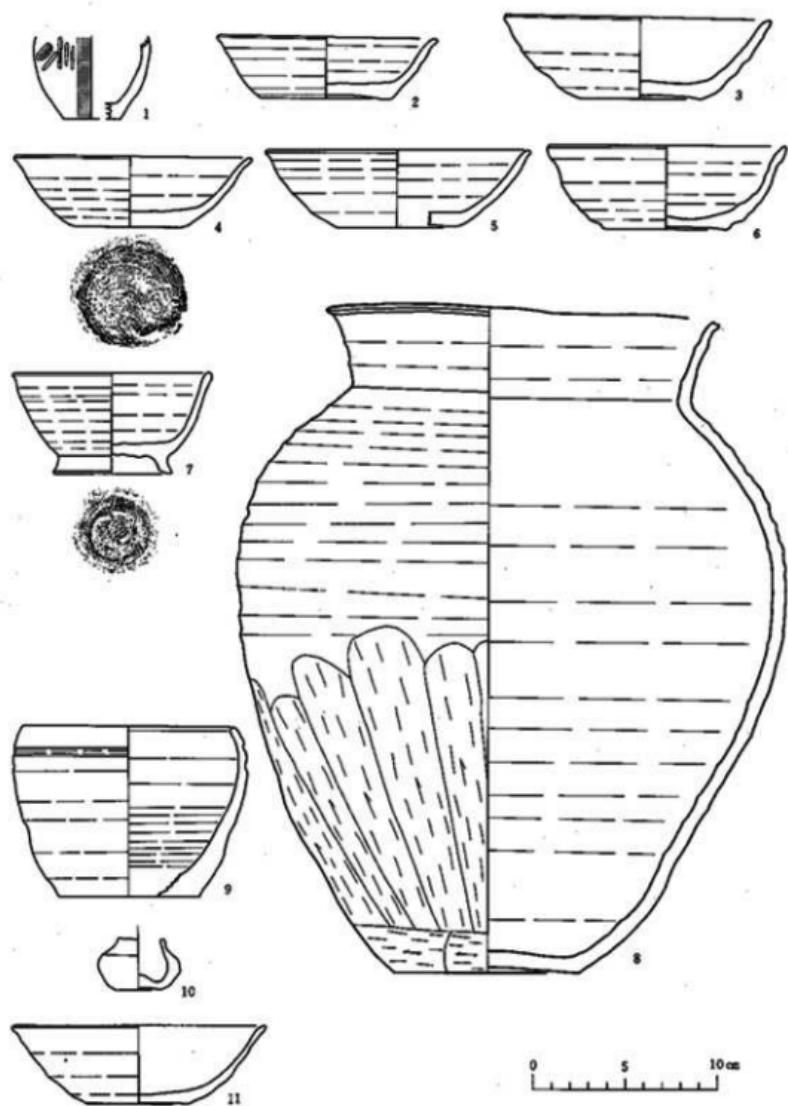
〈柱穴〉住居内にみられるピットは 1 個だけである。柱痕跡は確認されず、他に組み合うものもないのに主柱穴がどうか不明である。

〈周溝〉東辺の北半から北辺・西辺にかけての壁直下にみられる。部分的に途切れる。幅 6~30 cm、深さ 6~10 cm で、断面形は逆台形に近い。

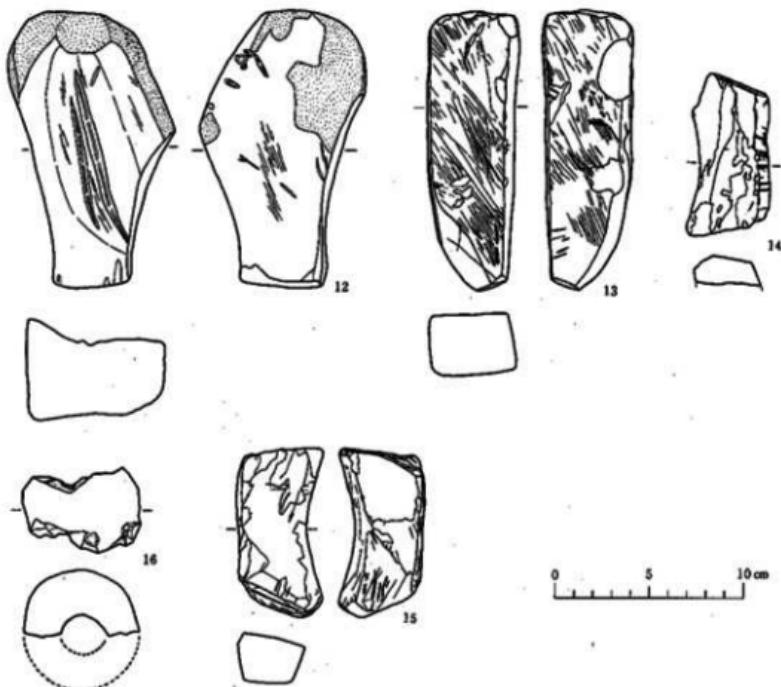
〈カマド〉東壁の中央やや南よりに付設されている。軸方向は N-52° - E である。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部は住居内にあり幅 80 cm、奥行 32 cm、高さ 10 cm で、天井部はすでに左右側壁が残存する。燃焼部の底面は周囲の床面と同じ高さで平坦である。底面の中央部から側壁の一



第20図 第12住居跡



第21図 第12住居跡出土遺物〔I〕



第22図 第12住居跡出土遺物〔II〕

部と奥壁は、熱を受けて赤変している。特に硬くはない。煙道部は、本体奥壁から40cmほどは溝2によって壊されている。現存する部分は本体より南にずれた方向にのびる。幅26cm、奥壁からの長さ150cm、深さは3~4cmである。

構築方法 側壁は黄色粘土を貼り付けて構築されている。

(その他の施設) 周溝のほかに溝が1本検出されている(溝3)。住居内では、北西コーナー近くから東南隅コーナーまで続く。住居中央部では溝1によって切られている。この溝は東南隅からトンネル状に住居外に続き、さらに東方向にのびる。幅は16~30cm、深さは住居内で4~10cm、住居外で約20cmである。断面形は「U」形に近い。底面のレベルは住居内では、ほぼ水平、住居外ではだいに低くなる。

(焼け面) 北西部にある。123×60cmのほぼ橿円形に硬い床面自体が熱を受けて赤変している。周囲の床面上には、炭化物が多量に分布している。

ピット番号	1
深さ(cm)	31

〈出土遺物〉土師器(壺、甕)、須恵器(壺、甕)、赤焼土器(甕)、砥石、靴口が出土している。住居に伴うと考えられる遺物としては床面上、ピット内、周溝内、溝1内出土遺物がある。

住居に伴う遺物

須恵器壺(2~4) 体部が直線的に外傾し、口縁部がわずかに外反するものと、体部から口縁部まで丸味をもって外傾するものがある。底部の切り離しは回転糸切り技法であり、再調整はみられない。

須恵器壺(9) 口縁部は内弯し、外面に二条の沈線が巡る。体部は外傾し、底部は平底である。底部の調整、切り離し方法は不明である。

須恵器甕(8) 最大径は体部に位置する。頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部は外反する。口縁端外側が横に突き出す。体部最大径は体部上半にある。内外とも口クロ調整されているが、外面体部下半から底部にはヘラケズリが加えられている。

赤焼土器壺(11) 体部から口縁部までわずかに丸味をもって外傾する。底部の切り離しは回転糸切り技法であり、再調整はみられない。

堆積土出土遺物

土師器器形不明(1) 体部上半から口縁部を欠き、器形が不明である。底部は平底である。器面調整は外面がヘラミガキ、黒色処理が施されており、内面はロクロ調整されている。

須恵器壺(5・6) 上記須恵器壺と同一の特徴をもつ。

須恵器高台付杯(7) 壺部は口径に較べて器高が高い。高台端部は外側に張り出す。高台接合後に、接合部のみロクロ調整を行なっており、壺底部に回転糸切り痕が一部残っている。

須恵器小壺(10) 口縁部は内傾し、体部は丸い。底部は平底で、ヘラケズリが施され、切り離し方法は不明である。

砥石(12~15) 柱状の形態をしている。砥磨面は、表・裏・両側面の4面で(7は半欠のため3面しかわからない)上・下端は自然面そのままのもの、自然面に多少敲打痕のみられるもの、削られているもの、磨滅しているものなどがある。また幅1.5mmほどのすじがみられるものがある。

土製靴口(16) 小破片である。直径約6cmで、穴の径約3cmである。一部に鉄くずが付着している。

第13住居跡

〈位置〉 L・M・N-41・42・43区に位置している。

〈重複〉 南東隅がピット93に切られている。

（平面形）長軸 4.6m × 短軸 4.4m の正方形である。隅がやや丸味をもつ。住居内面積は約 20.7 m² である。

（堆積土）4 層みられる。第 1 層は黒褐色土で、住居中央部から西側にかけて分布している。第 2 層は黄褐色土で、全体に分布する。第 3 層は焼土と炭化物の層である。東壁沿いと中央部に分布する。第 4 層は黄褐色土で、床面上にはほぼ水平に堆積している。この層は第 1~3 層より硬く、上面に数ヶ所焼面もみられ貼り床の可能性も考えられたが、平面的に全体を確認できず掘り下げてしまった。

（壁）残存壁高は、15~35 cm で、西壁が高い。立ち上がりは東・南壁ではほぼ垂直である。北・西壁では下半は垂直に近く、上半はゆるやかでその境に段がついている。壁面は全体に地山の土そのままであり、平坦で硬い。

（床面）地山の黄色粘土そのままを床としている。わずかに暗褐色土のよごれがみられ平坦で硬い。全体にほぼ水平である。

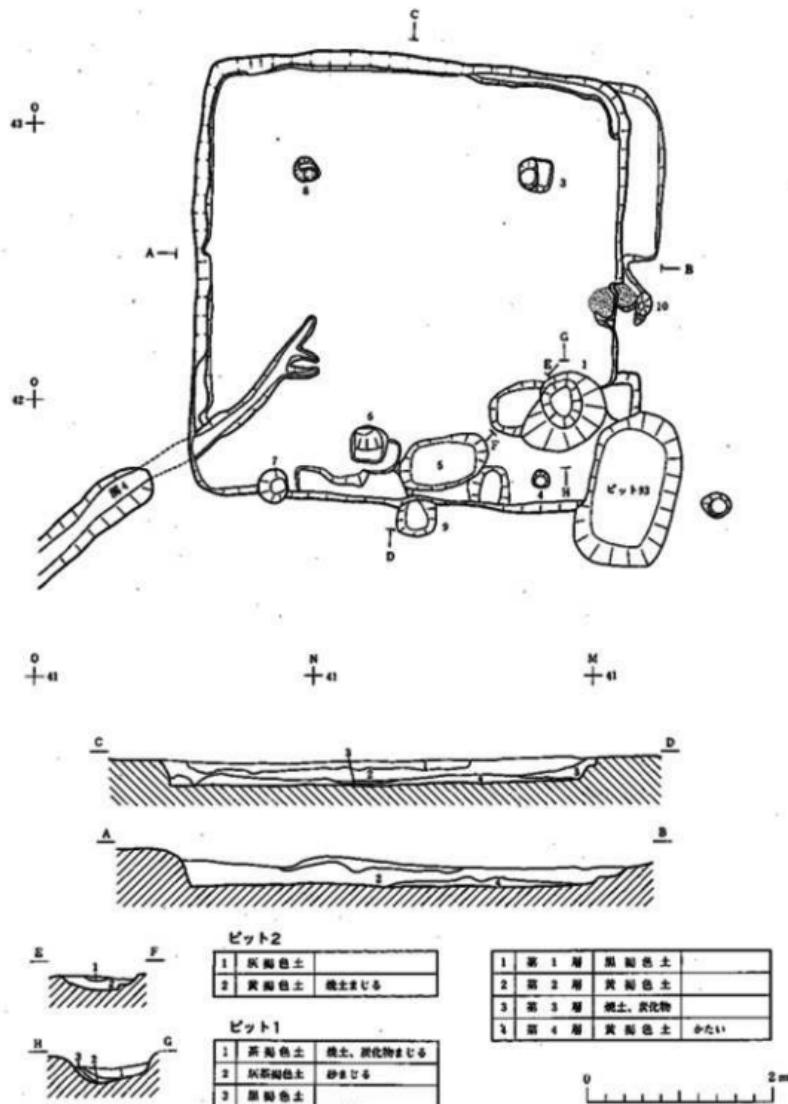
（柱穴）住居内には 10 個のビットがみられる。このうちビット 3・8 は柱痕跡が確認されており、隅近くにあることから、主柱穴と思われる。またビット 4・7 は、柱痕跡は確認されていないが、ビット 3・8 と相対する位置にあり、ほぼ同じ深さなので主柱穴の可能性が強い。

（周溝）北辺東半から東辺北端にのみみられる。壁直下にあり、幅は約 12 cm、深さ 3~17 cm で断面形は「U」字形に近い。

（貯蔵穴状ビット）住居の東南隅に貯蔵穴状ビット（ビット 1）が検出された。堆積土中および底面より土師器の一括品が出土している。

（その他の施設）焼け面- 東側中央部の床面から壁、さらに壁の外側にかけて熱を受けて赤変した部分がみられる。周囲には、焼土のブロック、炭化物が多量に分布しており、カマド燃焼部の残存部と思われる。張り出し①- 南側西半の住居内には壁に沿って 25cm×120 cm の長方形に張り出した部分がある。高さは約 10 cm で地山を掘り残して構築されている。上面はごく平坦で硬い。張り出し②- 東側北半の住居外には 40×18 cm の長方形に張り出した部分がある。底面は、平坦であるが軟かい。溝- 周溝のほかに溝がある。住居内北西部から北西隅まで続き、ここからトンネル状に住居外にのび、さらに西方に続く。住居内での幅 20 cm、深さ約 5 cm、住居外では幅 30~50 cm、深さ最高 30 cm で、底面は、西方に傾斜している。

ビット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
深さ(cm)	25	11	54	39	24	25	46	54	13	18



第23図 第13住居跡

（出土遺物）土師器（壺・甕）、須恵器（壺・甕）、赤焼土器（壺・甕）、刀子、砥石が出土している。これらのうち住居に伴うと考えられる遺物としては、床面上、ピット内出土遺物がある。

住居に伴う遺物

土師器壺（1・2） 製作にロクロを使用している。底部には回転糸切り痕を残し、再調整はみられない。内面はヘラミガキが加えられ、黒色処理が施されている。

土師器甕（3・5）（4・5） 口径が器高より大きく、最大径が口縁部に位置する小形の甕である。体部の最大径は上端にある。頸部の形態をみると、4は口頸部が屈曲して外傾し、5は体部から口縁部まで変化なく立ち上がる。器面調整は外面の口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリ、底部にヘラケズリの後ナデが施されている。内面は口縁部に横ナデ、体部・底部にヘラナデの施されるものと、不明のものとがある。3は器高がわからないため、口径と器高の関係は不明である。最大径は口縁部に位置する。口頸部はゆるやかに外反する。器面調整は外面の口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリが、内面の口縁部に横ナデ、体部にヘラナデがみられる。

須恵器壺（8・9） 体部から口縁部まで直線的に外傾するものと、口縁部が外反するものとがある。底部に回転糸切り痕を残し、再調整はみられない。

赤焼土器壺（12） 体部から口縁部まで丸味をもって外傾する。底部の切り離し方法は回転糸切り技法で、再調整はない。

赤焼土器甕（13） ロクロを使用している。口径が器高より大きく、最大径が口縁部に位置する。体部の最大径は上端にある。口縁部は短く外傾し、口縁端が上方に突き出す。底部の切り離しは回転糸切り技法である。再調整はみられない。

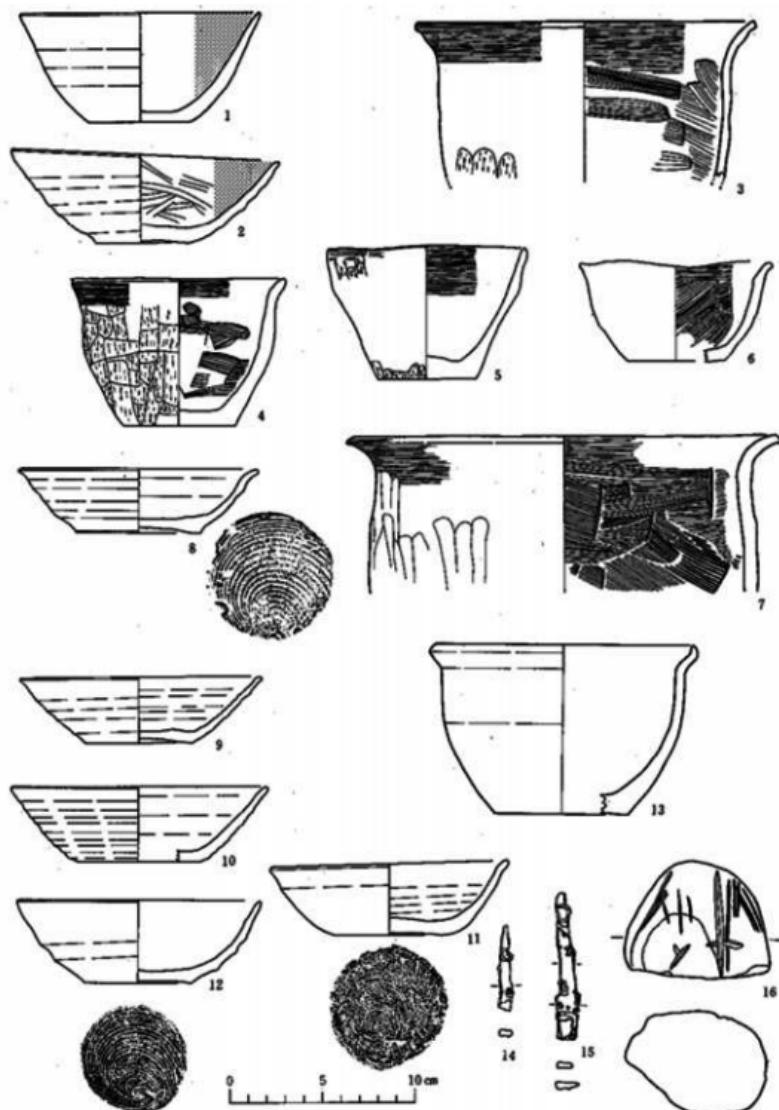
堆積土出土遺物

土師器甕（6・7） 製作にロクロを使用していない。口径が器高より大きいものと、小さいものとがある。前者（6）は、最大径が口縁部に位置する。小形の鉢形である。体部最大径は上端にあり、頸部内面に稜がつき、口縁部はわずかに外傾する。器面調整は、外面の口縁部から体部がヘラケズリ、底部は不明、内面は口縁部が横ナデ、体部から底部がナデである。後者（7）は最大径が口縁部にあり、長胴形のものである。口頸部は外反する。口縁端下側が突び出す。器面調整は、外面の口縁部が横ナデ、体部がヘラケズリ、内面は口縁部が横ナデ、体部が刷毛目である。

須恵器壺（10・11） 体部から口縁部まで直線的に外傾するものと、体部下端がふくらむものとがある。底部の切り離しは回転糸切り技法であり、再調整はみられない。

砥石（16） 柱状の砥石であり、砥磨面は表・裏・左右両側面の4面にみられる。上・下端に自然面を残している。幅1.5mmほどのすじが数条みられる。

鉄製刀子（14・15） 15は茎と身の破片の一部が残存する。身は平造りで間の部分の刃・背



第24図 第13住居跡出土遺物

両側に明瞭な段がついている。14は茎の破片である。

第14住居跡

〈位置〉 L-36区にある。

〈平面形〉長軸 2.9m × 短軸 2.2m の長方形である。隅はやや丸味をもつ。住居内面積は約 5.9 m²である。

〈堆積土〉住居内の堆積土は3層に分かれる。第1層は褐色土で南壁沿いを除き、全体に分布し床面に達する。第2層は、暗褐色土で南壁沿いの床面上に堆積している。第3層は、黒褐色土であり、床面のところどころにうすく堆積している。

〈壁〉残存する壁高は5~10cmで、立ち上がりは垂直に近いが、下端は丸味をもつ。壁面は、全体が地山の土である。南壁では凹凸が多いが、他の壁ではほぼ平坦である。

〈床面〉地山の土そのままを床面としている。全体にごく硬く平坦である。中央部は、周辺よりやや低く浅い皿状をしている。

〈柱穴〉住居内にピットが4個ある。いずれも柱痕跡は確認されておらず、配置に規則性もなく主柱穴がどうか不明である。

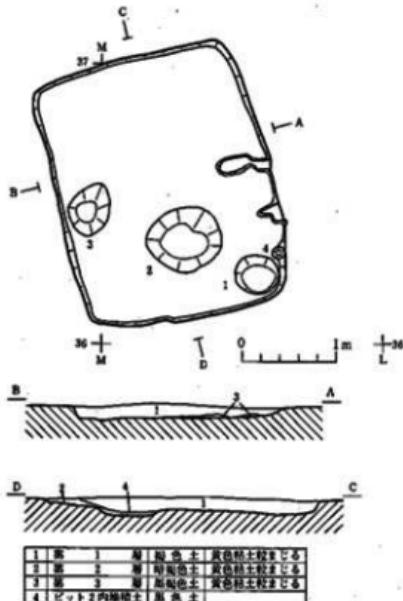
〈カマド〉東壁中央部やや南よりに付設されている。軸方向はN-77°-Eである。煙道部は検出されていない。燃焼部は住居内にあり幅80cm、長さ60cm、高さ10cmで天井部はすぐなく左右側壁が残存する。燃焼部底面は周囲の床面と同じ高さである。内部の堆積土には焼土、炭化物を含むが、熱をうけた痕跡は明確でない。

構築方法- 側壁は粘土を貼り付けて構築している。

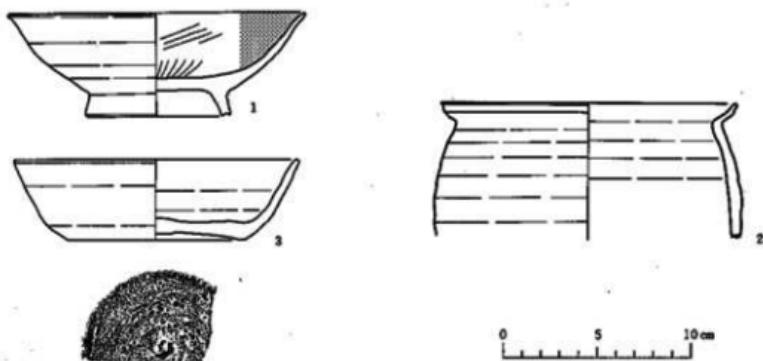
〈貯蔵穴状ピット〉カマド右側に位置する。堆積土に焼土、炭化物が混じる。

ピット番号	1	2	3	4
深さ(cm)	21	21	8	5

(出土遺物) 土器器(壺・高台付壺・甕)、須恵器(壺・甕)が出土している。住居に伴うと考えられる遺物としてはカマド



第25図 第14住居跡



第26図 第14住居跡出土遺物

内、ピット内、床面上出土遺物がある。

住居に伴う遺物

土師器高台付壺(1) 壺部は、体部がふくらみをもって立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。高台部は若干開く。高台接合後、接合部にのみロクロ調整を加え、壺部の底部中央に回転糸切り痕を残している。

土師器甕(2) 製作にロクロを使用している。口頭部は、わずかにくびれて外傾し、口縁上半が上方に折れ曲がる。

堆積土出土遺物

須恵器壺(3) 口径に較べて底径が大きく、体部下半が丸味をもつ。底部の切り離し方法は、ヘラ切り技法であり、再調整はみられない。

第15住居跡

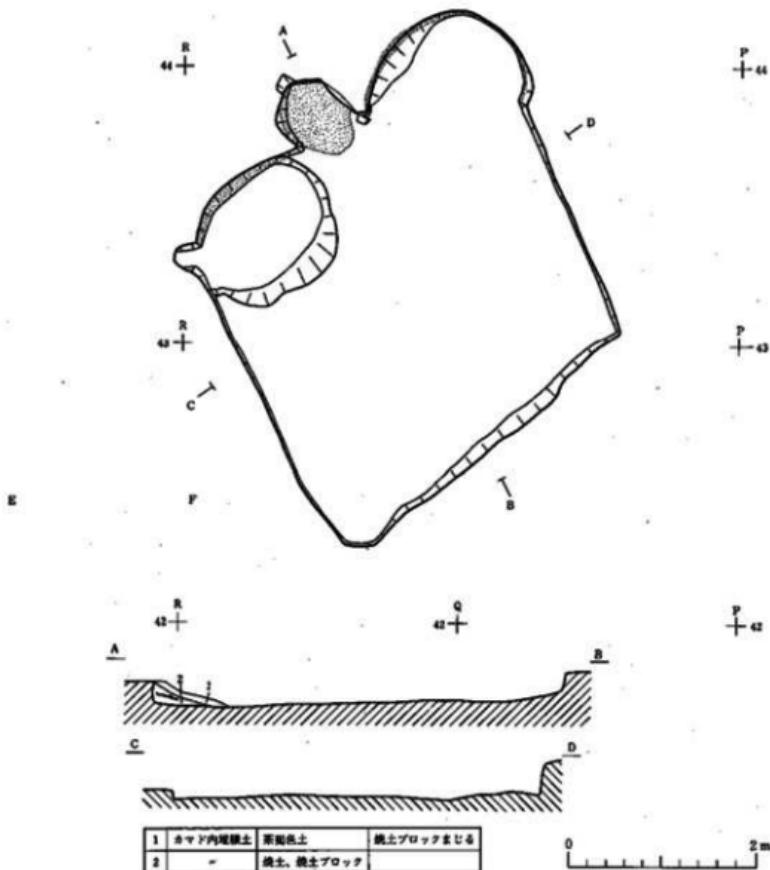
〈位置〉 P・Q-42・43区に位置する。

〈重複〉 焼土遺構1・2と重複し、これに切られている。

〈平面形〉 長軸 3.9m × 短軸 3.8m の正方形がつぶれた、ひし形である。また住居面積は約 14.2 m² である。

〈堆積土〉 住居廃絶後、堆積土が流入する以前に焼土遺構が構築されており、住居跡自体の堆積土はみられない。

〈壁〉 残存する壁高は 7~40 cm で、立ち上がりはほぼ垂直である。壁面は全体に地山の土であり、平坦で硬い。

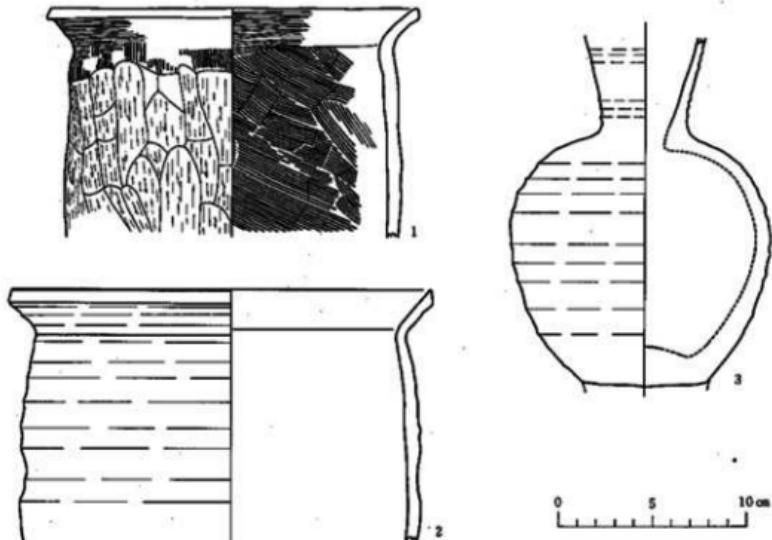


第27図 第15住居跡

〈床面〉残存する部分は全体に地山の土をそのまま床としており、中央部では細かな凹凸がみられごく硬いが、周辺部では平坦で、中央部よりは軟らかい。南東部から北西部に向かって傾斜し、15cmほどの高低差がある。

〈柱穴〉住居内にピットではなく、柱穴については不明である。

〈カマド〉北壁中央部に付設されている。煙道部は検出されていない。軸方向はN-43°-Wで壁に直交する方向からやや西にずれる。燃焼部は壁から住居外側に構築されており、幅74cm、奥行



第28図 第15住居跡出土遺物

70 cm、高さ 26 cm で天井部はすでない。側壁および奥壁はほぼ直立する。燃焼部内面は全体に熱を受けて赤変し硬い。内部には、天井や側壁、奥壁の崩壊土と思われる堆積土がみられる。

構築方法 本体は住居の壁をえぐり込んで作られている。

〈その他の施設〉 北西隅から、トンネル状に住居外にのびる溝がある。住居外の延長部分は、調査の不備により確認していない。

〈出土遺物〉 第15住居跡は、住居廃絶後、自然堆積土が流入する前に、焼土遺構1・2が構築されている。したがって本住居の出土遺物といえるのは、カマド内から出土した遺物だけである。

カマド内出土遺物（遺構に伴う遺物）- 土師器（壺）、須恵器（壺・甕・長頸壺）が出土している。

土師器甕（1・2） 製作にロクロを使用しないもの（1）と、使用したもの（2）とがある。前者は、口径より器高が高い長胴形と推定される。最高径は口縁部にある。口径部は、わずかにくびれて外反している。

器面調整は、外面の口縁部に横ナデ、体部に刷毛目の後ヘラケズリが施されている。内面は口縁部に横ナデ、体部にヘラナデがみられる。後者は、口頸より器高が高いと推定され、最大径

は口縁部にある。口頸部は「く」の字に近い屈曲を示し外傾する。口縁端が上方に突き出す。

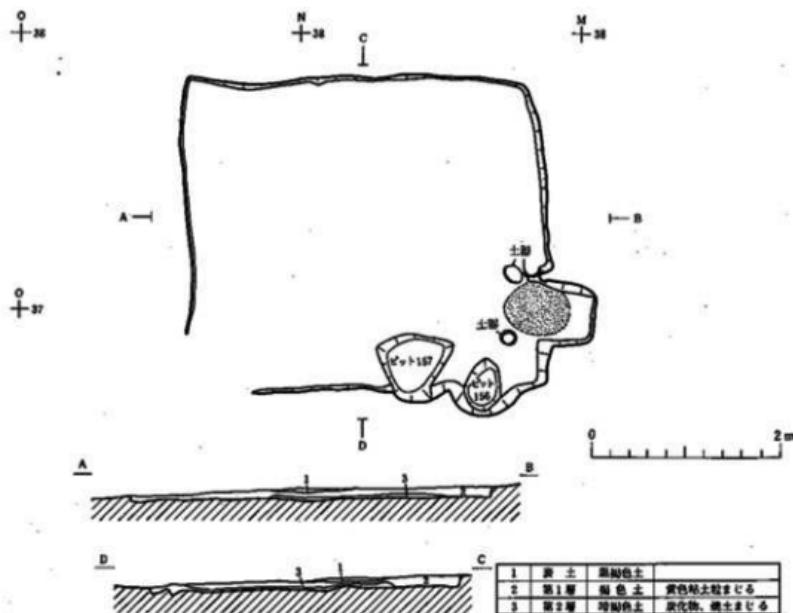
須恵器長頸壺(3) 口縁部、高台を欠いている。頸部は直線的でいくぶん開いている。体部上半は球形で、下半はなだらかな丸味をもって底部にいたる。底部には、回転ヘラケズリが加えられるが、周縁に高台のはがれた痕がみられる。なお、図示できない須恵器壺、土師器壺の底部破片に回転糸切り痕を残し、再調整の加えられていないものがある。

第16住居跡

〈位置〉 M・N-36・37区にある。

〈重複〉 南半部でピット156・157と重複、これに切られている。

〈平面形〉 長軸3.8m×短軸3.3mの東西に長い長方形である。また住居内面積は約12.9m²で



第29図 第16住居跡

ある。

〈堆積土〉2層に分かれる。第1層は褐色土であり、全体に分布し、床面に達している。第2層は暗褐色土で、中央付近から南側の床面上に堆積している。

〈壁〉南西隅付近は検出されなかった。残存部での壁高は、最も高い北東隅で18cmで、立ち上がりはほぼ垂直である。壁面は全体に地山の土であるが、軟らかく、木の根などによる攪乱がみられ、細かな凹凸が多い。

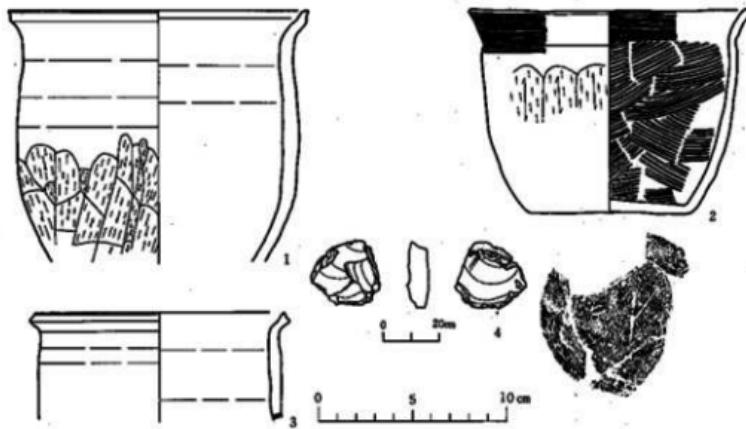
〈床面〉全体に地山の土そのままを床面にしているが、上面は凹凸が多い。中央部は部分的にごく硬い面がみられるが、それ以外ではあまり硬くない。

〈柱穴〉住居に伴うピットはみられない。

〈カマド〉東壁南よりに付設されている。煙道部は検出されていない。軸方向はS-84°-Eである。燃焼部は壁から住居内外に半分ずつ構築されており、幅80cm、奥行100cm、高さ20cmである。天井はすでになく左右側壁が残存する。左側壁は攪乱によりかなり壊されている。

内部には側壁沿いに、天井部あるいは壁の崩落土らしい堆積土がみられる。底面はほぼ水平であり、周囲の床面とも同じ高さである。底面の大部分と壁面は、熱を受けて赤変し、ごく硬い。

構築方法 本体の奥半分は、地山をえぐり込んでおり、前半分は、土師器甕を芯とし粘土を貼り付けて構築している。



第30図 第16住居層跡出土遺物

（出土遺物）土師器（壺、甕）、須恵器（壺、甕）が出土している。住居に伴う遺物としては、カマド側壁の芯に利用された土器、カマド内出土遺物がある。

住居に伴う遺物

土師器甕（1・3） 製作にロクロを使用している。口径が器高より大きい。最大径は口縁部にある。口頸部はゆるやかに立ち上がり外反する。口縁端は上方に突き出す。体部下半が急にすぼまる。内外面ともロクロ調整がみられるが、外面体部下半にはヘラケズリが加えられている。3は、口縁部から体部上半にかけての破片で内外面ともロクロ調整痕がみられる。赤焼土器の可能性もある。

堆積土出土遺物

土師器甕（2） 口径が器高より大きい。最大径は口縁部に位置する。体部最大径は上端にある。口頸部はわずかにくびれて外反し、頸部外面に段がつく。底部は上げ底風の平底である。器面調整は、外面の口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリ、内面の口縁部に横ナデ、体部に刷毛目が施されている。底部外面に木葉痕がみられる。

他に剥片が1点出土している（4）。

第17 住居跡

（位置）R-36・37区にある。

（重複）第18住居跡と重複し、これに切られている。

（平面形）東半のみ確認されており、全体形は不明である。残存部からみると平面形は方形と思われる。東辺長は4.8mである。

（堆積土）1層のみみられる。暗褐色土である。

（壁）南東部が現存する。壁高は最も高い南東隅が27cmで、ゆるやかに立ち上がる。壁面は地山の土そのままで、ほぼ平坦である。

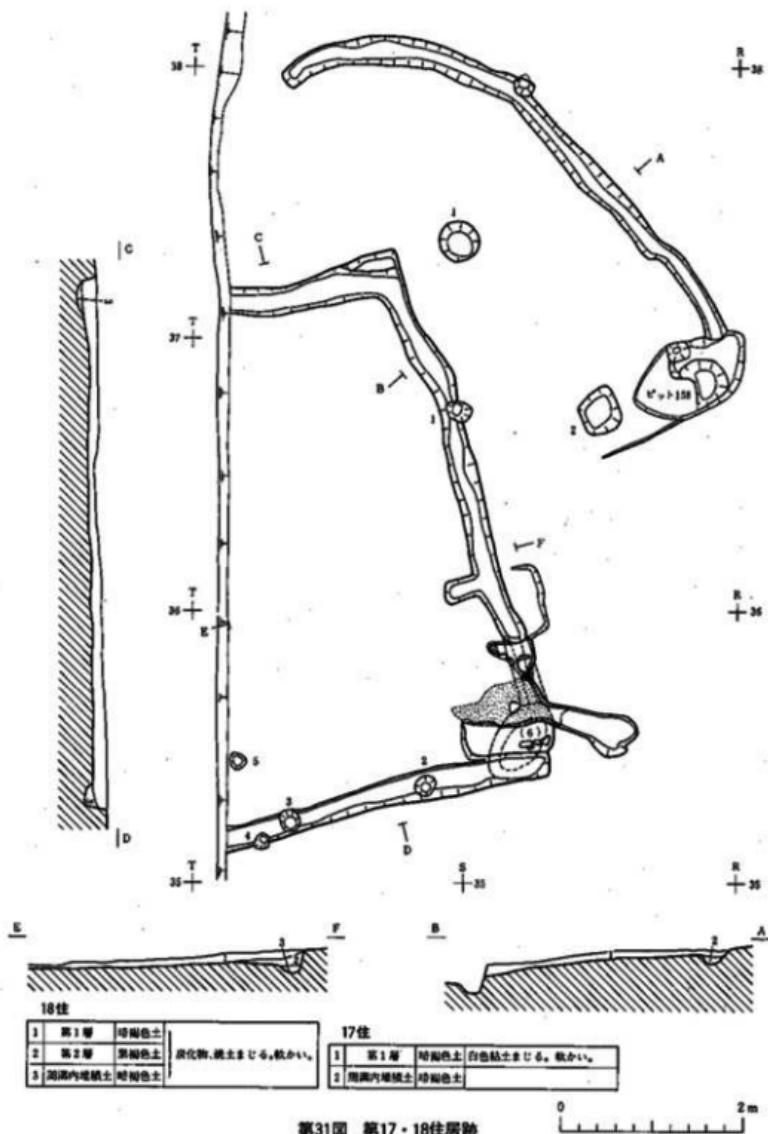
（床面）地山の土をそのまま床としている。凹凸がなく平坦であるが硬くはない。西に向かってかなり傾斜している。

（柱穴）ピットは3個検出されている。いずれも柱痕跡が確認されておらず配置に規則性もみられないで主柱穴がどうか不明である。

（周溝）東壁から北壁の一部にかけて現存している。幅約30cm、深さ約10cmで、断面形は「U」字形である。

ピット番号	1	2	3
深さ(cm)	50	14	35

（出土遺物）土師器（壺、甕）、須恵器（壺、甕）が出土している。遺構に伴う遺物としては同



第31図 第17・18住居跡

溝出土の遺物がある。

遺構に伴う遺物

図示できるものはない。土師器坏片で、底部に回転糸切り痕を残し再調整がなく、内面へラミガキが加えられ黒色処理されているもの、須恵器坏片で底部に回転糸切り痕を残し再調整のないものがある。

堆積土出土遺物

土師器坏（1） 製作にロクロを使用しており、体部から口縁部まで丸味をもって外傾する。底部の切り離しは回転糸切り技法で、体部下端から底部縁辺にかけて手持ちヘラケズリが加えられている。内面にはヘラミガキ、黒色処理が施されている。

砥石（2） 上下端を欠くが、平面形は長方形と思われ、板状である。砥磨面は表・裏の2面あり左右側面は削られている。

第18住居跡

〈位置〉 S・T-35・36区にある。

〈重複〉 第17住居跡と重複し、これを切っている。

〈平面形〉 西半分は調査区域外のため全体を検出することはできなかった。東半の形態からみて、平面形は方形と思われる。東辺長は5.8mである。

〈堆積土〉 住居内の堆積土は2層に分けられる。

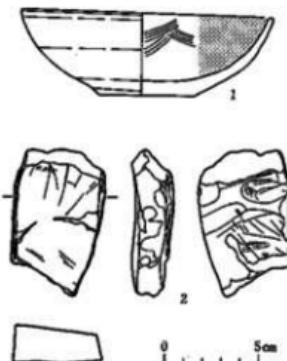
第1層は暗褐色土で全体に分布し、東壁沿いを除いて床面に達する。第2層は黒褐色土で、東壁沿いの床面上に堆積している。

〈壁〉 残存する壁高は10~23cmで、立ち上がりは垂直に近い。壁面は地山の土そのままであり、平坦で硬い。

〈床面〉 南西部には黄色粘土による貼り床がみられ、それ以外は地山の土をそのまま床としている。全体に細かな凹凸がみられごく硬い。

〈柱穴〉 住居内に6個のピットがある。ピット6はカマド側壁を取り除いたのちに検出された。ピット1~5は柱痕跡が確認されておらず、配置に規則性もない。主柱穴がどうか不明である。ピット1~4については周溝内あるいは壁に接しておらず、間隔は一定しないが、壁柱穴の可能性もある。

〈周溝〉 カマドの部分を除き全体にみられる。壁直下をとぎれることなく続く。幅22~46cm



第32図 第17住居跡出土遺物

深さ 8~10 cm で、断面形は底面の丸い「U」字形である。

（カマド）東壁南端に付設されている。軸方向は N·72° - E で東壁に直交する方向からかなり南にずれている。燃焼部は住居内にあり、天井部はすでにはない。側壁は「ハ」の字に開いている。規模は基部での幅 62 cm、先端での幅 134 cm、奥行は約 70 cm、高さ 16 cm である。燃焼部底面は、奥に向かってゆるやかに上がる。底面から側壁にかけては全体に熱を受けて赤変し硬い。煙道は幅 30、長さ 100 cm、深さ 12 cm で、燃焼部底面から段差なく続き先端に向かってゆるやかに高くなる。本体近くの壁面および底面の一部は熱を受けて赤変している。

構築方法- 本体の側壁は土師器甕を芯にし黄色粘土と、暗褐色土とが混じった土を貼り付けてつくられている。また、構築方法を観察するために本体を取り除いたところ、周溝から連続する溝とピット 6 が検出されている。

ピット番号	1	2	3	4	5	6
深さ(cm)	23	30	24	24	26	20

（出土遺物）土師器（壺、高台付壺、甕）、須恵器（壺、甕、壺）、赤焼土器（壺、刀子）が出土している。住居に伴うと考えられる遺物としては、床面上、カマド内、貯蔵穴状ピット内、周溝内出土遺物がある。

住居に伴う遺物

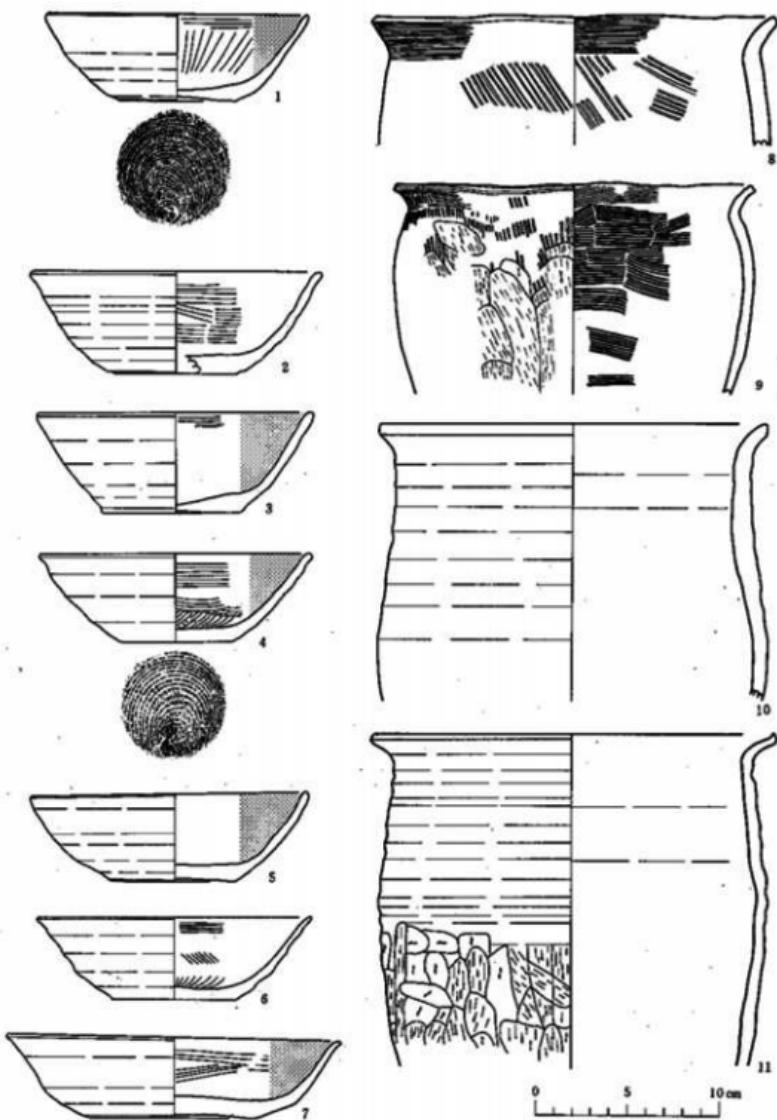
土師器壺（1・2） 製作に口クロを使用している。体部が丸味をもって外傾し口縁部でわずかに外反するもの、体部下半がふくらむものなどがある。底部に回転糸切り痕を残し、再調整はない。内面はヘラミガキが加えられ黒色処理されている。

土師器甕（8~11） 製作に口クロを使用しないものとするものがある。口クロ不使用のものは、口径が器高より大きいもの（9）と小さいもの（8）とがある。前者は長胴形で最大径が口縁部にあり、体部最大径の位置は上半である。口径部はわずかにくびれて外反し、口縁端に沈線状のくぼみが巡る。器面調整は外面の口縁部に刷毛目のち横ナデ、体部に刷毛目のちヘラケズリ、内面の口縁部に横ナデ、体部に刷毛目が施されている。後者は鉢形で、最大径が口縁部にあり、口縁部は外反する。器面調整は内外とも口縁部に横ナデ、体部に刷毛目が施されている。

口クロ使用のもの（10）は、口径より器高が大きい長胴形と思われる。口縁部はゆるやかに立ち上がり外反し、口縁端は上方に突き出すものと丸くおさまるものがある。内外とも口クロ調整されているが、外面体部下半にヘラケズリがみられる。

赤焼土器壺（13） 底部に回転糸切り痕を残し、再調整はみられない。

鉄鎌（14） 有茎鎌である。錆化が著しい。身は丸味のある三角形で逆刺、範被はない。茎は長く、断面は四角である。



第33図 第18住居跡出土遺物（I）

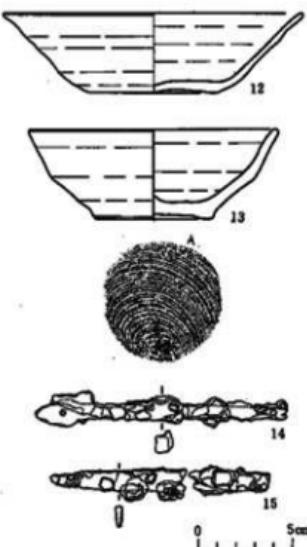
堆積土出土遺物

土器器坏(3~7) 製作にロクロを使用している。体部が丸味をもって外傾しそのまま口縁部にいたるものと、口縁部でわずかに外反するものがある。7は口径に較べて器高が低い。底部に回転糸切り痕を残し再調整はない。内面はヘラミカキが加えられ黒色処理されている。

須恵器坏(12) 体部から口縁部まで直線的に外傾する。底部の切り離しは回転糸切り技法で再調整はない。

鉄製刀子(15) 身と茎の一部が現存する。錆化が著しい。平造で間は明瞭でなく、身から茎へなだらかにいたる。

土師器壺(11) ロクロを使用している。器高が口径より大きく最大径は体部にある。口頸部はゆるやかに屈曲して外反し、口縁端が上方に突き出す。器面調整は、内外面にロクロ調整がみられるが、外面体部下半にヘラケズリが施されている。



第34図 第18住居跡出土遺物(II)

第19住居跡

〈位置〉 Q・R-39・40区にある。

〈重複〉 第20住居跡と重複している。新旧関係は確認できなかった。

〈平面形〉 長軸 3.5m × 短軸 3.1m の南北に長い長方形である。北・西壁はやや張り出し、北西隅は丸い。また、住居内面積は約 10.4 m² である。

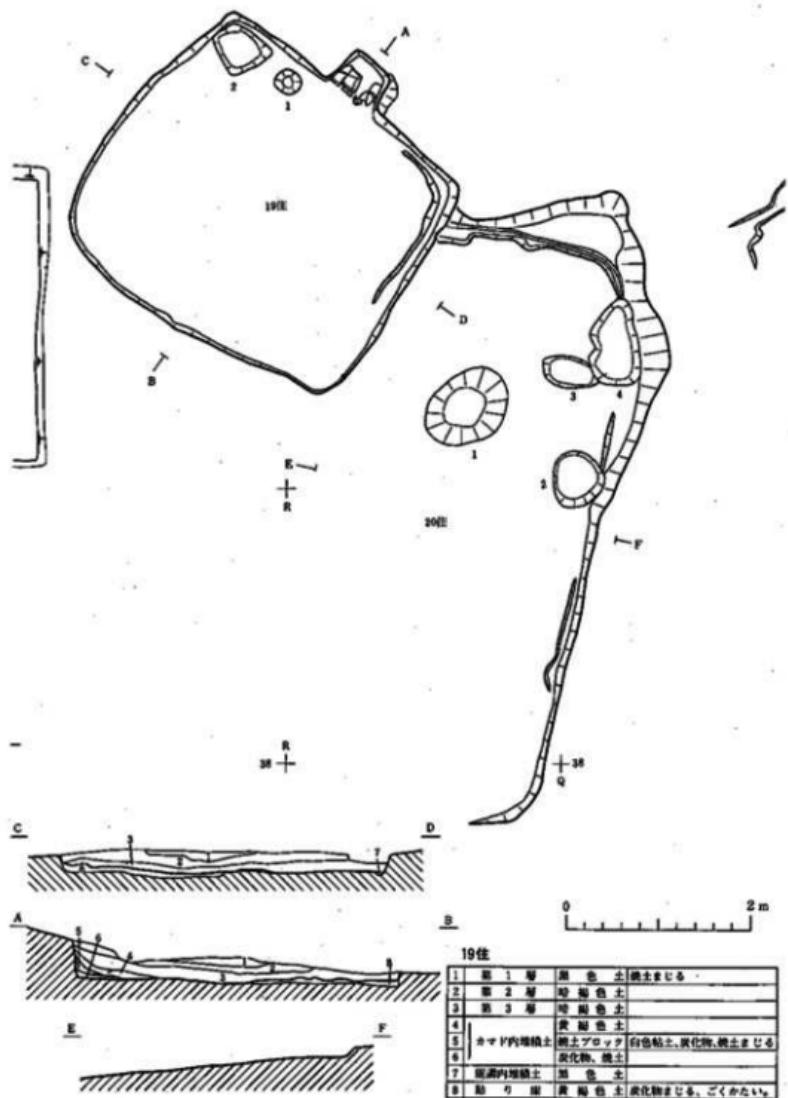
〈堆積土〉 住居内の堆積土は3層に分かれる。

第1層は黒褐色土で、住居中央部にのみ分布している。第2層は暗褐色土で、全体に分布する。第3層は暗褐色土で、北西部の床面上に堆積している。

〈壁〉 残存する壁高は7~45cmであり東南隅が最も高い。立ち上がりは垂直に近い。壁面は地山の土そのままで平坦で硬い。

〈床面〉 地山の土そのまま床面としている。細かな凹凸がみられ硬い。西に向かってわずかに傾斜している。

〈柱穴〉 住居内にピットは2個みられる。いずれも柱痕跡は確認されておらず、配置に規則性



第35図 第19・20住居跡

ものないので、主柱穴がどうか不明である。

（周溝）東壁南端から、南壁東半にかけての壁直下にみられる。幅13~25cm、深さは最も深い部分で7cmである。断面形は全体に丸味をもち半円形に近い。

（カマド）東壁中央部に付設されている。煙道部は検出されていない。軸方向はN-38°-Eである。本体は壁から住居外に構築されており、天井部はすでにない。幅約50cm、奥行45cm、高さ45cmで底面に土師器甕の破片を敷いており、上面は焼けている。土器の下の底面には熱を受けた痕跡は顕著でない。また、側壁から奥壁は全体に熱を受けて赤変し、ごく硬い。

構築方法- 本体は住居壁面から外側に地山をえぐり込んで作られている。

（貯蔵穴状ピット）カマド左側より検出された（ピット1）。平面形は方形に近い。

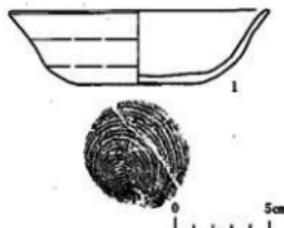
ピット番号	1	2
深さ(cm)	18	10

（出土遺物）土師器（壺、甕）、須恵器（壺、甕、壺）が出土している。住居に伴う遺物としてはカマド底面に敷かれた土器、床面上、周溝内出土遺物がある。

住居に伴う遺物

土師器壺（1） 製作に口クロを使用しており、体部は丸みをもって外傾し、口縁部でわずかに外反している。全体に摩滅が激しいが外面にロクロ調整痕が認められない。

他に破片では、ロクロ使用の土師器甕がある。



第20住居跡

（位置）Q-38・39区にある。

（重複）第19住居跡と重複する。新旧関係は不明である。

（平面形）東側の一部が検出されたのみで全体形は不明であるが、残存部からみると、平面形は方形と思われる。北東隅は丸味をもつ。東辺長は6.3mである。

（堆積土）残存する部分では2層に分かれる。第1層は褐色土である。第2層は黒褐色土で床面上に堆積している。

（壁）北壁東側から東壁と東南隅が残存している。北壁から北東隅は外側にふくらんでいる。壁高は最も高い北東隅で50cmであり、ゆるやかに立ち上がる。壁面は全体に地山の土で、硬く平坦である。

第36図 第19住居跡出土遺物

〈床面〉壁沿いの部分で検出された。地山の土を床としており、よごれもなく平坦で硬い。
 〈柱穴〉住居内には、4個のピットがある。いずれも柱痕跡は確認されておらず、配置に規則性もみられていないので、主柱穴がどうか不明である。

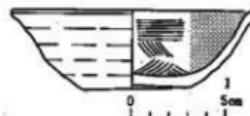
〈周溝〉北辺と東辺の一部にみられる。北辺の東半分は壁よりもかなり内側にあり、他は壁直下である。幅は10~25cm、深さ3~5cmであり、断面形は「U」字形である。

ピット番号	1	2	3	4
深さ(cm)	13	10	12	31

〈出土遺物〉土師器(壺、高台付壺、甕)、須恵器(壺、甕)が出土している。住居に伴うと考えられる遺物としては、床面上、ピット内、周溝内出土遺物がある。

住居に伴う遺物

土師器壺(1) 製作に口クロを使用している。体部は丸味をもって外傾し、口縁部がわずかに外反する。底部に回転糸切り痕を残し、再調整はみられない。内面はヘラミガキが加えられ黒色処理されている。



第37図 第20住居跡出土遺物

第23住居跡

〈位置〉Q・R-30・31区にある。

〈重複〉北西部では2本の溝と、カマド煙道部および南東部ではピットと重複し、これらに住居跡が切られている。

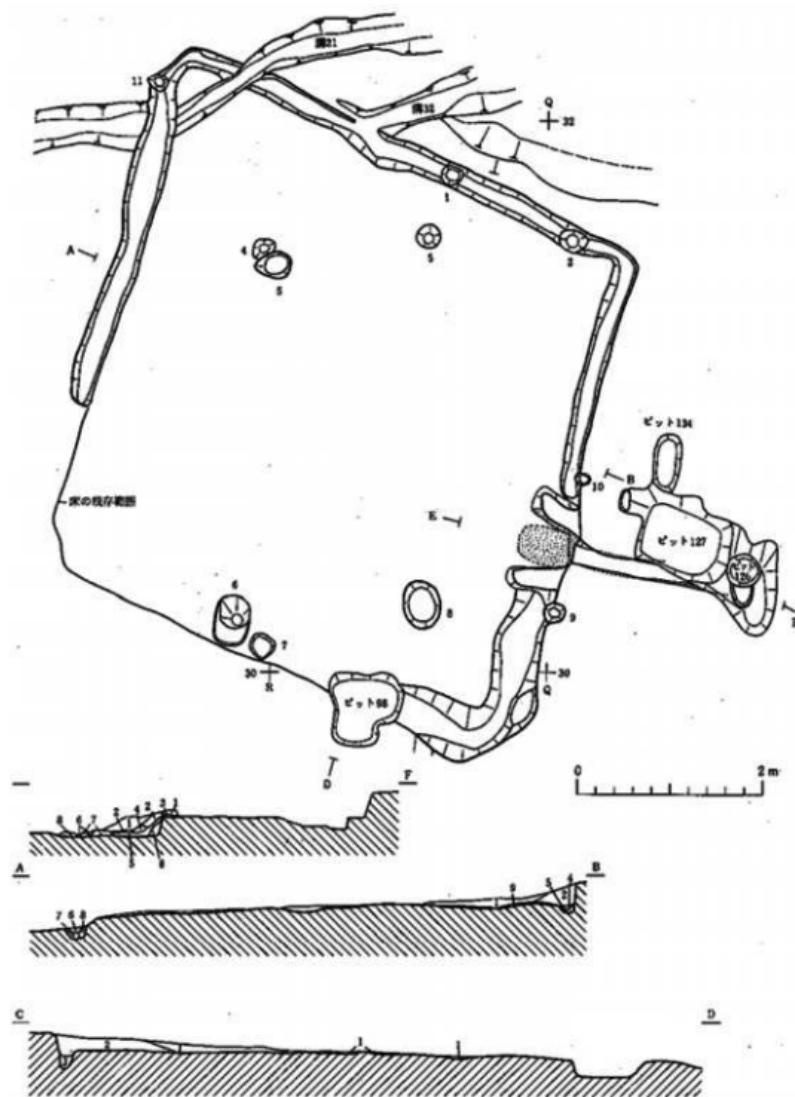
〈平面形〉長軸5.55m×短軸5.10mの正方形が若干つぶれた、ひし形である。また住居内面積は約27.8m²である。

〈堆積土〉住居跡の輪郭を確認した面から床面までがごく浅く床面が露出した部分も多い。残存する堆積土は、2層に分かれれる。第1層は明褐色土で、北東壁沿いから中央部にかけて認められ、床面に達している。第2層は明褐色土で北、東壁沿いの床面上に堆積している。

〈壁〉北西隅から北壁、東壁および東南隅が残存している。壁高は最も高い北東隅で32cmであり、立ち上がりはほぼ垂直である。壁面は、全体に地山の土であり、平坦で硬い。

〈床面〉北西部は溝に、南東部はピットに壊されている。全体に地山の土をそのまま床としており、よごれは少ない。東半分は硬くしまっているが、西半分はだいに軟らかくなり、南西隅で特に著しい。

〈柱穴〉住居内には10個のピットがみられる。柱痕跡の確認されたものはない。ピット5.8は住居の隅を結ぶ対角線上の壁からほぼ等間隔にあり、主柱穴と思われる。ピット1、2、11、9、10は周溝内あるいは、壁に接しており、壁柱穴の可能性がある。



第38回 第23住居跡

38回注記

レ	第1層	明褐色土	
2	第2層	明褐色土	1層より明るい
3		黒褐色土	黄色粘土、塊土のブロックまじる
4		褐色土	炭化物まじる
5	湖溝内堆積土		
6		黄色粘土ブロック	炭化物まじる
7		黄色粘土ブロック	炭化物、塊土まじる
8		黄色粘土ブロック	炭化物、塊土まじる
9	生垣層	暗褐色土	炭化物、塊土まじる

カマド

1	明褐色土	
2	黒褐色土	
3	中褐色土	
4	褐色土	
5	暗褐色土	炭化物、塊土ブロックまじる
6	褐色土	黄色粘土、炭化物まじる
7	焼土ブロック	
8	灰	粘土まじる

溝18

1	褐色土	
2	暗褐色土	
3	褐色土	

ピット138

1	黒褐色土	
2	黄褐色土	
3	暗褐色土	

(周溝) 南西部は検出されていない。カマドの部分を除いて壁直下を続く。幅 20~38 cm、深さ約 10 cmで断面形は底面が丸く「U」字形である。

(カマド) 東壁中央部に付設されている。燃焼部と煙道部とから成る。煙道部の一部は土壤によって壊されている。軸方向は S-77° - E である。燃焼部は、住居内にあり、天井部はすでに失なわれている。幅 106cm 奥行 62 cm、高さ 16 cm である。側壁はやや「八」字形に開く。内部に天井部あるいは側壁の崩落土と思われる堆積土がみられる。燃焼部の底面は中央部が低く皿状である。燃焼部底面から左側壁は熱を受けて赤変し非常に硬い。右側壁は熱をうけた痕跡は顕著ではないがごく硬い。煙道部は、燃焼部奥壁の燃焼部底面より一段高いところからのび、幅 20、長さ 200 cm、深さ 15 cm である。先端に煙道底面からの深さ 13 cm ほどの煙り出しピットがみられる。

構築方法- 側壁は地山を掘り残して、削り出している。

また、カマドの左右に 1 個づつピットがある(ピット 9、10)。カマドに関連した柱穴の可能性がある。

ピット番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
深さ(cm)	34	26	13	20	19	34	10	10	39	40

(出土遺物) 土師器(壺、蓋、甕)、須恵器(壺、甕)、砥石が出土している。住居に伴う遺物としてはカマド内、周溝内、ピット内出土遺物がある。

住居に伴う遺物

土師器甕の破片に口クロ使用のものがある。

砥石 柱状のものである。上端の大部分と下部を欠いている。砥磨面は表・裏 2 面であり、左右側面と上端には削りがみられる。



第39回 第23住居跡出土遺物

第24住居跡

〈位置〉 Q・R-26・27区にある。

〈重複〉 南東部で溝17と、西側で溝18、ピット136・137・138と重複しており、いずれにも住居跡が切られている。

〈平面形〉 長軸5.55m×短軸4.00mの東西に長い長方形である。また住居内面積は約22.1m²である。

〈堆積土〉 住居の輪郭を確認した面では、すでに床面が露出している部分もあり、堆積土の残りはよくない。残存部では2層に分かれる。第1層は褐色土で、残存部全体に分布する。第2層は暗褐色土で北東部の床面上にうすく堆積している。

〈壁〉 東・北壁と南壁の東半が検出された。残存部での壁高は最も高い北東隅で20cmであり、立ち上がりはゆるやかである。壁面は地山の土であり、平坦で硬い。

〈床面〉 カマド周辺に暗褐色土と黄色粘土による貼り床がみられ、他の部分は地山の土そのままを床面としている。中央部およびカマドの手前では細かな凹凸があり、ごく硬いが周辺部はやや軟質である。

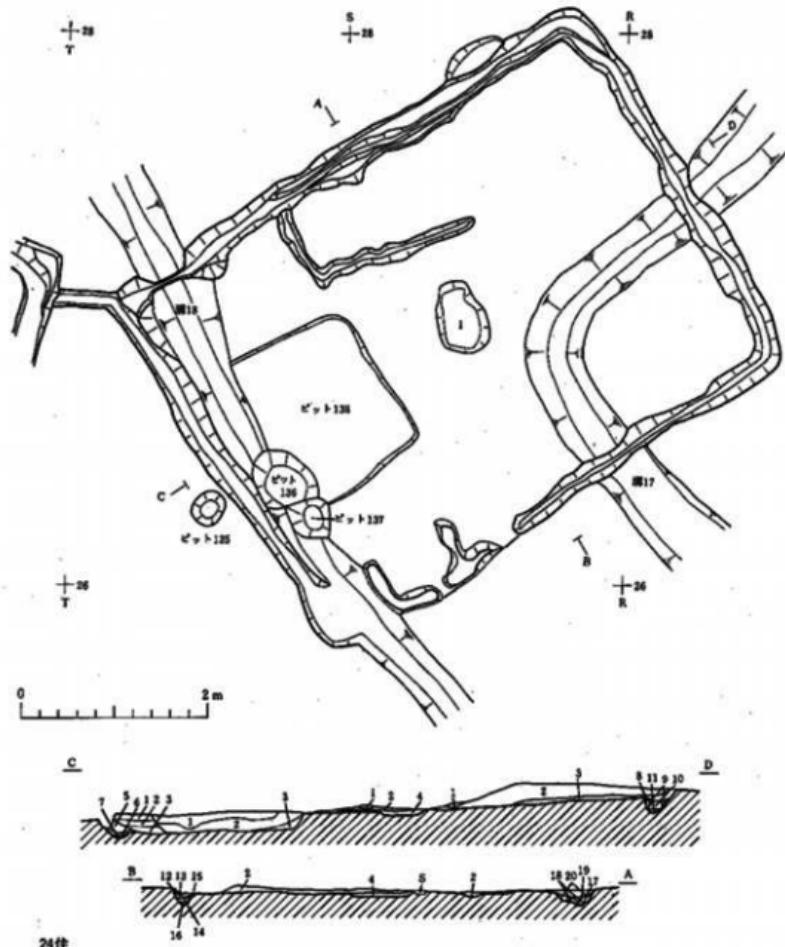
〈柱穴〉 住居内に1個のピットがある。ごく浅く住居の堆積土第1層が入っていることから、住居使用時には、くぼみのまま残っていたものである。

〈周溝〉 カマドの部分を除いて壁直下をめぐっている。幅18~38cm、深さ10~15cmで断面形は半円形の部分が多い。北壁沿いでは底面中央部がさらに深くなり段がついている。この部分の溝内堆積土をみると、段がついて深くなったところとその上部には、暗褐色土が堆積しておりその外側、周溝の内外両壁沿いには、黄色粘土ブロックがみられる。堆積土の上面を平面的にみると、内外の壁に沿って黄色粘土がみられ、その間に暗褐色土が細かく溝状に続く。また北西隅では北辺の周溝よりも西辺の周溝が深く段がつき、西辺の周溝からさらに溝が西にのび、第25住居跡に抜ける。

〈カマド〉 南壁西端近くにある。煙道部は検出されていない。軸方向はS-34°-Eである。本体は壁から住居内に構築されており、幅110cm、奥行80cm、高さ16cmで天井部はすぐになく、側壁が残存している。内部に焼土、硬い焼土のブロック、炭化物などが多量に堆積していたが、焼けた痕跡は顕著でなく、わずかに側壁の一部が熱を受けて赤変しているのみである。

構築方法 側壁、奥壁は黄色粘土を貼り付けて構築している。また精査終了後に燃焼部を取り除いたところ周溝から続く溝が検出され、溝の上部に平瓦を逆さにのせている。

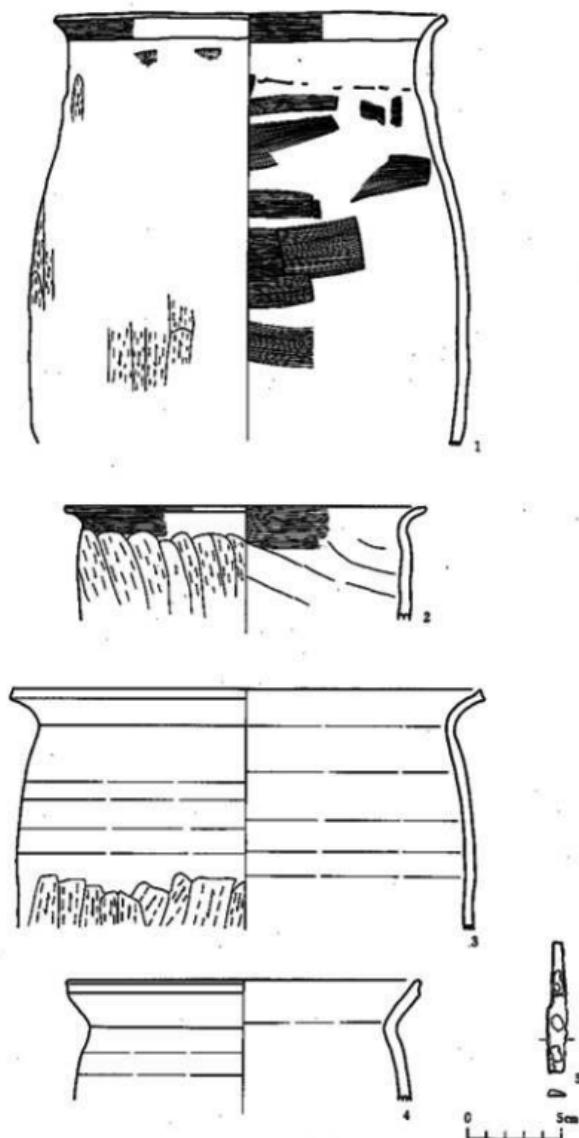
〈その他の施設〉 北壁近くに、周溝とは別の溝がある。北壁から約1m離れて東西に続き、西端から北に折れて周溝に抜ける。幅約20cm、深さ約5cmである。



24住

24住		地盤・土、焼成物		24住		地盤・土、焼成物	
1	固い砂	褐色	土	原生・黄色粘土粒、炭化物まじる	11	黄褐色	土
2	堅い砂	褐色	土	灰白・黄色粘土粒、炭化物まじる	12	白色	土
3	堅い砂	褐色	土	灰白・黄色粘土粒、炭化物まじる	13	黄色	土
4	堅い砂	褐色	土	黄色粘土粒、焼成物、礫土まじる	14	褐色	土
5	湖底内堆積土	黄褐色粘土ブロック		15	褐色	土	灰白色粘土粒まじる
6	堅い砂	褐色	土	黄褐色粘土粒まじる	16	黃色粘土ブロック	
7	堅い砂	褐色	土	17	褐色	土	黃色粘土粒まじる
8	湖底内堆積土	褐色	土	18	褐色	土	黃色粘土粒まじる
9	黄・灰白色粘土ブロック			19	褐色	土	黃色粘土粒まじる
10	堅い砂	褐色	土	20	褐色	土	黃色粘土ブロック

第40図 第24住 層 路



第41図 第24住居跡出土遺物〔I〕

ピット番号	1
深さ(cm)	6

〈出土遺物〉土師器(壺、甕、高台付壺)、須恵器(壺、甕)、刀子、瓦が出土している。住居に伴うと考えられる遺物としては、カマド内、ピット内、周溝内、溝内出土遺物がある。

住居に伴う遺物

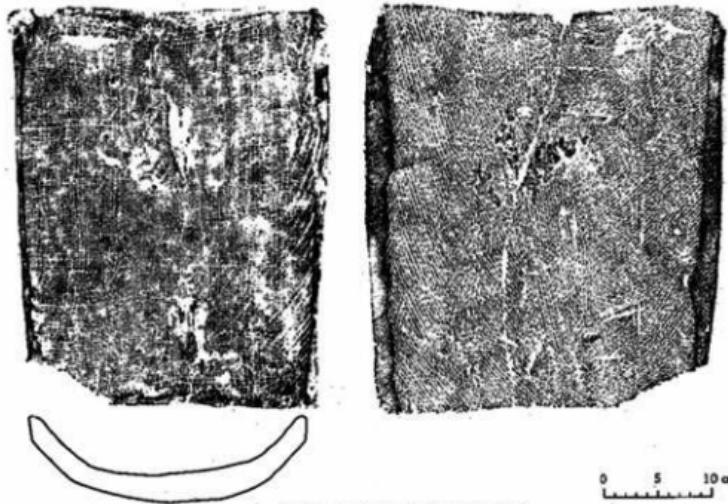
土師器甕(1~4) 製作にロクロを使用しないものと、使用しているものとがある。ロクロ不使用のもののうち、1は口頸より器高が大きい長胴形である。最大径の位置は体部にある。口縁部は、頸部が直立し口縁部は短く外反する。2は器高と口径の関係が不明である。

ロクロ使用のものは、3が口径より器高が大きい長胴形と推定される。最大径は口縁部に位置している。口頸部はくびれて外反し、口縁端が上方に突き出す。器面調整は内外面ともロクロ調整されているが、3の外面体部下半にはヘラケズリが施されている。

他に土師器甕の破片で底部に回転糸切り痕を残し再調整がなく、内面にヘラミガキ、黒色処理の施されているものがある。また須恵器壺では底部の切り離し方法が回転糸切り抜法で再調整のないものがある。

鉄製刀子 身から茎にかけての破片である。小形で、身は平造である。関は背側にみとめられる。

瓦 ほぼ完形の平瓦である。凸面に繩叩き目、凹面に布目を残している。



第42図 第24住居跡出土遺物〔II〕

第25 住居跡

〈位置〉 TU-26・27 区にある。

〈重複〉 北東隅で第24住居跡の周溝西北隅から住居外にのびた溝と重複している。切り合い関係はみとめられなかった。

〈平面形〉 西壁、南壁は残存しないが周溝が検出されており、それによると長軸 4.40m × 短軸 4.26m の正方形がややつぶれたひし形である。住居内面積は約 18.5 m² である。

〈堆積土〉 住居内の堆積土は2層に分かれる。第1層は暗褐色で東壁沿いを除いてほぼ全体に分布し、床面に達する。第2層は黒褐色土で、東壁沿いの床面上に堆積している。

〈壁〉 東壁と北壁が残存している。壁高は最も高い北東隅で 24 cm であり、立ち上がりは垂直に近い。壁面は地山の土であり、ほぼ平坦で硬い。

〈床面〉 東半では部分的に黄色粘土と暗褐色土による貼り床がみられ、特にカマド周辺で厚い。それ以外では地山そのままを床面としている。上面は全体に細かな凹凸が多く、硬い。

〈柱穴〉 住居内に4個のビットがある。いずれも柱痕跡は確認されていない。このうちビット1、2、3は、壁からほぼ等間隔の対角線上に位置するので、主柱穴の可能性がある。ただし、これらと対を成すべき西南部にはビットはない。

〈周溝〉 カマドの部分を除いて壁直下をほぼ周全する。幅 30~45 cm、深さ 10~22 cm で断面形は「U」字形、あるいは逆台形である。

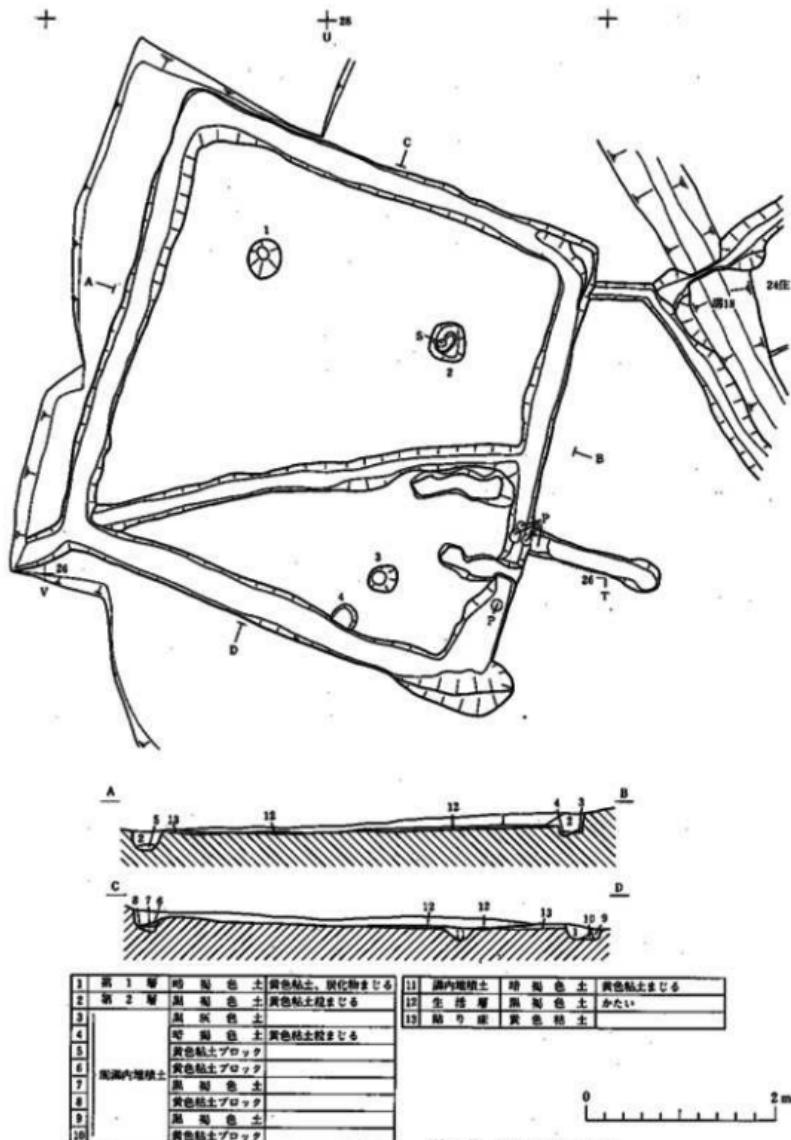
〈カマド〉 東壁中央部に付設されている。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部は、壁から住居内に構築されており、幅 120 cm、奥行 140 cm、高さ 12 cm である。天井部は、すぐなく、また左側壁と燃焼部の壁沿いには、周溝から続く溝がみられる。側壁の保存は良くなく、不整形をしている。燃焼部内およびカマドの周辺には多量の焼土、硬い焼土ブロック、炭化物が堆積していたが、燃焼部内の焼けた痕跡は顕著でない。煙道部は、燃焼部の底面より、一段高い部分から外側にのびる。幅 20 cm、長さ 150 cm、深さ 15 cm で、先端は、幅 30 cm と広がる。底面は、ほぼ水平である。基部には底のない土師器甕を埋め込んでいる。

構築方法- 側壁は黄色粘土を貼り付けている。

〈その他の施設〉 周溝とは、別の溝がある。カマド左の周溝から直線的に南西隅を通り、さらに、住居外にのびる。

ビット番号	1	2	3	4
深さ (cm)	23	19	15	12

〈出土遺物〉 土師器(壺、甕)、須恵器(壺、甕)が出土している。住居に伴う遺物としては、床面上、周溝内、溝内、カマド内出土遺物がある。



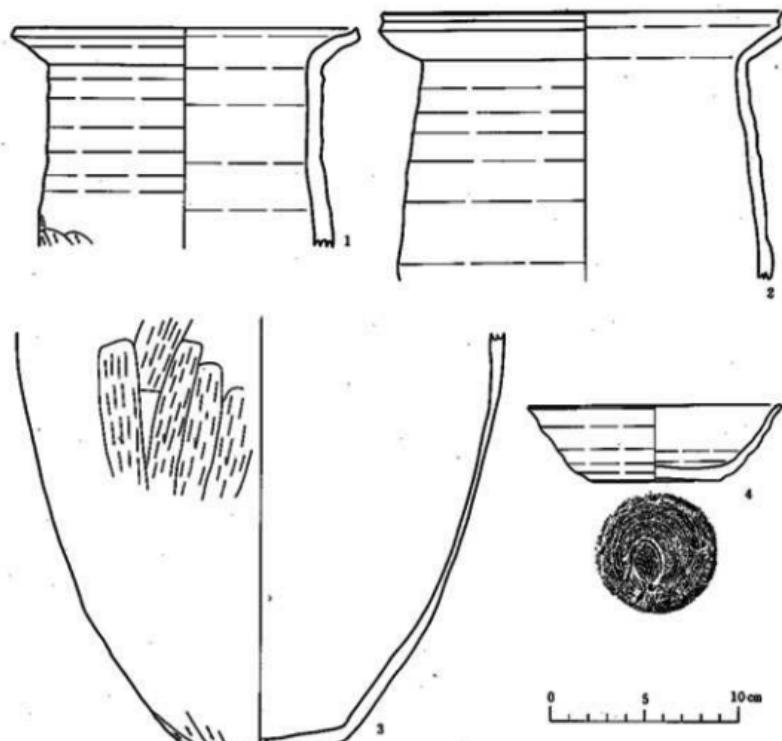
第43図 第25住居跡

住居に伴う遺物

土師器甕(1-3) 製作にロクロを使用している。口径より器高が大きい長胴形と思われる。最大径は口縁部にある。口縁部はするどく屈曲して外傾し、口縁端が上方にとび出す。内外面ともロクロ調整されているが体部外面の現存部下端にヘラケズリがみられる。3は、体部下半から底部が現存する。器面調整は、外面にヘラケズリが施され、内面は不明である。

他に壊の破片で、ロクロを使用し、底部に手持ちヘラケズリが加えられて切り離し方法の不明のものがある。

須恵器甕(4) 体部は丸味をもって外傾し、口縁部はわずかに外反する。底部の切り離しは回転糸切り技法であり、再調整はない。底部に墨書きがみられるが判読できない。



第44図 第25住居跡出土遺物

第26住居跡

〈位置〉 N-35区にある。

〈平面形〉 住居跡の大部分はすでに削平されて壊されており、北東側の一部だけが残っている。残存部からみると平面形は方形と思われる。

〈堆積土〉 確認面がごく低かったため、堆積土は壁沿いに薄く残っているにすぎない。残存部では1層だけで暗褐色土である。

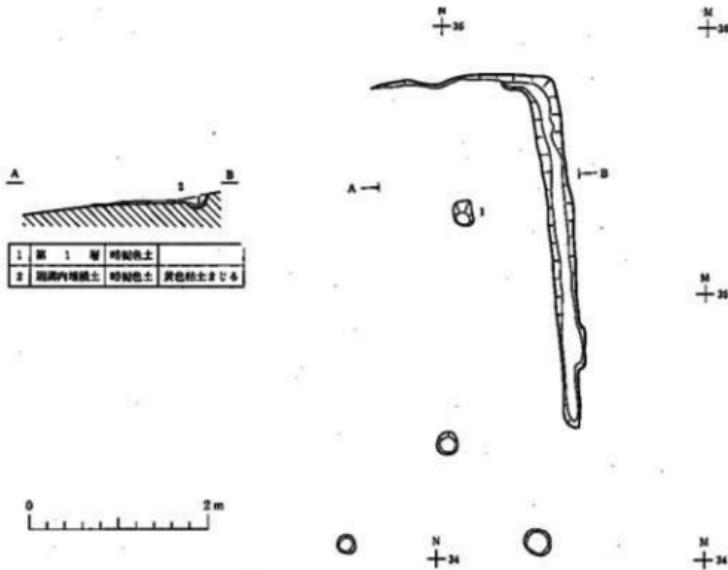
〈壁〉 北壁、東壁の一部が検出されている。残存高は、最も高い北東隅で8cmとわずかであり立ち上がりはゆるやかである。壁面は地山の土そのままで凹凸が著しくやや軟質である。

〈床面〉 北東側一部が残存する。地山の土そのままを使用しており、多少暗褐色土でよごれている。平坦で硬い。

〈柱穴〉 住居跡残存範囲内にピットは1つある。柱痕跡は確認されておらず、他に組み合うピットもないため主柱穴かどうか不明である。

〈周溝〉 北東隅から東壁沿いの壁直下にみられる。幅18~32cm、深さ2~7cmで、断面形は半円形である。

ピット番号	1
深さ(cm)	48



第45図 第26住居跡

（出土遺物）土師器（壺、甕）が出土している。堆積土出土の遺物のみであり、小破片で図示できない。

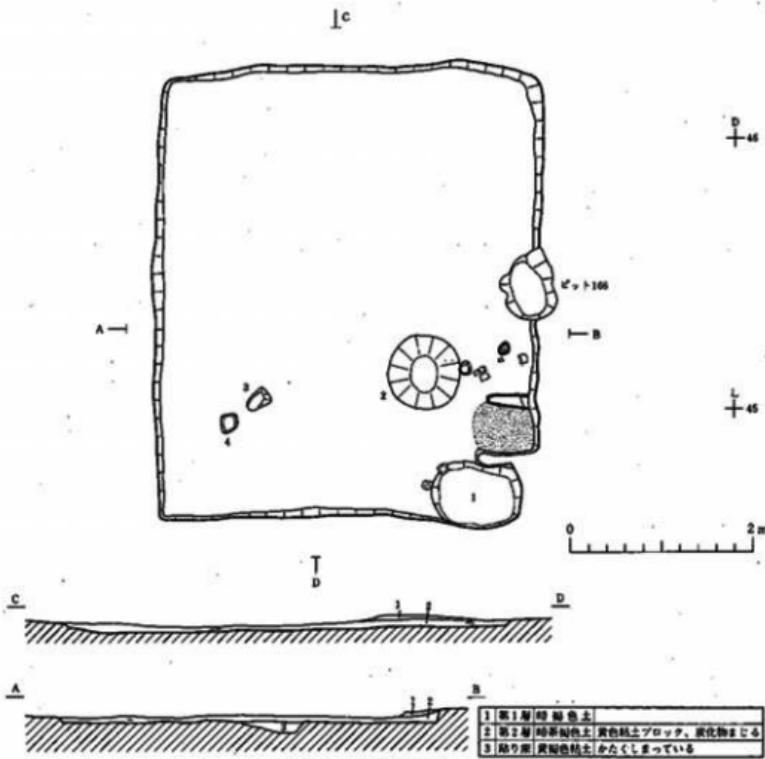
第27 住居跡

〈位置〉 MN-44・45 区にある。

〈重複〉 東壁中央部がピット159に切られている。

〈平面形〉 長軸 4.87m × 短軸 4.06m の南北に長い長方形である。また住居内面積は約 20.0 m² である。

〈堆積土〉 確認面が低く、堆積土は全体にうすい。残存部では2層に分かれ。第1層は暗褐褐色土であり、東側から南側の壁沿いに分布する。第2層は暗茶褐色土で住居全体の床面上に堆



第46図 第27住居跡

積している。

〈壁〉壁高は5~12cmと低く、立ち上がりはゆるやかである。壁面は全体に地山の土そのままであるが、凹凸が多く軟らかい。木の根による攪乱が多い。

〈床面〉地山の土をそのまま床面としている。全体に硬く細かな凹凸が多い。西側から北側に傾斜し、高低差は約5cmである。

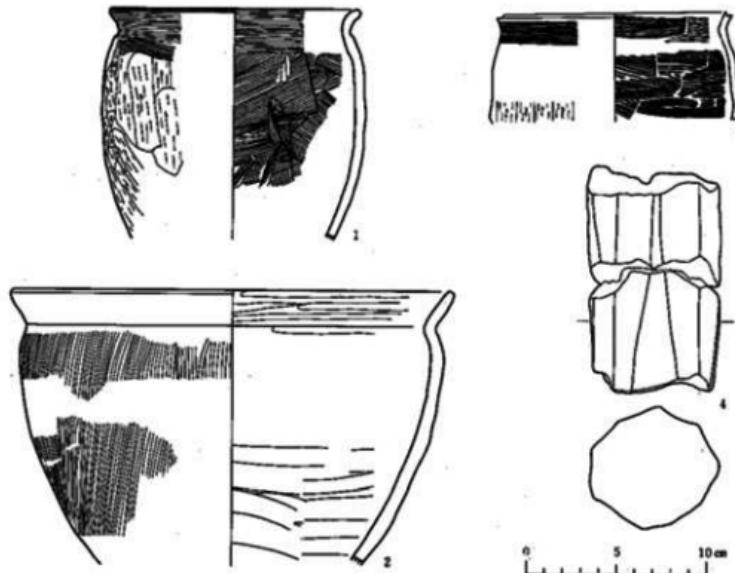
〈柱穴〉住居内には、4個のピットがある。いずれも柱痕跡は確認されておらず、配置に規則性もみられないで、主柱穴がどうか不明である。

〈カマド〉東壁よりに付設されている。煙道部は検出されなかった。軸方向はN-89°-Eである。燃焼部は壁から住居内に構築されており、幅82cm、奥行72cm、高さ14cmで天井部はすでにはない。燃焼部底面は、周囲の床面よりやや低く、中央部がくぼんだ皿状である。燃焼部底面と左右両側壁は、熱を受けて赤変し硬い。

構築方法 側壁は、黄色粘土を貼り付けて構築している。

〈貯蔵穴状ピット〉カマドの右側にある(ピット1)。底面より土師器が出土している。

ピット番号	1	2	3	4
深さ(cm)	28	30	9	5



第47図 第27住居跡出土遺物

（出土遺物）土師器（壺、甕）、須恵器（壺）、支脚が出土している。住居に伴うと考えられる遺物としては、床面上、貯蔵穴状ピット内、ピット内出土遺物がある。

住居に伴う遺物

土師器壺（1~3） 口径より器高が大きいもの（1）、小さいもの（2）がある。前者は最大径が体部にある。口頸部はくびれて外反する。頸部に段がつく。器面調整は外面の口縁部が不明で、体部に刷毛目、内面にはナデの後へラミガキが施されている。後者は体部最大径が体部上端近くにあり、口頸部はくびれて外傾する。体部外面にナデ、内面にヘラミガキがみられる。3は器高が不明である。口頸部はわずかにくびれて外傾する。口縁端に沈線状のくぼみが巡る。外面の口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリ、内面に刷毛目が施されている。

堆積土出土遺物

土製支脚- 柱状の支脚である。上下部を欠いている。側面は中軸に沿ってヘラケズリが施されている。

第28 住居跡

（位置）K・L-42・43区にある。

（重複）東側で溝1と重複しこれに切られている。

（平面形）東側は溝に壊され現存しない。また南側は削平のため壁は残存しないが、床面の範囲が確認されている。西辺長は4.3mであり、北辺長が現存部のみで4.9mであることから、東西に長い長方形であったと思われる。西壁は直線的でなく、やや外側に張り出す。住居内面積は24.4m²である。

（壁）北壁と西壁が残存する。壁高は最も高い北壁東側で13cmである。立ち上がりはゆるやかであり、下端は丸味をもつ。壁面は全体に地山の土そのままであり、硬いが、凹凸が多い。

（堆積土）確認面が床面に近く、堆積土はうすい。残存部では3層に分かれる。第1層は暗褐色土であり、北壁沿いに分布する。第2層は暗茶褐色土であり、ほぼ全体に分布し床に達する。第3層は、黄褐色土であり、南半部の床面上に堆積している。

（床面）全体に地山そのままを床面としている。細かな凹凸が多く硬い。ほぼ水平である。

（柱穴）住居確認範囲内に4個のピットがある。いずれも柱痕跡は、確認されていないが、深く、住居の4隅にあることから、主柱穴と思われる。

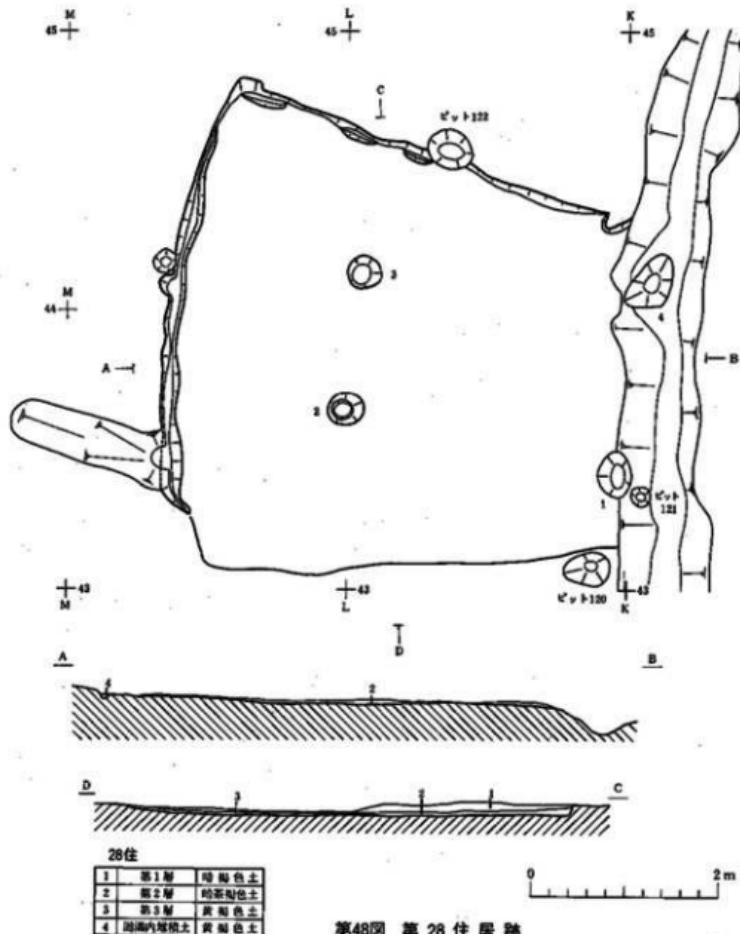
（周溝）西壁と北壁に沿って壁直下にある。西壁沿いでほぼ全体に繞くが、北壁沿いでは途切れる。幅は10~20cm、深さ2~5cmで、断面形は半円形であるが、不整形の部分が多い。

ピット番号	1	2	3	4
深さ(cm)	19	41	25	23

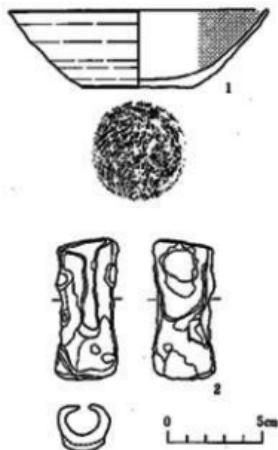
(出土遺物) 土師器(壺、高台付壺、甕)、須恵器(壺、甕、壺)、斧が出土している。住居に伴うと考えられる遺物としては、床面上およびピット内出土遺物がある。

住居に伴う遺物

土師器壺(1) 製作にロクロを使用しており、体部から口縁部までわずかに丸味をもって外傾する。底部には回転糸切り痕を残し、再調整はみられない。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。



第48図 第28住居跡



第49図 第28住居跡出土遺物

堆積土出土遺物

鉄製斧 平面形は、刃先の両端がいくぶん丸味をもつ長方形である。鍛造と思われる。着柄部は鉄板を両側から折り曲げて断面だ円形の袋状にしている。

第29住居跡

〈位置〉 M・N-47・48区にある。

〈重複〉 南東隅でピット125と重複している。新旧関係は不明である。

〈平面形〉 長軸 3.54m × 短軸 3.05m の南北に長い長方形である。また住居内面積は約 10.6 m² である。

〈堆積土〉 確認面が床面にごく近く、堆積土はうすい。残存する範囲で2層に分かれる。第1層は暗褐色土であり、南壁沿いにのみ認められる。第2層は暗茶褐色土で、住居ほぼ全体の床面上に堆積している。

〈壁〉 南西隅は、検出できなかった。残存する壁高は最も高い北東隅で7cmである。壁面は全体に地山の土そのままであり、凹凸が多く軟らかい。

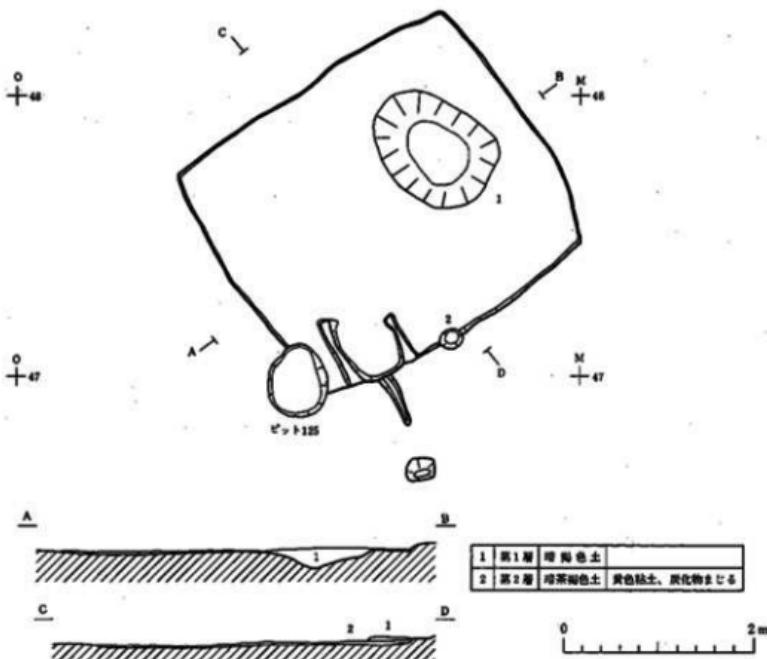
〈床面〉 地山の土そのままを床面としており、細かな凹凸が多く、硬い。部分的に暗褐色土でよごれている。ほぼ水平である。

〈柱穴〉 住居内には2個のピットがみられる。いずれも柱痕跡は確認されておらず、配置に規則性もないで主柱穴がどうか不明である。

〈カマド〉 南壁西よりに付設されている。燃焼部と煙道部から成る。軸方向は S-26° - E である。燃焼部は、住居内側に構築されており、幅66cm 奥行88cm 高さ14cmである。天井部はすぐではない。側壁の保存状態はよくない。燃焼部の底面は平坦であり、周囲の床面とほぼ同じ高さである。底面、側壁、奥壁には、焼け面がみられ熱を受けて赤変し硬い。燃焼部の底面に川原石が置かれ、その上に土師器の壊が逆位にのっている。支脚として使用されたものと思われる。煙道部は、燃焼部底面より一段高い部分から外側にのびる。幅10cm、長さ60cm、深さ4cmである。煙道部先端のさらに外側50cmのところにはピットがある。焼け面はみられないが、焼土、炭化物を堆積土に含むことから煙り出しのピットと思われる。

構築方法- 側壁は黄色粘土を貼り付けている。

ピット番号	1	2
深さ(cm)	19	15



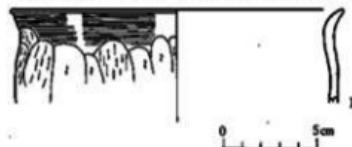
第50図 第29住居跡

（出土遺物）土師器（壺、甕）が少量出土している。住居に伴う遺物としては、カマドの支脚として利用された土器、カマド内出土遺物がある。

住居に伴う遺物

土師器甕（1） 口径より器高が高い長胴形と思われる。最大径は口縁部にある。口頸部はわずかにくびれて外反する。器面調整は外面の口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリが施されている。内面は摩滅しているがわずかに口縁部の横ナデが観察される。

他に土師器壺で、外面にロクロ調整、内面にヘラミガキ、黒色処理のみられるものがある。



第51図 第29住居跡出土遺物

第30住居跡

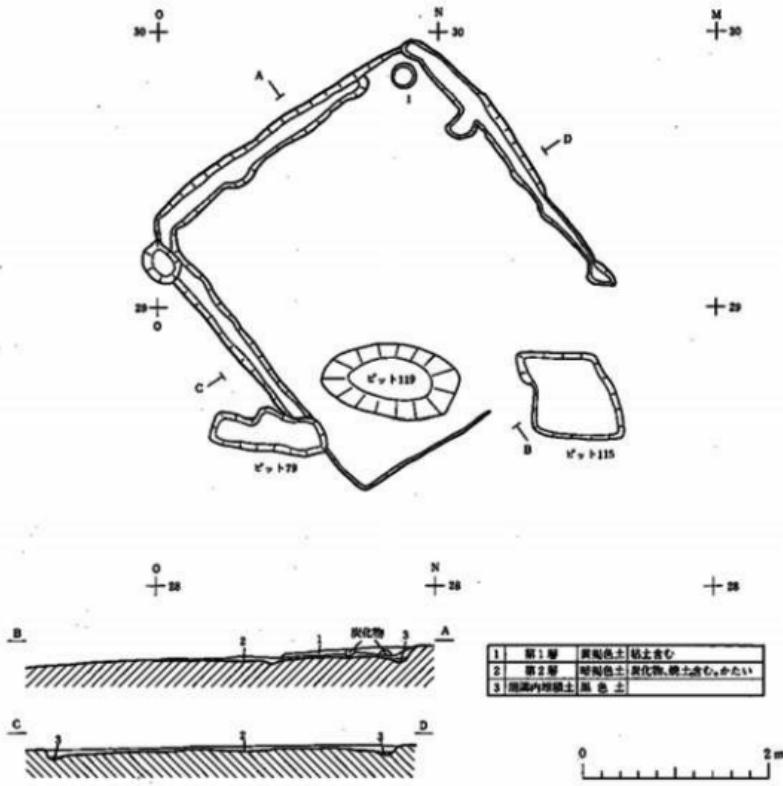
〈位置〉 N O-28・29 区にある。

〈重複〉 南半でピット 79・113・115と重複している。いずれも住居跡を切っている。

〈平面形〉 長軸 3.63m × 短軸 3.36m の正方形である。また住居内面積は約 12.2 m²である。

〈堆積土〉 確認面が床面に近いため、堆積土はうすく、また南東側では、全くなかった。残存する範囲では 2 層に分かれる。第 1 層は黄色土であり、北壁沿いにのみ分布する。第 2 層は暗褐色土で床面上に堆積している。

〈壁〉 南壁東半は検出されていない。残存部での壁高は最も高い北壁中央部で 14 cm とわずかである。立ち上がりはゆるやかである。壁面は全体に地山の土であり、平坦で硬い。



第52図 第30住居跡

〈床面〉全体に地山の土そのままを床としており、ごく平坦で硬くしまっている。北東隅から南西隅に向って約 18 cm 高低差がある。

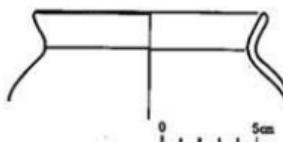
〈柱穴〉住居内にはピットが 1 つある。柱痕跡は確認されておらず、他に組み合うものもない。主柱穴がどうか不明である。

〈周溝〉西壁、北壁、東壁に沿って壁直下にみられる。北東隅で途切れる。幅は 8~30 cm、深さ 4~7 cm で断面形は半円形である。

ピット番号	1
深さ (cm)	8

〈出土遺物〉土師器(壺、蓋、甕)、須恵器(壺、甕) がごく少量出土している。住居に伴う遺物はない。
堆積土出土遺物

須恵器甕(1) 小形の甕である。最大径は下部にある。口頸部はゆるやかに屈曲し外傾する。口縁端は丸くおさまる。



第53図 第30住居跡出土遺物

2. 掘立柱建物跡と出土遺物

調査区南半で 2 棟発見されている。

第1 建物跡

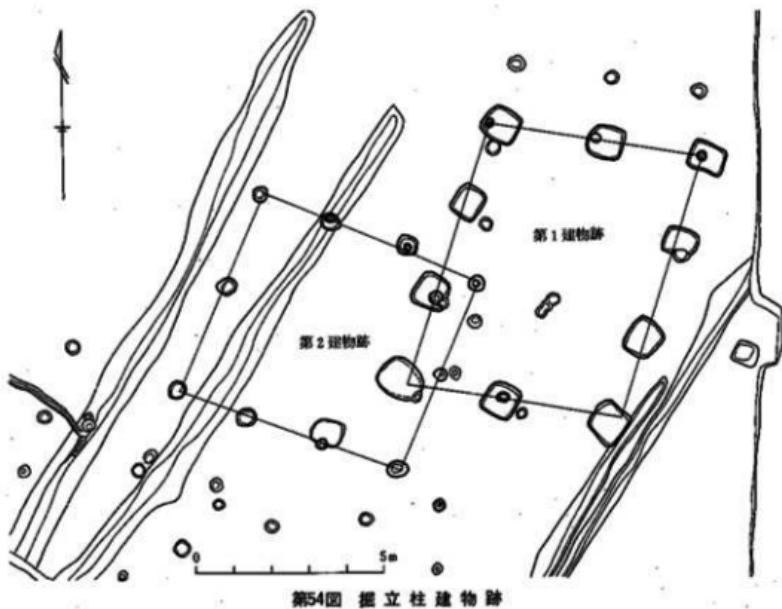
桁行 3 間 (7.2 m) × 梁間 2 間 (5.6 m) で南北に長い掘立柱建物跡である。平面形はゆがんでおり、桁行と梁行の方向が直交しない。柱痕跡の検出できなかった柱穴が多いため柱間間隔を計測できない部分が多いが、北側梁行の柱列は 2.9 m 等間隔である。柱穴は掘り方が 1 辺 80 cm 内外のほぼ方形で柱痕跡は直径 20~30 cm の円形である。

遺物は掘り方埋土から土師器、須恵器が出土している。図示できるものはない。

第2 建物跡

桁行 3 間 (6.3 m) × 梁間 2 間 (5.6 m) の東西に長い掘立柱建物である。柱間は桁行が 2.1 m、梁行が 2.8 m と梁行の方が長い。柱穴は掘り方が直径 40 cm 内外の内形で柱痕跡は検出されたものがごく少ないが、直径約 20 cm の円形である。

遺物は土師器が出土している。図示できるものはないが、掘り方埋土出土のものに口クロを使用した壺がある。



第54図 柱立柱建物跡

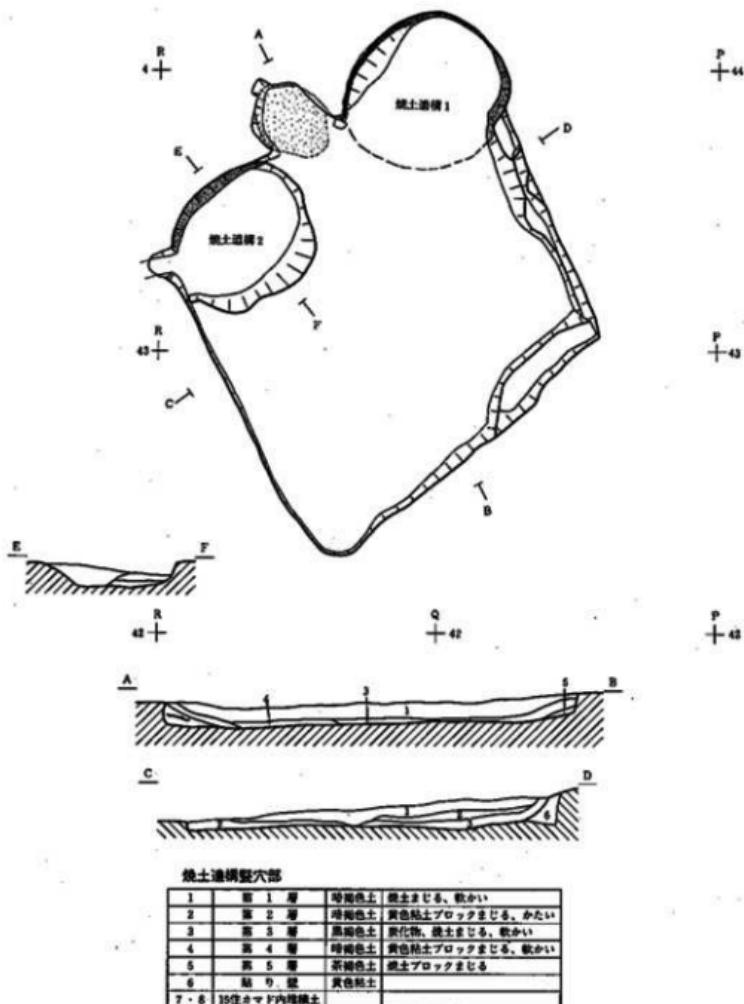
3. 焼土遺構と出土遺物

第15住居跡と重複して2基作られている。2基とも第15住居跡の北壁をいくぶん切っているが、堆積土で住居跡との切り合い関係は認められない。しかし第1焼土遺構は、住居跡東壁に貼り付けられた黄色粘土の北端をも壁面として使用しており第15跡より新しい。また粘土の貼り付けは、住居内に堆積土が流入する以前に行なわれている。したがって、第15住居跡は焼土遺構と重複していない部分も住居廃絶直後、両焼土遺構の使用されていた期間中は空間が存在していたと考えられる。したがって以下、焼土遺構の豊穴部として扱うこととする。

第1焼土遺構

平面形は長軸1.7m×短軸1.4mのだ円形で、深さは45cmある。壁は第15住居跡の北壁にくい込んだ部分のみ認められる。また第15住居跡の東壁に貼り付けた黄色粘土の北端をも壁の一部として使用している。立ち上がりは東半が垂直に近く、西半はなだらかで下端は丸味をもつ。

底面は、わずかにくぼんだ皿状となるが、第15住居跡の床面とほぼ同じ高さである。使用痕跡としては、壁上半が熱を受けて赤変し硬くなっている。



第55図 焼土遺構

堆積土としては底面上に厚さ5cmほどの炭化物と灰がみられ、その上には竪穴部の堆積土が及んでいる。

第2焼土遺構

平面形は長軸1.6m×短軸1.4mのだ円形で、深さは30cmある。壁はなだらかに立ち上がり、下端は丸味をもつ、底面は第15住居跡の床面より約20cm深く、平坦である。堆積土は3枚みられる。第1層は焼土と炭化物で北半にみられる。第2層は茶褐色土、第3層は黒褐色土で南半に堆積している。またこれらの層の上には、第1焼土遺構と同様に竪穴部の堆積土が及んでいる。

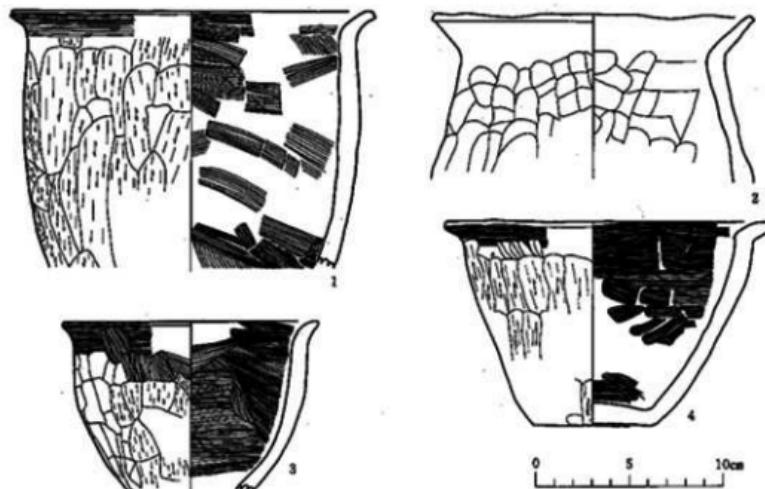
竪穴部

東壁と南壁東半に黄色粘土が貼り付けられており、凹凸の多い壁面となっている。他の壁および床面は、手を加えていない。

堆積土は4層に分かれ。第1層は暗褐色土で、東西北壁沿いを除きほぼ全体に分布する。第2層は暗褐色土で南半に分布し床面に達する。第3層は黒褐色土で南東部に分布し床面に接している。第4層は暗褐色土でカマド周辺の床面上に堆積している。

竪穴部堆積土出土遺物

土師器甕(1~4)口径より器高が大きいものと小さいものとがある。前者(1・2)は最



第56図 第15住居跡出土遺物

大径が体部に位置するものと口縁部に位置するものがある。口縁部は「く」の字に屈曲し、外反する。器面調整は、外面の口縁部に横ナデ、体部にナデ、ヘラケズリ、内面の口縁部に横ナデ、体部にナデ、ヘラナデが施されている。後者(3・4)は最大径が口縁部にあり、体部最大径の位置が上端にあるもので、口縁部は屈曲して外反あるいは外傾する。器面調整は、外面の口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリ、内面の口縁部に横ナデ、体部にナデが施されている。

4. ピットと出土遺物

住居跡 挖立柱建物跡などの他の遺構と関連しないピットが合計146個ある。それらは第1掘立柱建物跡の周囲に多くみられ、他の部分では、点々と検出されている。平面形は円形、だ円形、方形あるいは不整形のものであり、規模は径・深さとも様々である。このうちピット87・93は一括遺物が出土しており、住居跡の貯蔵穴状ピットであったとも考えられる。他は柱痕跡の確認されているピットもあるが、いずれも組み合わせが不明であり、性格を指摘できる根拠をもつものはない。

出土遺物 22個のピットより遺物が出土している。このうち図示できたのはピット17・77・79・87・93・129・154・156出土のものである。

ピット17出土遺物

土師器坏(1) 製作に口クロを使用している。体部から口縁部までほぼ直線的に外傾する。底部には、回転糸切り痕を残し再調整はみられない。内面はヘラミガキが加えられ黒色処理が施されている。

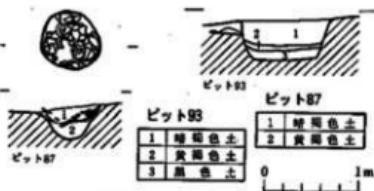
ピット77出土遺物

赤焼土器坏(3) 製作に口クロを使用している。体部は丸味をもって外傾し、口縁部でわずかに外反する。底部の切り離しは回転糸切り技法で再調整はみられない。

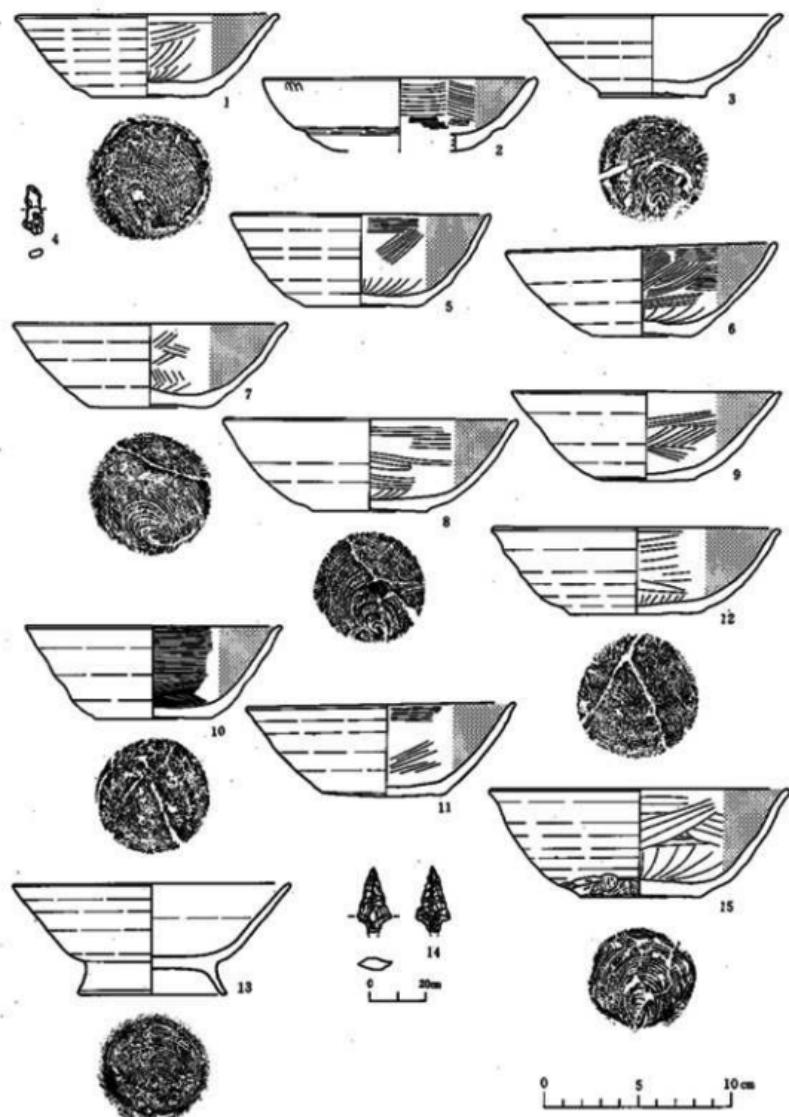
土師器坏(2) 丸底のものである。体部外面に沈線が巡る。器面調整は内外面ともヘラミガキが施され、内面はさらに黒色処理されている。

ピット79出土遺物

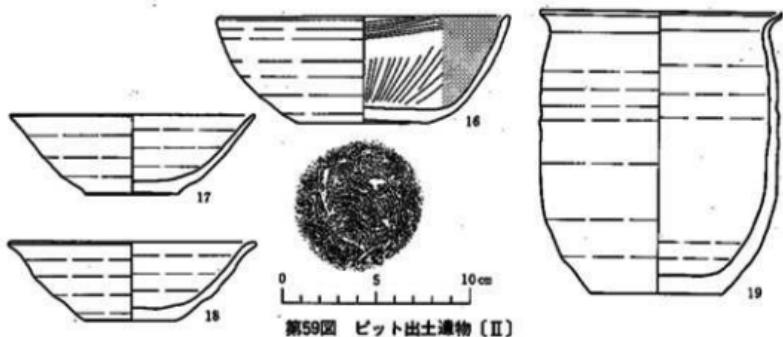
鉄製品 長方形をした破片である。断面形は長方形で刀子の茎の破片と思われる。



第57図 ピット87, 93



第58図 ピット出土遺物〔I〕



第59図 ピット出土遺物 (II)

ピット87出土遺物 2層上面より一括出土している。

土師器壺(5~12)製作に口クロを使用している。底部に回転糸切り痕を残し、再調整のみられないものと、底部に手持ちヘラケズリが加えられて切り離し方法の不明のものとがある。両者とも体部から口縁部まで丸味をもって外傾し、内面にヘラミガキが加えられ黒色処理されている。

ピット93出土遺物

赤焼土器高台付壺(13) 壺部は体下部がふくらむ器形で、底面に回転糸切り痕を残している。高台は高く、張り出している。

ピット129出土遺物

石鏸(14) 有茎の鏸である。茎先端を欠いている。両面とも細かな加工が加えられている。

ピット154出土遺物

土師器壺(15~16) 製作に口クロを使用している。底部の切り離し方法は回転糸切り技法であり、再調整のないもの(16)と、体部下端から底部縁辺にかけて手持ちヘラケズリの加えられているもの(15)とがある。内面はヘラミガキが加えられ、黒色処理されている。

赤焼土器壺(17~18) 製作に口クロを使用し、底部の切り離しは、回転糸切り技法で再調整はみられない。

ピット156出土遺物

赤焼土器壺(19) 製作に口クロを使用している。器高が口径より大きい。最大径は口縁部に

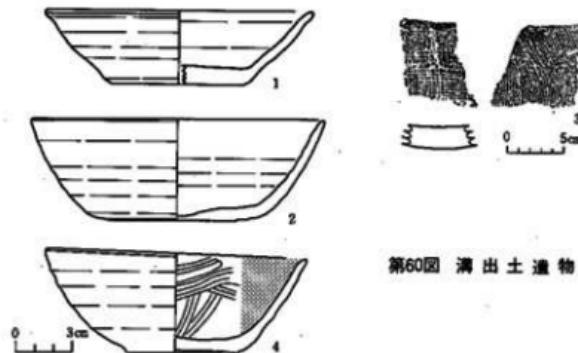
ある。内外ともロクロ調整されており、底部には不明瞭ではあるが回転糸切り痕がみられ、再調整は施されていない。

5. その他の遺構と出土遺物

焼け面溝、井戸、池がある。溝は住居跡に伴う 3、4 を除いて内部の堆積土がいずれも表土と区別できない土である。また井戸、池は、調査範囲内中央部に大正時代まで存在していた屋敷に付属するものである。

焼け面

グリッド番号 I33、K36 の 2ヶ所で検出された。範囲は、I33 では 45 cm × 26 cm、K36 では 60 cm × 22 cm であり、両方とも焼けた面自体は削平され、熱の及んだ部分が残存している。



第60図 溝出土遺物

溝 1 出土遺物

須恵器壺(1・2) 底部の切り離しは、回転糸切り技法であり、再調整はない。体部から口縁部まで直線的に外傾するものと、体部下半が張るものがある。

溝 20 出土遺物

瓦(3) 平瓦の破片である。凸面に繩叩き目、凹面に布目が観察される。

溝 29 出土遺物

土師器壺(4) 製作にロクロを使用している。体部から口縁部まで丸味をもって外傾する。底部に回転糸切り痕を残し再調整はない。内面はヘラミガキが加えられ、黒色処理されている。

6. 表土および地点不明の遺物

縄文土器

縄文土器の小破片が2点出土している。いずれも胴部の小破片のため、器形は不明である。

1は、胎土に多量の纖維を含み外面は磨滅している。胎土に纖維を含むことから、縄文時代早期末から前期初頭のものと考えられる。

2は、外面に単節縄文(LR)が施文されており、内面もヘラミガキ調整されている。胎土には纖維を含まず、器厚も薄く焼成も良い。時期を限定することはできない。

弥生土器

弥生土器の破片が3点出土している。3は、口縁部を欠いているが、甕頸部の破片と思われ、わずかに外傾している。外面には、綾络文が施文されている。4は、外面に燃糸文(R)が施文されている。5は底径4.3mmの底部破片で底面に木葉痕が認められる。体部外面に単節縄文(LR)が施文されているが、内面には7~8mm単位の輪積痕が認められる。時期は限定できない。

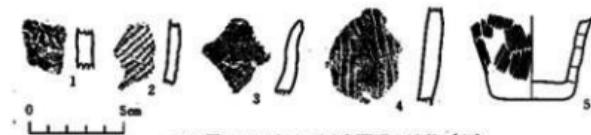
土師器

坏(1~10) 製作にロクロを使用している。底部の切り離しは、回転系切り技法によるもの(1~9)と、再調整が加えられて不明のもの(10)がある。前者は体部が丸味をもって外傾し口縁部でわずかに外反する。外面に再調整はみられず、内面はヘラミガキが加えられ、黒色処理されている。外面は体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリされ、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。後者は上半を欠く。底部に墨書きされているが判読できない。

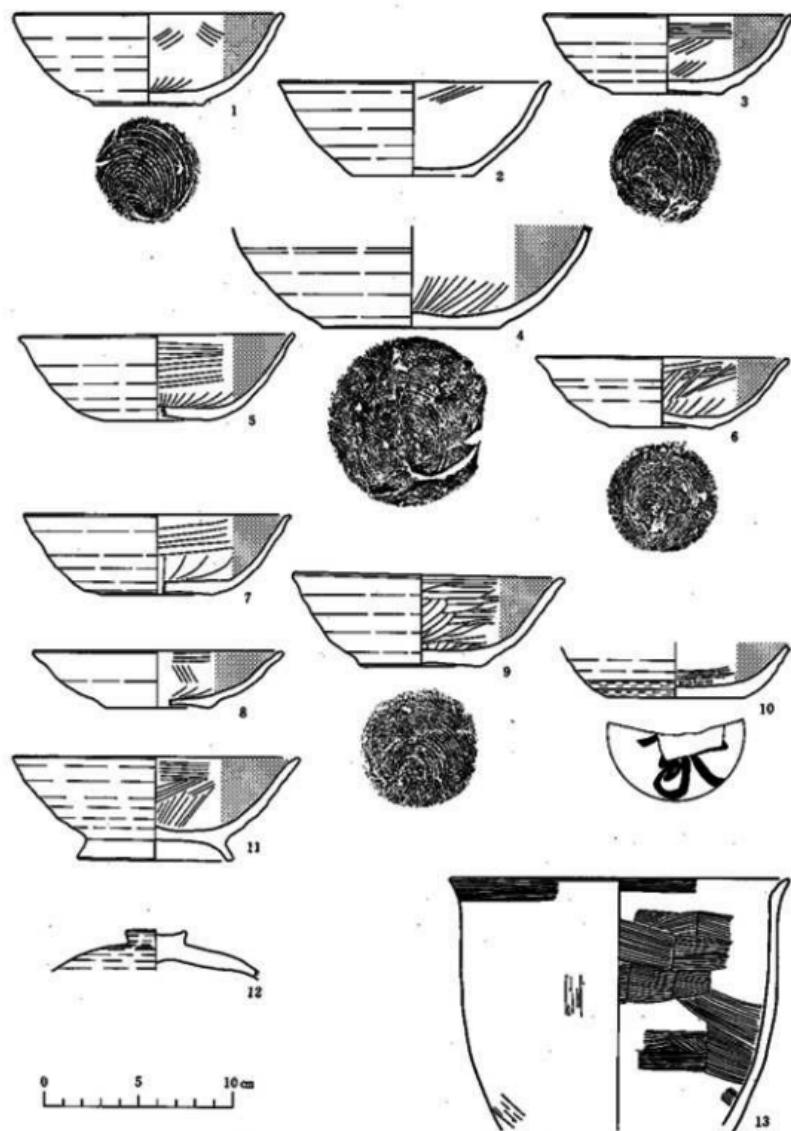
高台付坏(11) 坏部は、体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がる。高台部は強く張り出している。坏底部に回転ヘラケズリが加えられており、切り離し方法は不明である。

蓋(12) 口縁部を欠いている。つまみ部は中央がわずかに盛り上がるが、周縁よりは低い。内外面にロクロ調整がみられる。

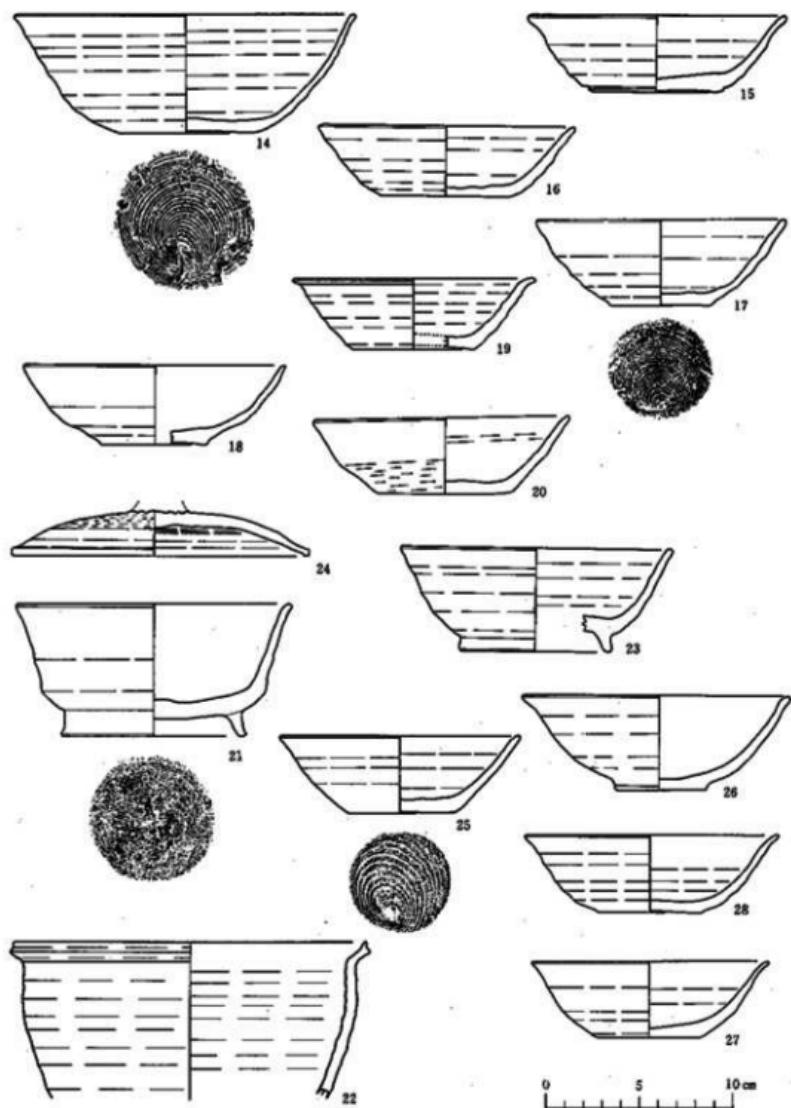
甕(13) 口径が器高より大きく、最大径が口縁部に位置している。体部最大径の位置は上面にある。口頸部はゆるやかに外反する。器面調整は、外面の口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリ、内面の口縁部に横ナデ、体部に刷毛目が施されている。



第61図 表土および地点不明の遺物(I)



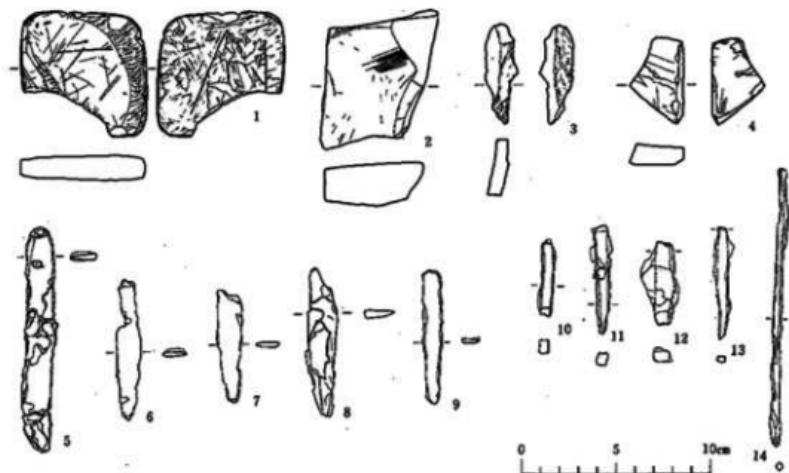
第62図 表土および地点不明の遺物〔II〕



第63図 表土および地点不明の遺物〔Ⅲ〕



第64図 壺土および地点不明の遺物 (IV)



第65図 表土および地点不明の遺物 (V)

須恵器

坏 (14~20) 底部の切り離しが、回転糸切り技法のものと再調整されて不明なものがある。前者は体部から口縁部までわずかに丸味をもって外傾するものと、口縁部で外反するものがある。再調整はみられない。後者は体部から口縁部までほぼ直線的に外傾する。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。

高台付坏 (21~23) 坏体部に稜をもつもの（稜塊）と、もたないものがある。前者は段から上がり外反気味である。高台は先端部が反っている。坏底部に回転ヘラケズリが施され、切り離し方法は不明である。後者は体部下半が丸味をもつ。高台はいくぶん開いている。坏底部に回転糸切り痕を残している。

蓋 (24) つまみは欠損している。天井部はなだらかで口縁端部が下方に折れ曲がる。天井部外面に回転ヘラケズリが加えられ、つまみとの接合部にはうず巻状の細いみぞがみられる。

甕 (22) 最大径が口縁部にある。口頭部はゆるやかに屈曲して外傾し、口縁端が上方に突き出す。

赤焼土器坏 (25~28)

体部から口縁部まで直線的に外傾するものと、体部が丸味をもち口縁部がわずかに外反するものがある。底部切り離しは回転糸切り技法によるもので、再調整は認められない。

瓦 平瓦の破片が5点出土している。凸面はナデが施されて叩き目が観察されないものと、

縄叩き目のみられるものとがある。凹面は布目が残る。

石製品 石鎌、砥石が出土している。64図7は平面形が二等辺三角形の無茎鎌である。両面に細かな加工が施されている。64図8~15、65図1~4は砥石である。完形品ではないが、全体形の推定できるものでみると、平面形が正方形のものは1点で他はすべて長方形である。長方形のものには板状のものと柱状のものがあり、砥磨面の数は板状のものには2面、柱状のものには4面みられる。また、なかには成形の際の削りや、幅1.5mmほどの筋がみられるものもある。

鉄製品 5~9は刀子である。いずれも身の破片で、鋸化が著しく細部については不明である。10~14は、断面形が四角で棒状であり、釘と思われる。

IV 遺構と遺物に関する問題点

1. 出土土器の観察と分類

出土土器には土師器、須恵器、赤焼土器、縄文土器があるが、縄文土器については前に述べてあるので、ここでは土師器、須恵器、赤焼土器について述べる。なお、すべて実測図の作製できたものを対象にしている。

《土師器》

土師器には、壺、甕、高台付壺、蓋がある。

おののについて、色調、製作技法、器形の観察を行ない法量（口径、器高、底径）を計測した。分類は器形と製作技法によって行なった。なお、色調の観察には、日本色彩社刊の「Today's Color 300」を使用した。

〈色調〉出土量の多い壺、高台付壺、甕について色調を観察した。なお、観察は外面に限っている。

壺、高台付壺- 外面の色調は、色相・明度・彩度の違いから 16 種類のものが認められた。数量的にみると、黄味白色(1.0 YR 8.0/6.0) が最も多く、にぶ橙色(6.5 YR 7.5/6.0, 4.0 YR 7.5/7.5)、にぶ黄橙色(8.0 YR 6.0/2.5)、明るい黄橙色(1.0 YR 8.0/6.0)などがこれに次いでいる。他には茶、黄系の色が多い。

第1表 土師器壺・高台付壺の色調

色 調	黒 級番 号
明るい茶	3.YGR 5.5/4.0
うす 茶	4.YGR 8.5/4.0
にぶ 茶	4.YGR 7.5/7.5
うす 橙	5.YGR 7.5/6.5
黄 系	5.YGR 5.0/5.0
にぶ 橙	6.YGR 7.5/6.0
明るい黃茶	7.YGR 4.0/2.0
赤味 黃茶	7.YGR 7.0/2.5
黄 橙	7.YGR 2.5/0.5
にぶ 黄茶	8.YGR 6.0/2.5
にぶ 橙	8.YGR 5.5/6.0
赤味 黄茶	8.YGR 8.0/6.0
赤味 黄茶	8.YGR 4.5/2.0
明るい黄茶	10.YGR 6.0/2.0
黄味 白	1.YYR 8.5/3.0
明るい黄茶	1.YYR 8.0/5.0

第2表 土師器甕の色調

色 調	黒 級番 号
明るい茶	2.YGR 5.0/9.0
明るい茶	3.YGR 5.5/4.0
明るい茶	3.YGR 5.5/7.0
うす 茶	4.YGR 8.5/4.0
にぶ 橙	4.YGR 7.5/7.0
茶 色	4.YGR 5.0/4.0
うす 橙	5.YGR 7.5/6.0
うす 茶	5.YGR 7.5/2.0
にぶ 橙	6.YGR 7.5/6.0
にぶ 茶	7.YGR 7.0/7.0
赤味 白	8.YGR 4.5/2.0
明るい黄茶	1.0Y 8.0/6.0
黄味 白	1.0Y 8.5/3.0
黄 茶	2.YYR 5.0/3.0

甕- 外面の色調は15種類のものが認められた。にぶ橙色(4.0Y R7.5/7.5, 6.5Y R7.5/6.0, 7.5Y R7.0/7.0, 8.0Y R5.5/6.0)が最も多く、明るい茶色(2.5Y R5.0/9.0, 3.0Y R5.5/4.0, 3.5Y R5.5/7.0)がこれに次いでいる。他には、茶、黄系の色が多い。

〈分類〉

〔坏〕

坏には製作に口クロを使用していないものと、使用しているものとがある。前者は底部形態によって2類に、後者は底部の切り離し方法によって3類に大別される。

A類：口クロを使用せず、底部が丸底のもの。

B類：口クロを使用せず、底部が平底のもの。

C類：口クロを使用し、底部の切り離しがヘラ切り技法によるもの。

D類：口クロを使用し、底部の切り離しが回転糸切り技法によるもの。

E類：口クロを使用し、底部に再調整が加えられて切り離し技法が不明なもの。

以上の各類は、さらに器面調整の特徴によっていくつかに細分される。

〈坏A類〉 製作に口クロを使用せず、底部形態が丸底のものである。外面の体部下半あるいは体部下端に沈線が巡り、沈線から上の器形はわずかな丸味をもって外傾している。器面調整は外面の沈線から上にヘラミガキ、沈線から下にヘラケズリの施されているものと、外面全体にヘラミガキの施されるものとがある。内面はヘラミガキ・黒色処理がみられる。ヘラミガキの方向は、上半が横方向、下半は放射状のものと平行なものとがある。

〈坏B類〉 製作に口クロを使用せず、底部形態が平底のものである。器形は体部から口縁部まで丸味をもって外傾し、沈線はみられない。器面調整は、外面の口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリの後ヘラミガキが施され、底部は調整不明である。内面は口縁部から体部上半に横ナデ、体部下半以下にヘラミガキがみられ、黒色処理されている。

〈坏C類〉 製作に口クロを使用しており、底部の切り離しがヘラ切り技法によるものである。口クロは右回転である。器形は体部から丸味をもって外傾し、口縁部でわずかに外反する。外面に再調整はみられない。内面はヘラミガキが施されているが、黒色処理は観察されない。ヘラミガキの方向は不明である。

〈坏D類〉 口クロを使用し、底部の切り離しが回転糸切り技法によるものである。口クロは左回転が1点あり、他は右回転である。再調整が加えられているものをD I類、再調整の加えられないものをD II類とする。

D I類- 再調整の加えられているものである。体部下端から底部縁辺にかけて手持ちヘラケズリが施されている。器形は体部が丸味をもって外傾し、口縁部がわずかに外反するものと、体

第3表 土師器坏の分類

ロ ク ロ 不 使 用	A. 底部丸底		体部外面に沈線	
	B. 底部平底		全体に外傾ふくらむ	
ロ ク ロ 平 底	C. 回転ヘラ切り	再調整なし		
		D. 回転糸切	I. 再調整あり	手持ちヘラケズリ一体下端～底縁
			II. 再調整なし	
使 用	E. 不 明	再調整あり	1. 手持ちヘラケズリ～底部	
			2. 回転ヘラケズリ一体下端～底部	

部から口縁部まで丸味をもって外傾するものとがある。器面調整は、外面にロクロ調整、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は、上半が横、下半が放射状のものがある。

D II類- 再調整の加えられていないものである。器形は体部が丸味をもって外傾して口縁部がわずかに外反するものが多く、他に体部から口縁部まで全体に丸味をもって外傾するもの、直線的に外傾するものなどがある。器面調整は外面にロクロ調整、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は上半が横あるいは斜め方向、下半が放射状のものが多い。

（坏 E 類） 製作にロクロを使用しており、底部に再調整が加えられて切り離し技法が不明なものである。ロクロは右回転である。再調整には、(1)底部に手持ちヘラケズリの施されているもの、(2)体部下半から底部に回転ヘラケズリの施されているものの二種がある。器形は体部から口縁部まで丸味をもって外傾する。なお(2)には墨書きがみられる。器面調整は外面にロクロ調整、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は上半が横あるいは斜め方向、下半は放射状と平行なものとがある。

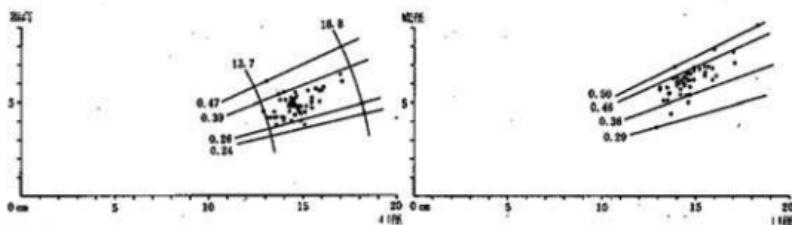
坏の法量

C・D・E 類の坏について口径・器高・底径を計測し、それぞれの関係を図示したものが第4表である。なお計測に際しては、図示できたものを使用しており、その中には完形品だけではなく破片も含まれているので、すべて実測図をもとにした。そのため土器が多少なりともゆがんでいる場合には実測した位置によって数値が変化する。したがって、計測値はある程度幅をもたせて考えることが必要になっている。x軸に口径を、y軸に器高・底径をとっている。「大き

さ」は口径対器高の図の0から点までの長さ($\sqrt{x^2+y^2}$)、「比率」は口径1に対する器高・底径の割合である。

大きさ($\sqrt{(口徑)^2+(器高)^2}$)は、13.7~18.8と分布の幅は大きいが、口径に対する器高および底径の割合は分布が狭い範囲に集まっている。口径を1とすると器高は0.47~0.24の間にあり、0.39~0.27の間に集中している。底径は0.50~0.29の間にあり、0.46~0.37に集中する。また類別に分布の異なることはない。

第4表 土器環の法量



〔高台付環〕

製作にロクロを使用しているものである。2例のみ出土している。環部外面底部に回転糸切り痕を残すもの(A類)と、高台接合時のロクロ調整のため切り離し技法の不明なもの(B類)がある。器面調整は外面にロクロ調整、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は上半が横方向、下半が放射状のものがある。

〔環〕

製作にロクロを使用したものと、使用していないものとがある。それらは口径と器高の比率最大径の位置によって次のように大別される。

- A類：ロクロを使用せず、口径より器高が大きく最大径の位置が口縁部にあるもの。
 - B類：ロクロを使用せず、口径より器高が大きく最大径の位置が体部にあるもの。
 - C類：ロクロを使用せず、口径より器高が小さいもの。
 - D類：ロクロを使用しており、口径より器高が大きいもの。
 - E類：ロクロを使用しており、口径より器高が小さいもの。
- (標A類) 製作にロクロを使用しておらず、器高が口径より大きく最大径が口縁部に位置するものである。長胴形といわれるものに該当する。口頸部はくびれずに外反あるいは外傾する。体部の器面調整は外面に刷毛目、刷毛目のちヘラケズリ、ヘラケズリが施されている。内面

は刷毛目あるいはヘラナデがみられる。

（甕B類） 製作にロクロを使用しておらず、器高が口径より大きく最大径が体部に位置するものである。体部はゆるやかな曲線を描き、体部径と口径の差はわずかである。頸部に段をもち体部と口縁部を区画するもの（B I類）と、段がなく体部から口縁部へならかに移行するもの（B II類）とに細分される。B I類とB II類とを比較すると、B I類は小形であり、B II類は大形で長胴形といわれるものである。

体部の器面調整は外面にナデ、ヘラケズリ、内面にナデ、ヘラナデが施されている。

（甕C類） 製作にロクロを使用せず、口径が器高より大きいものである。最大径は口縁部に位置する。体部の最大径の位置で、体部上端にあるもの（C I類）と、体部中央あるいは上半にあるもの（C II類）とに細分される。

C I類- 口頸部は「く」の字にくびれて外傾するもの（2）、くびれず屈曲して外反・外傾するもの（2）、体部から変化なく口縁部へ移行するもの（3）がある。（1）は大形、（2）・（3）は小形である。

体部の器面調整は外面に刷毛目、ヘラケズリが、内面にヘラミガキ、刷毛目、ナデ、ヘラナデが施されている。

C I類はいわゆる鉢形であるが、口縁部から体部上半の器形をみると、なかにはA類の器形にごく近似しているものが含まれている。

C II類- 口頸部はくびれて外反する。体部径と口径の差はごくわずかである。器面調整は外面の口縁部に横ナデ、体部に刷毛目のうちヘラケズリ、内面の口縁部に横ナデ、体部に刷毛目が施されている。この類は、口縁部から体部上半の器形をみると、A類にごく近似している。

（甕D類） 製作にロクロを使用しており、器高が口径より大きいものである。最大径は口縁部に位置する。口頸部はなだらかに外反あるいは外傾する。口縁端部が上方に突き出すもの（1）と丸くおさまるもの（2）がある。体部の器面調整は内外面ともロクロ調整で、外面にヘラケズ

第5表 土器器型の分類

ロ タ の 不 使 用	口径と器高	最大径の位置	体部最大径の位置	口 頸 部	
				A. 口縁部	B. 体 部
	口径>器高	C. 口縁部	(1). 上 端	(1). 「く」字にくびれて外傾	(1). 段あり (2). 段なし
				(2). くびれず屈曲して外反・外傾	(1). 段あり (2). 段なし
				(3). 体部から変化なく移行	
		II. 上 半			
ロ タ の 使 用	口径<器高	D. 口縁部		(1). 口縁端突き出す (2). 丸くおさまる	
	口径>器高	E. 口縁部		(1). 口縁端突き出す (2). 丸くおさまる	

りが施されている。

（壺E類）製作にロクロを使用しており、口径が器高より大きいものである。口縁部はなだらかに外傾・外反する。体部下半が急にすぼまる。口縁端部は上方に突き出すもの(1)と丸くおさまるもの(2)がある。体部の器面調整は内外面ともロクロ調整で、外面にヘラケズリが施されている。

《須恵器》

須恵器には壺、甕、高台付壺、腕、壺が出土している。これらのうち出土量の多い壺、高台付壺については分類が可能である。

（色調）壺、高台付壺、甕について外面の色調を観察している。

壺の色調は13種類みられ、緑味灰色(5.0 G5.0/0.5)が大半を占め、うす黄茶色(1.0 Y7.5/2.0)がこれに次いでいる。他には灰・白系の色が多い。甕は実測図の作製できたものがごく少ないためか、茶灰色(2.5 YR3.5/0.5)のみである。

〈分類〉

[壺]

底部の切り離し技法および再調整の有無で大別する。器形は体部から口縁部まで直線的に外傾するもの、体部が丸味をもち口縁部がわずかに外反するもの、体部から口縁部まで丸味をもって外傾するものなど細部において若干の違いはみとめられるが、基本的には平底で、体部から口縁部まで外傾するという点で共通している。ロクロの回転方向はすべて右方向である。

（壺A類）ヘラ切り技法によって切り離されたものである。再調整は加えられていない。

（壺B類）回転糸切り技法によって切り離されている。再調整は加えられていない。

（壺C類）再調整のために切り離し技法が不明のものである。体部下端から底部全体に回転ヘラケズリが施されている。

壺の法量

壺の口径・器高・底径を土師器壺の場合と同じ方法で計測し、図示したのが第7表である。大きさでは12.6~19.5とかなり幅があるが、比率は狭い範囲に集中している。口径を1とする、器高は0.48~0.25の間にあり、0.35~0.25に集中する。底径は0.69~0.38の間にあり、特

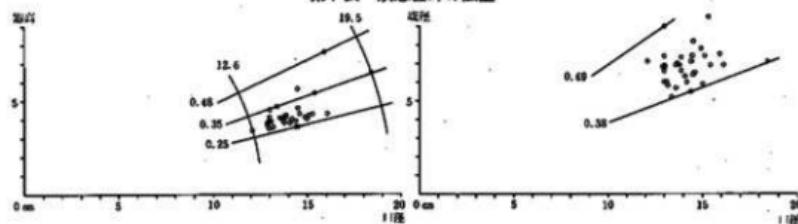
第6表 須恵器の色調

壺・高台付壺		登録番号
色	調	
うす	緑	3.SYR 8.5/2.0
茶	色	4.DYR 5.0/4.0
暗い	黄茶	7.SYR 3.0/1.0
明るい	黄茶	10.0YR 4.0/2.0
黄	茶	1.0Y 6.0/3.0
うす	黄茶	1.0Y 4.5/2.0
明るい	茶	1.0Y 7.5/2.0
明るいオーブ	茶	2.0Y 6.5/1.0
黄	白	2.5Y 7.0/2.0
茶	白	5.0Y 9.0/1.0
灰	茶	2.0G 8.5/0.5
解	味	5.0G 5.0/0.5
暗い	灰	N4.0

甕		登録番号
色	調	
茶	灰	2.SYR 3.5/0.5

に集中する部分はない。

第7表 須恵器壺の法量



〔高台付壺〕

図示可能なものは3例である。壺部に稜をもつもの(A類)と稜がなく外傾するもの(B類)とがある。

〔高台付壺A類(稜窪)〕 壺体部下半に明瞭な稜をもつ。段から上は外反気味である。底部に回転ヘラケズリが施されている。高台は外側に開いている。

〔高台付壺B類〕 壺体部下半は丸味をもつが、稜はつかない。壺底部に回転糸切り痕を残している。高台はいくぶん開くが、直線的なものと、反るものとがある。

〔甕、塊、壺〕

これらについては、特に甕は出土量も多いが、実測図の作製可能なもののがごく少なく、また個々に器形の特徴が異なるため分類は行なわなかった。

《赤焼土器》

製作にロクロを使用し、底部の切り離しが回転糸切り技法により、内外面に全く再調整の加えられていないものである。壺、高台付壺、甕がある。

〔色調〕 壺に7種類みられ、にぶ橙色(4.0YR7.5/7.5, 6.5YR)が多く、黄味白色(1.0Y8.5/3.0)がこれに次いでいる。他には茶、橙系の色が多い。

〔壺、高台付壺〕

壺は器形に若干の違いはあるが、体部から口縁部まで外傾するという特徴が共通している。高台付壺は図示できたものが1例のみである。

また土師器・須恵器と同じ方法で壺の口径、器高、底径を計測し、相互の関係を図示すると第9表のようになる。点数が少ないためか分布はまとまっている。大きさは13.3~15.4、口径1に対する器高の割合は0.3~0.28の間にあり、底径の割合は0.47~0.33の間にある。

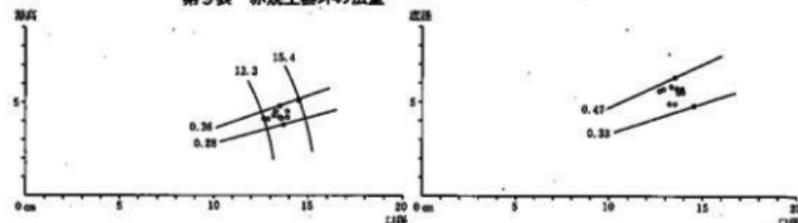
〔甕〕

最大径はいずれも口縁部にあり、口縁部はわずかにくびれて外傾、外反し、口縁端部が上方

第8表 赤焼土器の色調

色 調	登録番号	色 調	登録番号
明るい茶 3.5 YR 5.5/7.0	48、	明るい茶灰 10.0 YR 6.0/2.0	39、
にぶい緑 4.0 YR 7.5/7.5	5、	黄味白 1.0 Y 8.5/3.0	25, 32, 130
うす緑 5.0 YR 7.5/6.5	65、	黄	
うす茶 5.0 YR 7.5/2.5	151、	明るい茶 3.5 YR 5.5/7.0	50、
にぶい緑 6.5 YR 7.5/6.0	6, 30, 77	灰味黄緑 7.5 YR 7.0/2.5	110

第9表 赤焼土器壺の法量



に突き出す。口径より器高が大きいものと小さいものとがあるが図示できたものはそれぞれ1点ずつとごく少ないため分類は行なわなかった。

以上のように土師器、須恵器、赤焼土器の分類を行なった。図示した土器をこの分類にあてはめると第10表のようになる。

2. 出土土器の組み合わせとその年代

出土土器は前項のように分類され、それらの住居内における伴出関係は第11表のとおりである。次に各住居に共通する特徴をもつ土器によって組み合わせ関係を検討する。

土師器壺の共伴関係をみると、個体数の大半を占める口クロ使用のD II・E I類がピット87において共伴している以外、すべての類が単独で出土している。

土師器壺では、口クロを使用したD類が他の類と伴出することが多く、第10住居跡でE類と第15住居跡でA類と、第18住居跡でA・C II類と、第24住居跡でB類と共に伴出している。また第27住居跡ではB類とC II類とが伴出している。

壺と甕との関係をみると、壺D II類は甕A・C I・C II・D類と共に伴出している。壺の他の類は甕と共に伴していない。高台付壺、蓋は他の器形に伴っている例がない。

したがって、土師器は壺D II類と甕のすべての類について組み合わせが成立している。

須恵器は、壺B類が第9-13住居跡で土師器壺D II類に伴い、壺C類が第1住居跡で土師器壺A類に伴っている。そのほか、甕が第3住居跡で壺C類に、第12住居跡などでB類に伴っている。壺は第15住居跡で土師器甕D類に、鉢は第12住居跡で壺B類に伴っており、高台付壺、蓋は遺構に伴うものがない。

第10表 土器觀察表 ①

回 数 番 号	地 区 ・ 層 数 番 号	定 名	種 別	形 状	外 國 銘 印	内 國 銘 印	底 部 特 徴	CMB	MHD	底 径	高 度	分 類
口 縁 部	側 面	底 部	口 縁 部	側 面	底 部	口 縁 部	側 面	底 部	口 縁 部	側 面	底 部	分 類
第600	2 住 室	97 土 壁 等	片	丸	2 バキ	ケズリ	ハラカガ	15.1	10.8	3.5	A	
2 2 住 室	148 滅 墓 等	片	有	口 クロ	ロ クロ	ロ クロ	不	13.0	9.0	3.9	C	
3 2 住 - 1	103 *	*	*	*	*	*	*	14.9	8.8	4.1	C	
3 2 住 室	160 *	*	*	*	*	*	*	15.9	7.5	7.6	C	
3 2 住 p144	106 *	*	*	*	*	*	*	29.1	(9.4)			
3 住カマニ-1	124 土 壁 等	片	有	テ ズ リ	*	*	*	12.7	6.8	4.0		
2 *	82 *	環	環	ロ クロ	ロ クロ	ロ クロ	不	22.7	(7.3)			
第1200	9住P1-1 - 1	35 *	片	片	ヘラカガ	ヘラカガ	ヘラカガ	13.3	5.1	4.2	D - E	
2 *	99 *	*	*	*	*	*	*	14.9	6.9	4.0	D - E	
3 住カマニ-1	38 *	*	*	*	*	*	*	13.9	6.9	4.2	D - E	
4 9 住 - 1	100 *	*	*	*	*	*	*	14.6	6.6	4.3	D - E	
5 9 住 - 1	33 *	*	*	*	*	*	*	14.2	5.7	4.8	D - E	
6 9 住 - 1	34 *	*	*	*	*	*	*	17.1	7.1	6.1	D - E	
7 9 住 - 1	36 *	*	*	*	*	*	*	13.6	5.5	4.2	D - E	
8 *	37 *	*	*	*	*	*	*	12.9	3.7	4.5	D - E	
9 *	90 *	*	*	*	*	*	*	14.9	6.2	4.8	D - E	
10 *	91 *	*	*	*	*	*	*	14.4	6.4	4.0	D - E	
11 *	92 *	*	*	*	*	*	*	17.0	7.7	6.5	D - E	
12 9住 P1-3 - 1	31 土 壁 等	*	*	*	*	*	不	13.9	5.	3.8		
13 9 住 - 1	49 滅 墓 等	*	*	*	*	*	ロ クロ	ロ クロ	5.7	4.1	B	
10 住 - 3 A	9 土 壁 等	無	横	ナ テ	1 ガ キ	1 ガ キ	1 ガ キ	21.5	5.3	6.9		
2 10住1月カマニ	102 *	寶	口 クロ	ケズリ	ロ クロ	ロ クロ	ナ ゲ デ	26.8	(18.3)			
3 *	41 *	*	*	ロ クロ	ロ クロ	ロ クロ	不	22.0	(26.6)	D - (3)		
4 *	104 土 壁 等	*	*	*	*	*	ロ クロ	10.6	(11.0)	D - (3)		
5 *	88 *	*	*	*	*	*	ロ クロ	26.8	(10.3)	E - (3)		
第1600	*	141 *	*	*	*	*	ロ クロ	22.6	(20.4)	D - (3)		
7 *	105 *	*	*	*	*	*	ロ クロ	22.4	(20.7)	D - (3)		
8 10住2月カマニ	89 土 壁 等	無	不	ロ ケズリ	不	ロ ケズリ	毛 日	11.2	(14.1)			
9 10住1月カマニ	84 *	*	*	ケズリ	*	ケズリ	不	7.9	(20.0)			
第1700	*	85 滅 墓 等	片	有	ロ クロ	ロ クロ	ロ クロ	右 壁 等	12.9	6.8	3.7	B
11 10住8月V-1	27 *	*	*	*	*	*	*	15.1	7.5	4.2	B	
12 10 住 - 1	16 *	*	*	*	*	*	*	14.4	5.5	3.6	B	
13 *	155 *	*	*	*	*	*	*	14.2	6.0	4.0	B	
14 *	156 *	*	*	*	*	*	*	14.1	6.25	3.8	B	
15 *	157 *	*	*	*	*	*	*	15.0	5.5	4.0	B	
16 10 住 分	85 *	*	*	*	*	*	*	14.5	7.4	3.6	S	
17 10住1月カマニ	15 滅 墓 等	寶	口 クロ	ロ クロ	ロ クロ	ロ クロ	右 壁 等	7.4	(12.0)			
第1900	11住 P1-3 - 2	12 土 壁 等	片	片	ハラカガ	ハラカガ	ハラカガ	14.2	5.4	4.8	D - E	
2 *	13 *	*	*	*	*	*	*	15.5	6.4	5.0	D - E	
3 *	14 *	*	*	*	*	*	*	14.6	6.2	4.9	D - E	
4 11 住 - 1	20 *	*	*	*	*	*	*	15.5	6.9	5.2	D - E	
5 *	47 *	*	*	*	*	*	*	13.7	5.4	5.4	D - E	
6 11 住 - 3	45 *	*	*	*	*	*	*	14.7	6.5	4.2	D - E	
7 *	46 *	*	*	*	*	*	*	14.4	6.0	5.2	D - E	
8 11住 P1-3 - 2	50 滅 墓 等	寶	口 クロ	ロ クロ	ロ クロ	ロ クロ	右 壁 等	12.6	7.0	9.3		
第2200	12 住 - 1	107 土 壁 等	不	明	ロ クロ	ケズリ	ロ クロ	不	12.1	7.1	3.4	B
2 12 住 - 1	43 滅 墓 等	片	有	ロ クロ	ロ クロ	ロ クロ	右 壁 等	14.5	6.4	4.6	B	
3 12 住 室	154 *	*	*	*	*	*	*	13.1	6.5	4.3	B	
4 12 住 - 1	44 *	*	*	*	*	*	*	14.6	6.6	4.5	B	
5 12 住 - 2	108 *	*	*	*	*	*	*	13.0	6.5	5.5	A	
6 12 住 - 1	153 *	*	*	*	*	*	*	11.0	6.5	5.5	A	
7 12 住 - 1	41 *	萬	口 クロ	ロ クロ	ロ クロ	ロ クロ	右 壁 等	12.5	7.2	9.4		
8 12 住 - 2	167 *	萬	口 クロ	ロ クロ	ロ クロ	ロ クロ	右 壁 等	14.6	6.6	4.5		
9 12 住 - 1	42 *	萬	口 クロ	ロ クロ	ロ クロ	ロ クロ	右 壁 等	13.0	6.5	5.5		
10 12 住 - 1	166 *	小形萬	有	ロ クロ	ロ クロ	ロ クロ	右 壁 等	12.5	7.2	9.4		
11 12住 P1-1 - 1	39 滅 墓 等	片	有	ロ クロ	ロ クロ	ロ クロ	ヘラカガ	13.9	5.5	4.2		
12 12 住 P1-1	43 土 壁 等	*	*	*	*	*	ヘラカガ	13.1	5.7	6.1	D - E	
2 12 住 P1-1	150 *	*	*	*	*	*	ヘラカガ	14.6	4.35	5.2	D - E	
3 12 住 P1-1	126 *	*	*	*	*	*	ヘナダ	18.5	(8.6)			
4 12 住 P1-1	3 土 壁 等	小形萬	横	ナ テ	ケズリ	ナ テ	ヘナダ	11.5	6.1	8.0	CII(2)	
5 12 住 P1-1	4 *	*	*	*	*	*	ナ テ	10.6	5.3	7.3	CII(3)	
6 12 住 - 3	144 *	萬	口 クロ	ロ クロ	ロ クロ	ロ クロ	右 壁 等	10.3	5.3	5.3	C-II(2)	
7 12 住 - 2	125 *	*	*	横	ナ テ	不	ヘナダ	23.1	(8.7)	A		
8 12 住 室	143 滅 墓 等	片	有	ロ クロ	ロ クロ	ロ クロ	右 壁 等	13.0	6.8	3.5	B	
9 12住 P1-1 - 1	159 *	*	*	*	*	*	*	13.2	5.8	3.6	B	
10 12 住 - 2	133 *	*	*	*	*	*	*	13.9	6.6	4.1	B	

土器觀察表 ②

目次 番号	地 区・場 所	登録 番号	種 別	形名	外 壁 製 法		内 壁 製 法		表面調査	DME	総面積	高 度	幅 度	分類		
					口 縫	縫合	口 縫	縫合								
11	13 住 - 3	149	直 深 瓶	坪	有	口 ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	有	13.05	6.0	4.1	B		
12	13E Pit 1 - 1	151	赤土器	*	*	*	*	*	*	*	13.3	5.8	4.5			
13	13E Pit 2 - 1	164	*	寶	*	*	*	*	*	*						
14	14E カマド - 1	69	土 壤	器	有	口 ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	有	16.0	7.8	3.6	A		
2	14E カマド - 1	119	*	寶	*	*	*	*	*	*	15.8	(7.3)				
3	14 住 - 1	66	直 深 瓶	坪	*	*	*	*	*	*	15.5	9.5	4.3	A		
15	15 住 カマド	118	土 壤	器	無	横 ナ	テ	横 ナ	テ	新毛	19.7	(32.4)	A			
2	*	117	*	寶	*	*	*	*	*	*	22.5	(31.8)	D			
3	15 住 カマド	165	直 深 瓶	寶	*	*	*	*	*	*						
16	15E カマド付近	94	土 壤	器	有	口 ク ロ	ヘラケズリ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	有	16.0	(31.9)	E - 1			
2	16 住 - 1	51	*	寶	*	*	*	*	*	*	15.1	11.0	(2.1)			
3	16E カマド付近	96	直 深 瓶	寶	*	*	*	*	*	*	13.4	8.5	(8.7)			
17	17 住 - 1	7	土 壤	器	坪	*	*	*	*	*	13.5		4.5	D - I		
18	16 住 カマド	21	*	寶	*	*	*	*	*	*	14.4	5.1	4.8	D - II		
2	*	126	*	*	*	*	*	*	*	*	15.9	6.4	5.6	D - II		
3	18 住 - 1	23	*	*	*	*	*	*	*	*	15.1	6.5	5.5	D - II		
4	15 住 - 1	8	*	*	*	*	*	*	*	*	14.6	7.5	4.8	D - II		
5	16 住 - 1	27	*	*	*	*	*	*	*	*	15.2	5.8	4.8	D - II		
6	16 住 - 2	59	*	*	*	*	*	*	*	*	14.9	6.8	4.4	D - II		
7	15 住 - 1	26	*	*	*	*	*	*	*	*	18.3	6.7	4.4	D - II		
8	18 住 カマド	163	*	寶	*	*	*	*	*	*		9.1		A		
9	*	162	*	*	*	*	*	*	*	*			C - (1)			
10	*	161	*	*	*	*	*	*	*	*			D - (1)			
11	18 住 - 1	145	*	有	口 ク ロ	ヘラケズリ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	有	21.7		(18.1)	D - (1)		
12	*	84	直 深 瓶	坪	*	*	口 ク ロ	*	*	*	16.1	6.9	4.3	B		
13	18E 陶窯穴 - 1	25	赤土器	*	*	*	*	*	*	*	13.5	6.3	4.8			
14	19 住 陶 窯	40	土 壤	器	*	*	*	*	*	*	14.0	6.3	4.0	C		
15	20 住 陶 窯 - 1	28	*	*	*	*	*	*	*	*	13.1	5.8	4.2	D - II		
16	24E カマド付近	75	*	寶	黑	横 ナ	テ	ヘラケズリ	横 ナ	テ	ヘラナダ	20.6	(31.1)	B - II		
2	24E カマド - 1	71	土 壤	器	*	*	*	*	*	*	19.4	(6.1)				
3	24 住 カマド	73	*	寶	*	*	口 ク ロ	ヘラケズリ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	25.1	(33.0)	D - (1)		
4	24E Pit 1 - 1	72	*	寶	*	*	口 ク ロ	*	*	*	18.9		(6.5)			
5	25 住 カマド	76	*	*	*	*	*	ヘラケズリ	*	*	*	18.3	(31.8)	D - (1)		
6	25E カマド - 1	78	土 壤	器	寶	*	口 ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	21.5	(34.4)	D - (1)		
7	25 住 カマド	79	*	寶	*	*	口 ク ロ	不 明	ケ タ ゼ リ	*	*	8.5	(22.2)			
8	25 住 陶 窯 - 1	83	直 深 瓶	坪	有	口 ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	13.6	6.9	4.1	B	
9	47E Pit 2 - 1	27	土 壤	器	*	*	*	*	*	*	13.9	(12.9)	B - (1)			
10	27 住 陶 窯	123	*	*	*	*	*	*	*	*	24.4	(15.4)	C - I - (1)			
11	27 住 陶 窯 2	131	*	*	*	*	*	*	*	*	12.5	(6.1)				
12	28 住 陶 窯 - 1	52	*	寶	*	*	有	口 ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	14.0	8.0	4.2	D - (1)	
13	29E カマド - 1	112	*	寶	*	*	*	*	*	*	17.8	(5.1)	A			
14	30 住 - 1	172	直 深 瓶	坪	*	*	*	*	*	*		1				
15	55E 陶窯穴付近	116	土 壤	器	無	横 ナ	テ	ヘラケズリ	横 ナ	テ	新毛	19.1	(33.0)	A		
2	*	114	*	*	*	*	*	*	*	*	16.9	(9.2)	B - (1)			
3	*	115	*	*	*	*	*	ケ タ ゼ リ	ナ	テ	*	13.5	(9.2)	C - II - (2)		
4	*	140	*	*	*	*	*	ヘラケズリ	ヘラケズリ	*	*	17.3	6.6	11.0	C - II - (2)	
5	Pit 17 - 1	58	土 壤	器	坪	有	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	14.2	6.2	4.5	D - II	
6	pit 77 - 1	93	*	*	*	*	*	ヘラケズリ	ヘラケズリ	*	*	14.6	8.0	(4.0)	A	
7	*	32	赤土器	*	有	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	13.9	5.7	4.5		
8	pit 87.2 号 上面	18	土 壤	器	*	*	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	14.1	6.0	5.1	D - II	
9	*	53	*	*	*	*	*	*	*	*	14.6	5.4	4.8	D - II		
10	*	56	*	*	*	*	*	*	*	*	14.8	6.2	4.5	D - II		
11	*	57	*	*	*	*	*	*	*	*	15.9	6.2	5.0	D - II		
12	*	58	*	*	*	*	*	*	*	*	14.5	5.4	4.8	E - 1		
13	*	59	*	*	*	*	*	*	*	*	15.5	6.5	5.0	E - 1		
14	*	55	*	*	*	*	*	*	*	*	15.5	6.5	4.7	E - 1		
15	pit 98 - 3	77	赤土器	直台形	*	*	*	*	*	*	14.9	8.0	6.0			
16	pit 154 - 1	10	土 壤	器	坪	*	*	手縫ヘリ	品 ガ キ	色	品 ガ キ	*	16.1	6.4	5.8	D - I
17	*	11	*	*	*	*	*	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	*	15.7	6.9	5.7	D - II
18	*	48	赤土器	*	*	*	*	*	*	*	13.2	4.9	4.3			
19	*	30	*	*	*	*	*	*	*	*	13.5	4.9	4.2			
20	pit 156	110	*	寶	*	*	*	*	*	*	13.0	7.0	15.2	B		
21	*	1	直 深 瓶	坪	*	*	*	*	*	*	14.4	7.1	3.9	B		
22	*	2	*	*	*	*	*	*	*	*	15.4	6.9	5.4	B		
23	pit 29	192	土 壤	器	*	*	*	*	*	*	14.0	6.0	5.5	D - II		

土器觀察表 ③

田原遺 跡名	地・区・層・位	記録 番号	種別	器形名	外 国 観 察				内 国 観 察				直面網眼	横面 網眼	直面 網眼	横面 網眼	分類
					口	縁	有	口	クロ	ロ	クロ	内					
6620	S 25 - 2 22	土師器	环	有	口	クロ	ロ	クロ	内	リム	ヘラミダ	直面網眼	14.4	5.9	5.5	D - E	
2 L 25 - 1 23	*	*	*	*	*	*	*	*	ヘラミダ	ヘラミダ	直面網眼	*	14.5	6.3	5.1	D - E	
3 *	24	*	*	*	*	*	*	*	ヘラミダ	ヘラミダ	直面網眼	*	13.5	5.8	4.2	D - E	
4 L 44 - 1 67	*	*	*	*	*	*	*	*	ヘラミダ	ヘラミダ	直面網眼	*	*	9.5			
5 R 33 - 1 98	*	*	*	*	*	*	*	*	ヘラミダ	ヘラミダ	直面網眼	*	14.8	5.4	4.6	D - E	
6 L 26 - 2 121	*	*	*	*	*	*	*	*	ヘラミダ	ヘラミダ	直面網眼	*	13.6	5.5	3.8	D - E	
7 M 51 - 1 126	*	*	*	*	*	*	*	*	ヘラミダ	ヘラミダ	直面網眼	*	14.3	6.1	4.3	D - E	
8 R 40 - 1 131	*	*	*	*	*	*	*	*	ロ	クロ	直面網眼	*	13.4	5.6	3.1	D - E	
9 不 明 139	*	*	*	*	*	*	*	*	ヘラミダ	ヘラミダ	直面網眼	*	14.6	11.5	5.5	D - E	
10 N 15 - 1 127	*	*	*	*	*	*	*	*	ヘラミダ	ヘラミダ	直面網眼	*	13.5	8.2	10.6	E - 2	
11 不 明 136	*	*	*	*	*	*	*	*	ヘラミダ	ヘラミダ	直面網眼	*	15.3	B			
12 U 25 - 1 142	*	*	*	*	*	*	*	*	ヘラミダ	ヘラミダ	直面網眼	*					
13 R 37 - 1 68	*	*	*	*	*	*	*	*	ヘラミダ	ヘラミダ	直面網眼	*	18.1			(13.5) C-I-(2-4)	
6640	P 29 - 1 122	土 壤 器	环	有	口	クロ	ロ	クロ	口	クロ	ロ	クロ	直面網眼	10.4	7.1	6.5	B
15 P 36 - 1 123	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	直面網眼	*	13.9	7.3	4.2	B
16 N 32 - 1 129	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	直面網眼	*	13.8	6.9	3.8	B
17 M 34 - 1 132	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	直面網眼	*	13.4	5.2	4.7	B
18 *	125	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	直面網眼	*	13.0	6.9	3.8	B
19 G 25 - 2 165	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	直面網眼	*				
20 X - X 169	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	直面網眼	*			C	
21 R - 30 1 158	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	直面網眼	*	7.1	7.1	B	
22 S 34 - 1 173	壤 壤 器	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	直面網眼	*	9.9			
23 Q 36 - 1 120	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	直面網眼	*	14.5	8.2	5.6	A
24 R 30 - 1 70	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	直面網眼	*	12.9	5.7	4.1	
25 R 33 - 2 5 伴続土器	环	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	直面網眼	*	14.5	4.8	5.1	
26 R 37 - 1 6	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	直面網眼	*	12.7	5.6	4.1	
27 L21层, LS1层	65	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	直面網眼	*	13.7	5.5	4.2	
28 M 24 - 1 130	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	直面網眼	*				

赤焼土器は環と甕とが第13住居跡で土師器環D II類に伴っている。高台付環は他と伴出しない。以上のように、本遺跡出土の土器は、ほとんどが1つのまとまりを示し、他には土師器環A類と須恵器環C類との組み合わせが成立する。それらを表にすると第12表のようになる。

なお、第3群としたものは、共伴関係が不明で第1・第2群のいずれにも含めることができなかつたものである。

ここで、第1・第2群土器のうち土師器を、東北地方南半部における土師器の編年（氏家和典：1967）にあてはめると、第1群土器は国分寺下層式、第2群土器は表衫ノ入式に比定することができる。

また須恵器は現在編年が確立しておらず、位置づけを明確にできないが、共伴関係によってそれぞれの年代に属するものと考えられる。

第11表 固示土器集計表 () 内は堆積土出土

住居 No	土 器 集 合												固 示 土 器						赤 土 器												
	环						甕						混合付环		甕		环			甕		高台付环		盆		盘		环		甕	
	A	B	C	D	E	E _a	A	B	C ₁	C ₂	D	E	A	B	A	B	C	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B		
1																															
2	1																														
3																															
4																															
5																															
6																															
7																															
8																															
9																															
10	(1)																														
11																															
12																															
13																															
14																															
15																															
16																															
17	(1)																														
18																															
19	1																														
20																															
21																															
22																															
23																															
24																															
25																															
26																															
27																															
28																															
29																															
30																															
地土塗付 ビット	17													(1)																	
ビット	77	(1)																													
ビット	87													4																	
ビット	93																														
ビット	154													(1)																	
ビット	156																														
溝	1																														
溝	29													(1)																	
地 塗付 位不明														9	1	1											1	4			

第12表 土器の組み合わせ

	土 師 器			須 恵 器			赤 焼 土 器		
	坏	甕	高台付 蓋	坏	甕	高台付 蓋	坏	甕	高台付 蓋
第1群 A				C	O				
第2群 DⅡ、EⅠ	A・B、CⅠ、CⅡ、D、E			B	O O		O O OB		
(第3群)	B、C、DⅠ		A・B O	A		A・B O		A O	

3. 出土土器に関する問題点

第1群土器

第1群土器の土師器は国分寺下層式に属するものと考えられる。坏はロクロ不使用、丸底、内黒で外面に沈線が巡るものあり、国分寺下層式の坏の特徴（氏家：1967）と一致している。

甕は実測図の作製できたものは全くない。破片はすべてロクロ調整がみられず、A～C類のいずれかに含まれるものが多いと思われる。

また須恵器では再調整として回転ヘラケズリが加えられ、切り離しの不明な坏が出土している。

このように、本遺跡の第1群は土師器坏と須恵器坏とがごくわずかにあるだけで、出土量が圧倒的に少いため、十分に内容の検討を行なうことはできない。

第2群土器

第2群土器の土師器は表形ノ入式と考えられ、本遺跡出土土器の大半を占めている。この群の特徴は製作の過程にロクロ技術を導入している点である。坏はすべてにロクロが使用され、底部の切り離しは、大半が回転糸切りで再調整の加えられていないものであるが、手持ちヘラケズリの再調整が加えられ、切り離し技法の不明なものもみられる。甕の場合には、ロクロを使用したものと使用していないものとが共存しており、数量的には両者ほぼ同数である。

器形は長胴形と鉢形があり、さらに明確な基準による区分はできなかったが、それぞれに大形、小形がある。これらは、それぞれの器形に応じて使用方法が異っていた可能性もある。また最大径が体部に位置するものはあるが、口径と体部径との差はごくわずかなものであり、いわゆる壺形はみられない。

須恵器坏は、底部の切り離しが回転糸切り技法で再調整の行なわれていないもののみである。

赤焼土器は坏と甕がある。土師器・須恵器に較べると出土量は少ない。色調・胎土が須恵器とは異っており、内外面に再調整が全くみられない点で土師器とは区別されるが、胎土・外面の色調ではごく近似したものが多く、焼成方法は土師器と同様なものであろうと考えられる。

土師器・須恵器・赤焼土器の坏について、大きさ($\sqrt{(口徑)^2 + (器高)^2}$)と、口径に対する器高・底径の占める割合の範囲を示したのが第13表である。これでみると、須恵器坏と土師器坏

第13表 壺の法量

	器 高	底 径	大 き さ
土 師 器	0.47~0.24 (0.39~0.27)	0.50~0.29 (0.46~0.37)	13.7~18.8
須 恵 器	0.48~0.25 (0.35~0.25)	0.69~0.38	12.6~19.5
赤 燃 土 器	0.36~0.28	0.47~0.33	13.3~15.4

は差が少ない。これに較べて、赤燃土器壺は、いずれの数値も狭い範囲内にまとまっており、大きさは、全体に小さめのものが多いことを示している。

(第3群土器)

共伴関係が明らかでないために、第1・第2群のいずれにも含めることができないものであり、組み合わせとしての群を成していない。個々に検討を加えることにする。

土師器壺B類は、第1群土器の壺と比較すると、口縁部外面に横ナデが施されている点では異なっているが、内黒で外面体部と内面にヘラミガキが施されている点では共通しており、国分寺下層式に含まれる可能性が強い。

C・D・I・E・F類は、ロクロ使用という点では表杉ノ入式に含まれるものである。

高台付壺・蓋も壺の場合と同様に、ロクロ使用という点では、表杉ノ入式に含まれるものである。須恵器壺A類、高台付壺A類と同様の特徴をもつ土器は、窯跡および官衙遺跡における研究によって前者は8C後半~9C前半、後者は8C後半ごろとされており、また集落跡では国分寺下層式の土師器と共に伴した例がある。

赤燃土器の高台付壺については、他遺跡での例をみると、いずれもロクロ使用の土師器に伴っており、表杉ノ入式期のものと思われる。

4. 遺構の年代

重複関係と出土土器をもとにして遺構の年代を検討すると次のようになる。

国分寺下層式期- 第2住居跡

表杉ノ入式期- 第8・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・23・24・25・28・29住居跡、焼土
遺構第2掘立柱建物跡

国分寺下層あるいは表杉ノ入式期- 第3、27住居跡

国分寺下層式期以降- 第4住居跡

時期不明- 第1・5・7・26・30住居跡、第1掘立柱建物跡

竪穴住居跡は26軒のうち所属時期が明らかなのは国分寺下層式期1軒、表杉ノ入式期18軒である。第8・14・23・29住居跡は、伴出する土器に図示はできなかったがロクロを使用した土師器壺あるいは櫛の破片がみられることから表杉ノ入式期に含めている。第3住居跡からは須恵器壺C類が、また、第27住居跡からは土師器壺B・C・I類が伴出しており、国分寺下層あるいは表

杉ノ入式期と考えられる。第4住居跡は第3住居跡を切っており、国分寺下層式期以降と限定される。また、時期不明の第1・5・7・26・30住居跡は、構造からみて古代のものであることは明らかである。

焼土遺構は第15住居跡廃棄後、堆積土の流入する以前に構築されており、表杉ノ入式期としてさしつかえないものと思われる。

掘立柱建物跡は、第1建物跡が柱穴の掘り方埋土から土師器・須恵器の小破片が出土しており、古代のものと考えられる第2建物跡がロクロ使用の土師器壺が出土しており表杉ノ入式期のものと思われる。

5. 遺構の問題点

(1) 住居跡の構造

26軒の竪穴住居跡について、平面形、規模とカマド、柱穴、周溝、貯蔵穴などの施設の特徴を個々に検討し、さらにそれらを総合して、住居の構造をみてみる。

平面形

すべての方形を基調としている。全体の形が判明したのは16軒で、正方形、長方形、ひし形とに分かれる。長方形が半数以上を占め、正方形とひし形がほぼ同数である。正方形、長方形ではゆがんだものが多く、また相対する辺の長さが異って台形に近いものもある。

正方形- 第10・12・13・30住居跡

長方形- 第5・8・14・16・19・24・27・28・29住居跡

ひし形- 第15・23・25住居跡

規模

住居内面積が計測し得たのは16軒である。面積は最小の約5.9m²から最大の約27.8m²まで非常に差があり、その範囲内で特にまとまりはない。10m²未満が1軒、10m²以上20m²未満が10軒、20m²以上が5軒である。

10m²未満- 第14住居跡

10m²-20m²- 第8・9・10・12・15・16・19・25・29・30住居跡

20m²以上- 第13・23・24・27・28住居跡

柱穴

主柱穴が確認された住居跡は4軒だけであり、本数は2本の場合が1軒、3本が1軒、4本が1軒である。2本検出されたのは第7住居跡で、住居跡自体が北半部しか確認されていないので、全体の実本数は不明である。また本遺跡の特徴としては、柱穴のない住居跡の多いことがあげられる。なお壁柱穴の可能性があるピットが検出された住居跡が3軒ある。

周溝

周溝が検出された住居跡は 18 軒である。カマドの部分を除き、また住居跡の確認範囲でみると全周するもの、一部が途切れるがほぼ全周するもの、部分的にみられるものの三種類がある。全周するものは 7 軒あり他より幅が広く、深い。また第 24 住居跡では 1 辺の周溝に人為的な堆積土がみられる。一部が途切れるものは 1 軒あり、幅が狭く浅い。部分的にみられるものは 10 軒あり、幅はごく狭く浅い。

全周する- 第 4・5・7・18・23・24・25 住居跡

一部途切れる- 第 8 住居跡

部分的にある- 第 1・2・9・12・13・19・20・26・28・30 住居跡

カマド

カマドは 14 軒で検出されている。軸方向、付設位置と地形との関係、構築方法について検討する。

軸方向- カマドの軸線が示す方向は、4 方向に分けることができる。東を向くものが最も多く 8 軒、北東と南南東を向くものが同数で 3 軒づつ、北西を向くものが 1 軒である。

東	- 第 8・10(2 号)・13・14・16・18・25・27 住居跡
北 東	- 第 9・12・19 住居跡
南 南 東	- 第 10(1 号)・24・29 住居跡
北 西	- 第 15 住居跡

構築方法- カマド本体の構築方法には、粘土貼り付け、削り出し、えぐり込みの 3 つの方法があり、さらにそれらの組み合わせで構築されているものを含めると 5 種類に分かれる。粘土を貼り付けて側壁を構築しているものは 8 軒で最も多い。

付設位置と地形との関係- カマドの住居内における位置を地形との関係でみると、住居跡が斜面にある場合、カマドは斜面上方に位置するものが 4 軒、斜面の方向に直交するもの 5 軒で斜面下方に位置するものはない。また住居跡が平坦面に位置するものが 7 軒ある。

斜面上方- 第 9・16・18・19 住居跡

直 交- 第 8・15・23・24・25 住居跡

平 坦 面- 第 10・11・12・13・14・27・28 住居跡

削り出しのものは地山を掘り残して側壁を削り出してあり、2 軒みられる。えぐり込みのものは、住居の壁を外側にえぐり込んでおり 3 軒みられる。また本体奥半分をえぐり込み前半分を削り出し、あるいは土器を芯にした粘土貼り付けにより、構築しているものが 1 軒づみられる。

粘土貼り付け	- 第 10(1号)・2・14・18・24・25・27・29 住居跡
削り出し	- 第 8・23 住居跡
えぐり込み	- 第 10・15・19 住居跡
えぐり込み+粘土貼り付け	- 第 16 住居跡
えぐり込み+削り出し	- 第 9 住居跡

貯蔵穴状ピット

貯蔵穴状ピットは6軒で検出されている。平面形は橢円形と方形があり、前者が多く5軒でカマドの右側にあり、後者は1軒でカマドの左側にある。

その他の施設

住居に伴う施設には以上の他に溝と炉がある。

溝は6軒で検出されている。住居内にのみられるものと、住居外までのびるものとがある。住居外にのびるものには、床面を横切りさらに住居外に続くものと、壁あるいは周溝から住居外に続くものとがある。また溝が壁をトンネル状にくり抜いた穴として残存するものが3軒みられる。溝底面の高さが住居内ではほぼ水平であるが、住居外ではだいに低くなることから排水溝と考えられる。

炉は1軒でのみ検出されている。床面が焼けただけのものである。

以上のような住居跡の構造を項目ごとに検討してみた。それらの結果をまとめると第14表のようになる。この表によって、各項目の組み合わせで個々の住居跡をみてみれば種々多様であり、類別できるほどのまとまりを認めることはできない。つまり、個々の項目については数種類のグループに分けることができるが、それをまとめた形で一軒の住居跡の内容を示してみると、ほとんど個々の住居跡ごとに内容が異っている。

このことは本遺跡の住居跡が、平面形・規模・内部施設などについて種類が多く、それらが複雑に組み合って個々の住居跡が成り立っていることを示しており、またそれらが特徴であると考えられる。

平面形および内部の施設は、基本的には同時代の住居跡に普遍的なものである。平面形はすべて方形を基調としているが、「ひし形」のものをはじめとしてゆがんだ形態のものが多い。基模は最大から最小まで差が大きいが、まとまりを示さない。柱穴は検出されない住居跡が大半であり、周溝は形態が多様である。カマドは方向・位置・構造とも種類が多い。またカマドが検出されていない住居跡も多いが、それは、調査区全体に攪乱が激しく、住居跡の保存状態の良くないことによるものと考えられる。貯蔵穴・炉のみられる住居跡は少ない。また住居外までに続く排水用と考えられる溝の存在は本遺跡の住居跡の大きな特徴である。

(2) 掘立柱建物跡

2棟発見されている。いずれも2間×3間の内部に柱穴をもたない建物跡であるが、柱間隔や柱穴掘り方に違いが認められる。2棟は重複するが新旧関係は不明である。

また、住居跡群との位置関係をみると、建物跡は住居跡との重複はみられず、住居跡は建物跡の存在する部分とその周囲を除いて分布する。

これらのことから、掘立柱建物跡は、集落内で一定の独自の空間を占めていたものと思われる。その性格としては倉庫あるいは集落内における有力者の住居といったことが想定され、また2棟の建物跡で規模が異なることは存在した期間あるいは性格の違いによるものと思われる。

(3) 焼土遺構

同様の遺構は、金成町佐野遺跡、高清水町五輪C遺跡などにみられ、近年類例が増加している。その多くは古墳時代から平安時代までの集落跡内で発見されているが、出土遺物がごく少いこともあって、性格・時期はいまだ明確にされているとはいえない。

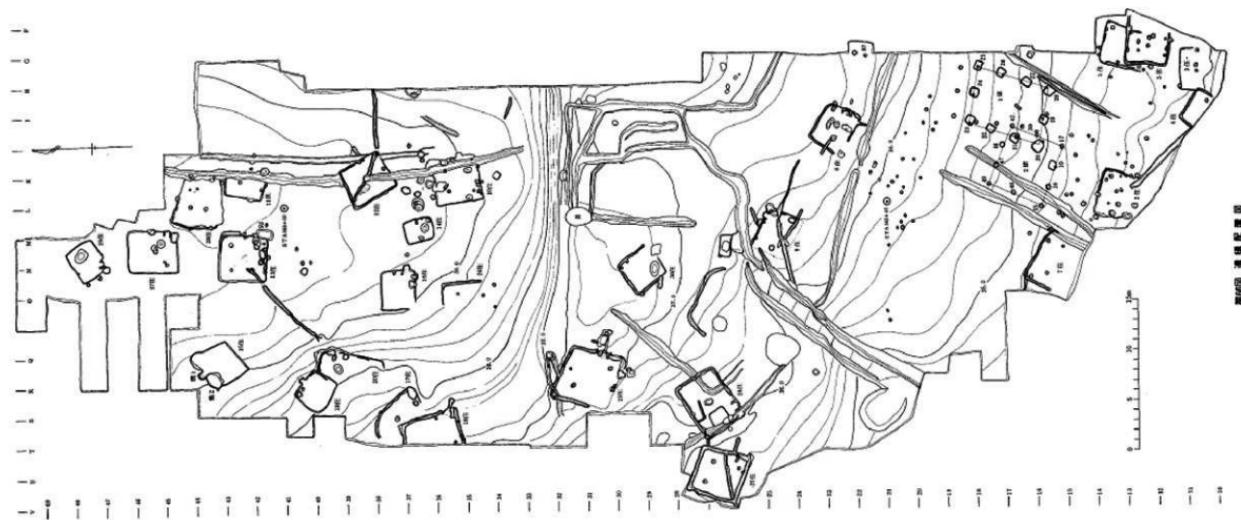
本遺跡の場合は、住居跡との重複関係から所属時期は表杉ノ入式期と考えられる。性格については、遺構に伴った遺物もなく明確にできない。また「竪穴部」とした空間は、火を使用したそばで、何らかの用途に利用されていたことも考えられる。

V まとめ

1. 遺跡は丘陵裾部の南緩斜面に立地している。
2. 今回の調査の結果、竪穴住居跡25軒、掘立柱建物跡2棟、焼土遺構2基、ピット・溝多数などが発見された。
3. 遺構の多くは平安時代に属するものであり、同時期には、住居跡群の分布する中に、掘立柱建物跡が一定の独自の空間を占めている。
4. 遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、瓦、土製品、石製品、鉄製品などが出土地している。奈良・平安時代のものが大半である。

引用・参考文献

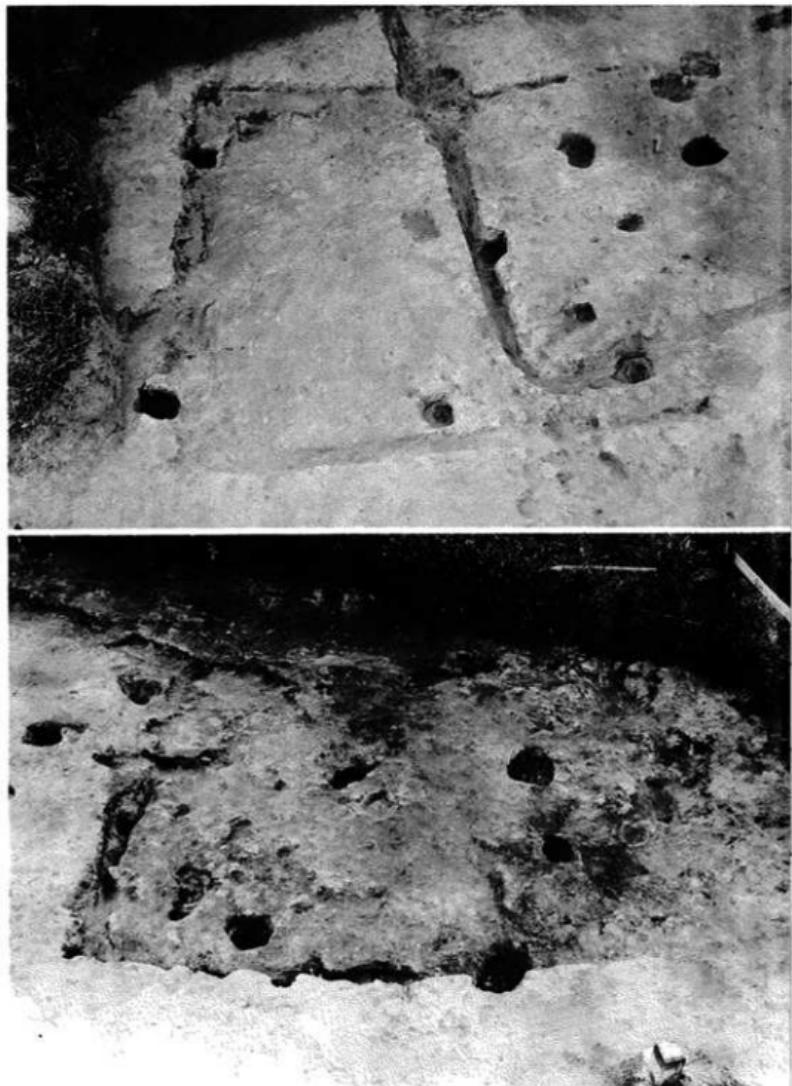
- 阿部義平：1968「東国の土師器と須恵器- 多賀城外の出土土器をめぐって-」『帝塚山考古学No.1』
- 小笠原好彦：1976「東北地方における平安時代の土器についての二・三の問題」『東北考古学の諸問題』
- 岡田茂弘・桑原滋郎：1974「多賀城周辺における古代环形土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究紀要 I』
- 加藤孝：1954「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集V』宮城学院女子大学
- 桑原滋郎：1969「ロクロ土師器環について」『歴史第39輯』東北史学会
- 桑原滋郎：1976「須恵糸土器について」『東北考古学の諸問題』
- 工藤雅樹・桑原滋郎：1972「東北地方における古式土器生産の展開」『考古学雑誌第57巻第3号』日本考古学会
- 小井川和夫・手塚均：1978「糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査路報（昭和52年分）・宮城県文化財調査報告書第53集』宮城県教育委員会
- 多賀城跡研究所：1971「多賀城跡- 昭和46年度発掘調査概報」『宮城県多賀城跡研究所年報1970』宮城県教育委員会・多賀城跡研究所
- 藤沼・白鳥・高野：1972「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（白石市：柴田郡村田地区）- 東山遺跡」『宮城県文化財調査報告書第25集』宮城県教育委員会



第14表 住居階集計表

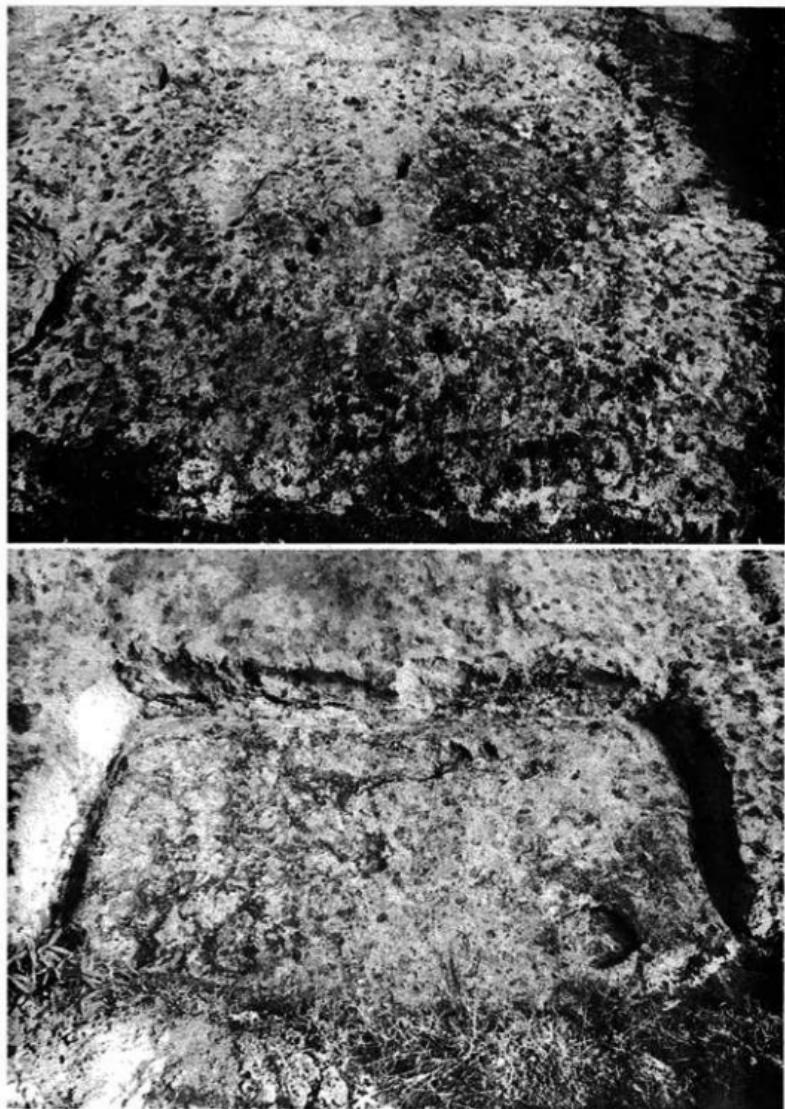
住居番号	面積	間	横	間隔	主柱穴	間	横	住居方	内文	間	通	通り点ピット	間隔	方法	貯	壁	床	梁
1 万形								一	筋									
2 万形	50	4.74						—	筋									
3 万形	50	4.10						—	筋									
4 万形	50	3.60						全	体									
5 万形	60	4.00						全	体									
6 欠																		
7 万形	60	4.70						全	体									
8 万形	4.36×3.44							5.00	5.00	5—46° — E								
9 万形	4.34×3.50							—	筋	筋道上	N—39° — E							
10 正方形	4.33×4.34							4		筋道上	E15°—E							
11 万形	50	4.2																
12 正方形	4.34×3.96							17.131		平田道	N—55° — E							
13 正方形	4.37×4.44							20.712	4	—	筋	筋道上	—					
14 正方形	3.90×2.38							5.049		平田道	N—77° — E							
15 万形	3.90×2.38							14.305		筋道上	N—43° — W							
16 万形	3.38×2.38							22.945		筋道上	S—34° — E							
17 万形										筋道上	S—34° — E							
18 万形	50	5.30						全	体	筋道上	S—77° — E							
19 万形	3.35×2.1							10.444		—	筋	筋道上	N—38° — E					
20 万形	50	6.30						—	筋									
21 欠																		
22 欠																		
23 ひし形	5.55×3.10							27.826		全	体	筋道上	S—77° — E					
24 ひし形	5.55×3.40							22.697		全	体	筋道上	S—34° — E					
25 ひし形	4.40×2.26							16.524		全	体	筋道上	S—77° — E					
26 万形								—	筋									
27 万形	4.37×4.06							19.096		平田道	S—46° — E							
28 万形	4.34×4.06							24.444	3	—	筋							
29 万形	3.34×2.05							10.657		平田道	S—34° — E							
30 正方形	3.63×2.36							12.176		—	筋							
31~34 欠																		

写 真 図 版



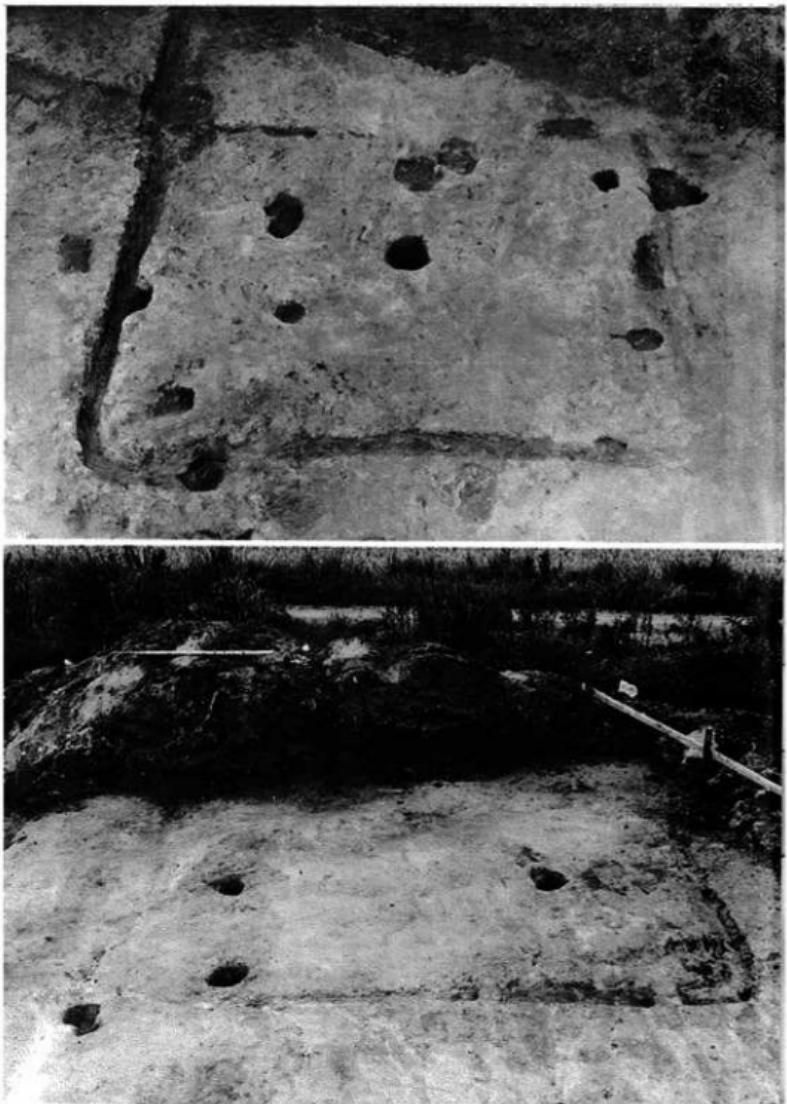
上、第1住居跡（西より） 下、第2住居跡（北より）

図版1 第1、2住居跡



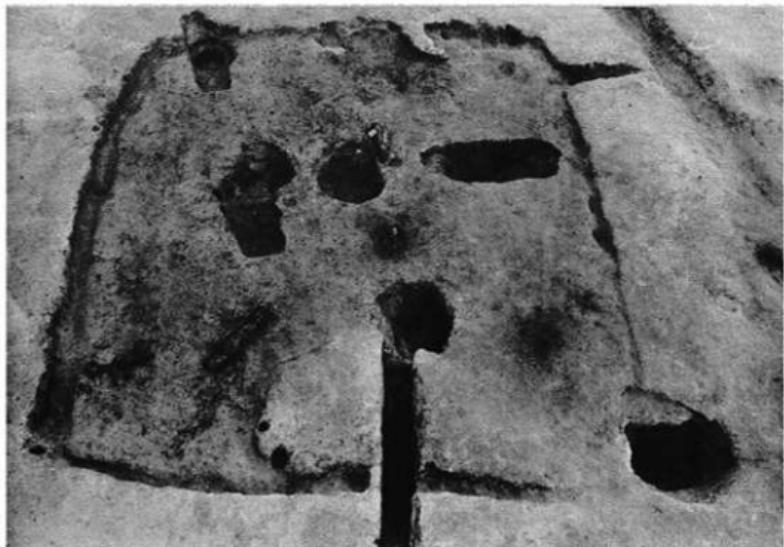
上. 第3住跡路 (南より) 下. 第4住跡路 (南より)

図版2 第3, 4住居跡



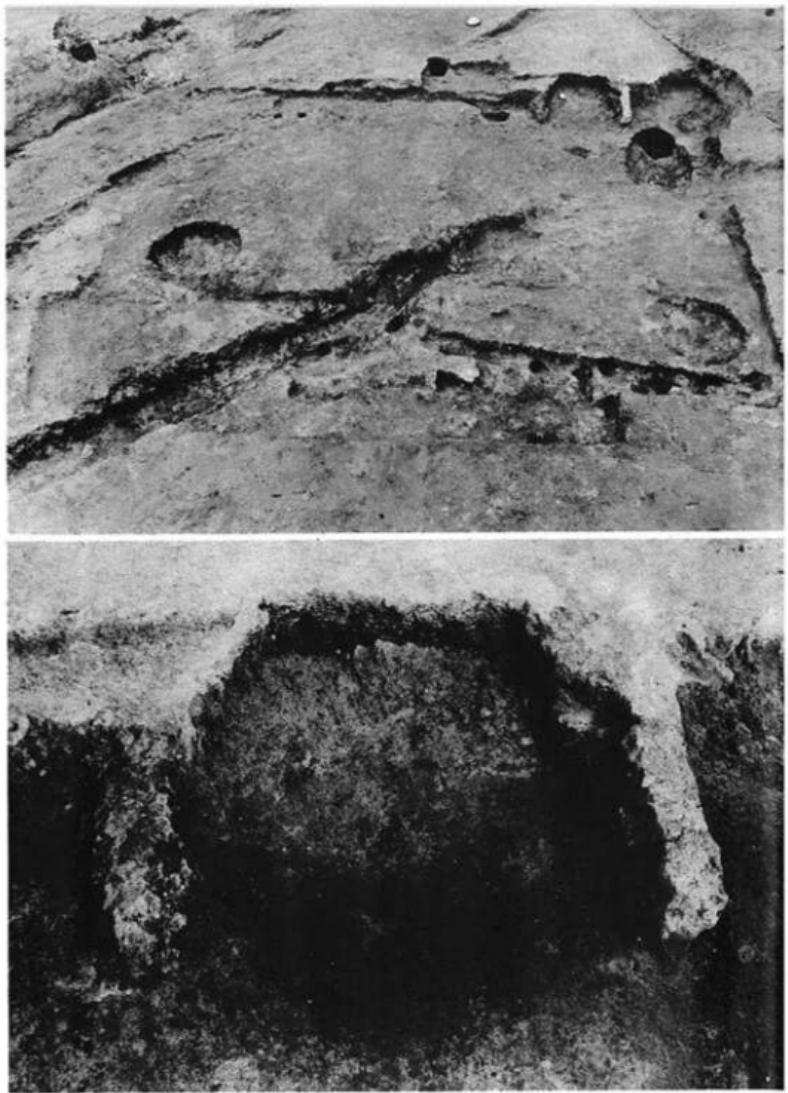
上、第5住居跡（西より） 下、第7住居跡（北より）

図版3 第5、7住居跡



上、全体（西より） 下、カマド

図版4 第8住居跡



上、全体（雨より） 下、カマド

図版5 第9住居跡



上、全体（北より） 下、カマド

図版6 第10住居跡



上。全体（西より） 下。断続穴状ビット

図版7 第11住居跡

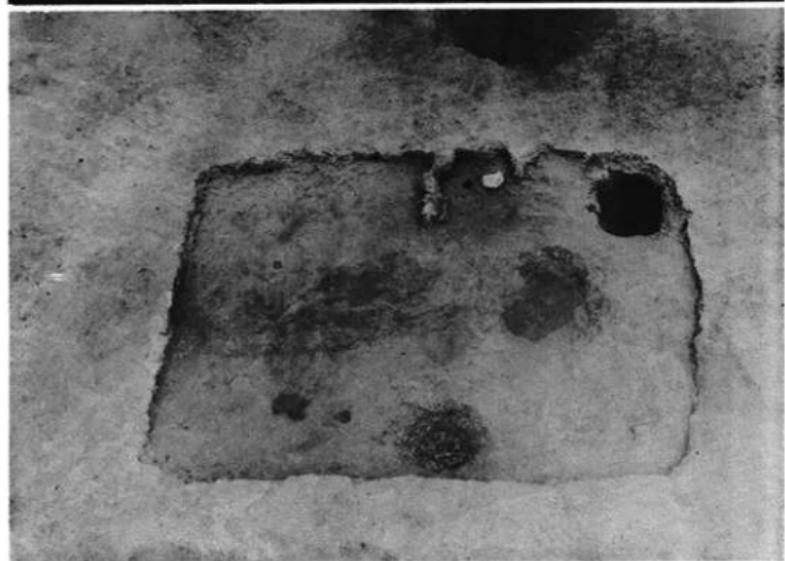


上. 全体 (西より)

下. 潟 (2)

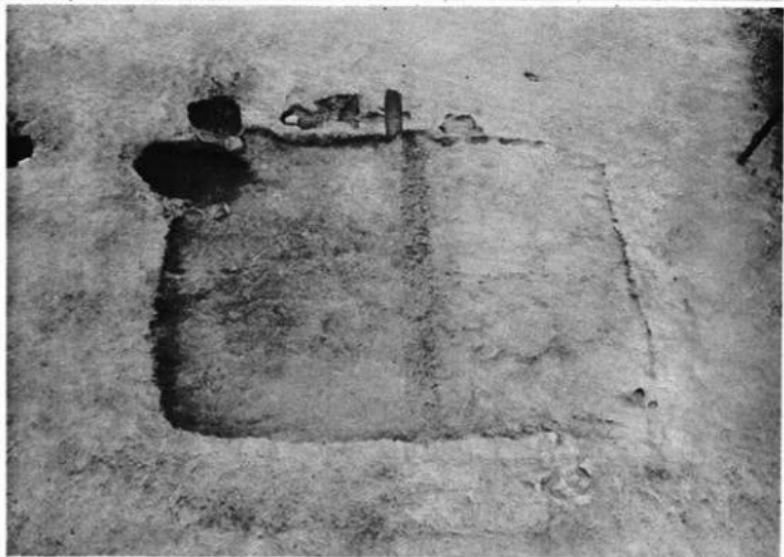


図版8 第12住居跡



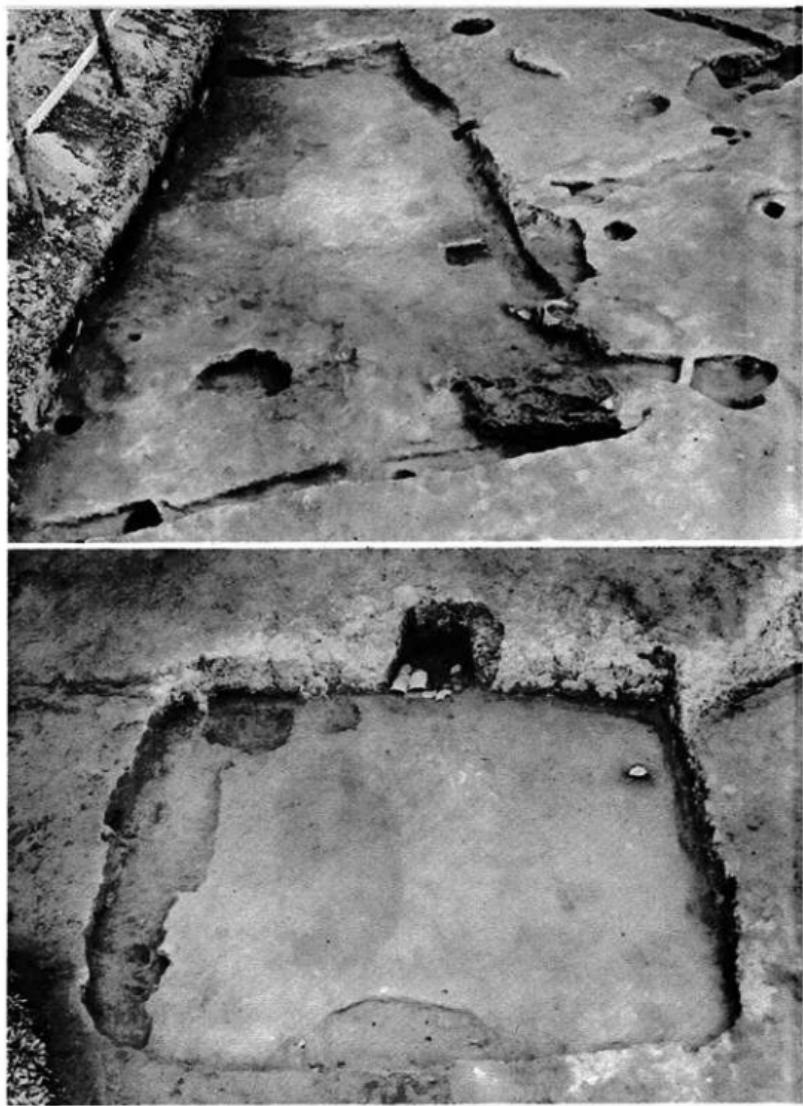
上、第13住居跡（北より） 下、第14住居跡（西より）

図版9 第13、14住居跡



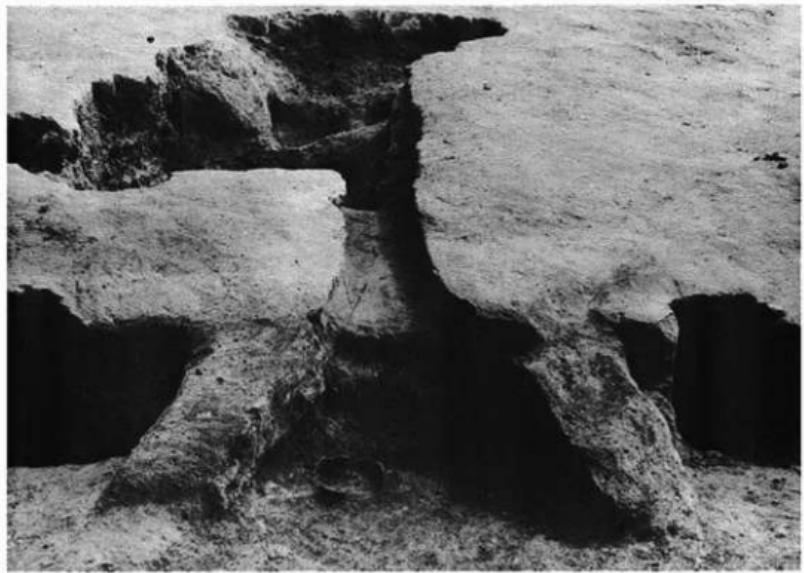
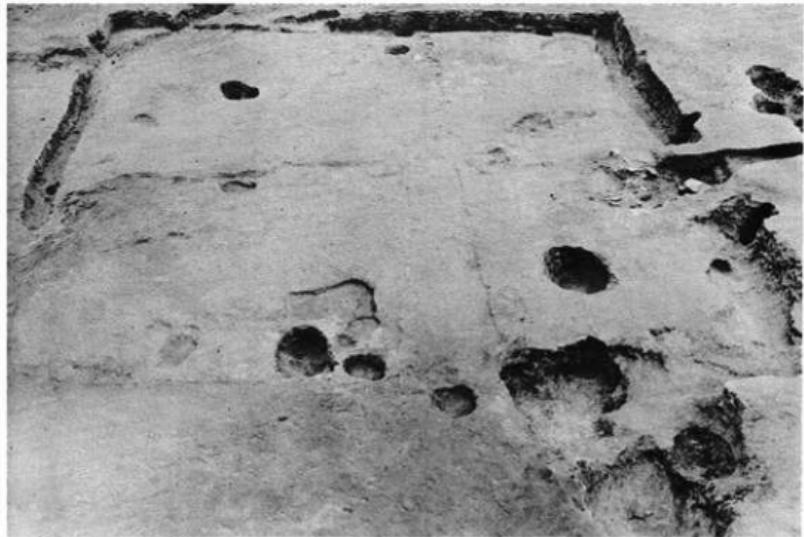
上、第15住居跡（南より） 下、第16住居跡（北より）

図版10 第15、16住居跡



上、第18住居跡（南より） 下、第19住居跡（南より）

図版11 第18、19住居跡



上、全体(南より) 下、カマド

図版12 第23住居跡

上、全体（西より）



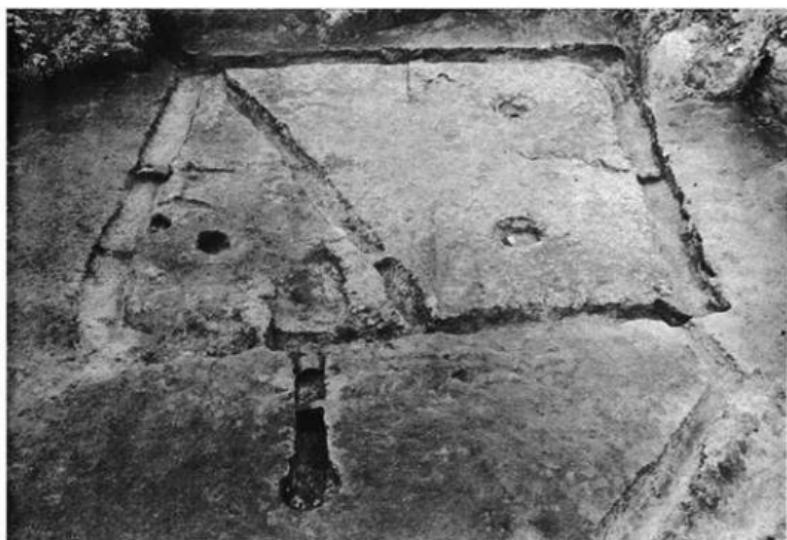
中、カマド



下、階溝内埴積土
(北辺)



図版13
第24住居跡



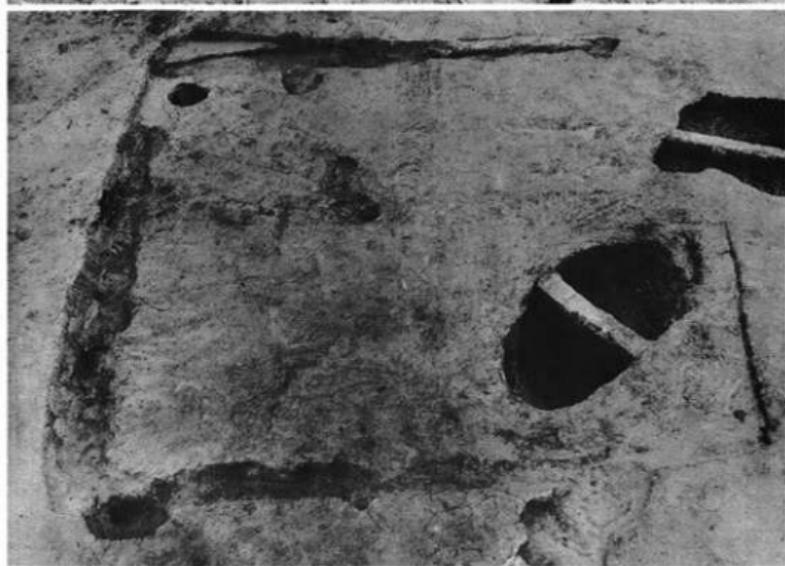
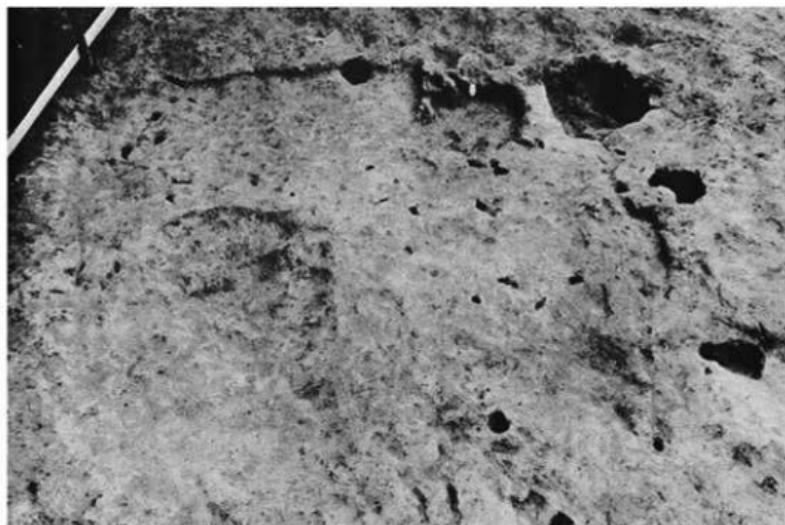
上、全体（東より） 下、カマド

図版14 第25住居跡



上、第22住居跡（北より） 下、第28住居跡（西より）

図版15 第27、28住居跡



上、第29住居跡（北より） 下、第30住居跡（西より）

図版16 第29、30住居跡

上、第1掘立柱
建物跡
(南より)



中、第1掘立柱
建物跡
(西より)



下、ビット93
掘立柱建物跡ビット



図版17
掘立柱建物跡ビット



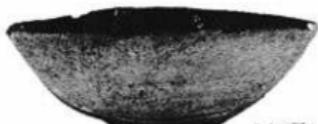
图版18 出土遗物 土器



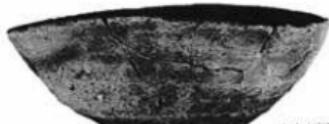
1:37图1



2:59图16



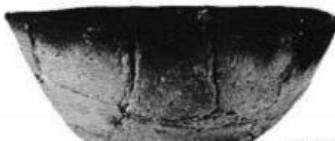
3:62图1



4:62图9



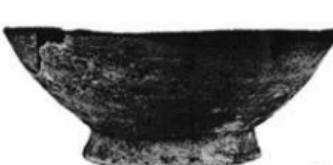
5:32图1



6:58图10



7:26图1



8:62图11



9:30图2



10:59图19

圖版19 出土遺物 土師器



圖版20 出土遺物 須惠器



1 : 63回21



2 : 21回7



3 : 21回9



4 : 24回12



5 : 21回11



6 : 28回3

図版21 出土遺物 須恵器・赤焼土器